

---

# HARUNE

AKIRITA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H A R U N E

### 【Nコード】

N 2 5 5 3 Y

### 【作者名】

A K I R I T A

### 【あらすじ】

高校一年の少年 歩大尉<sup>ほおい</sup>は祖母、葉瑠音と二人暮しだが、その祖母がある組織に狙われ、同級生の実芦と共に事件に巻き込まれていく。きっかけは小さな事件であったが、その裏には人類存亡を揺るがす重大な秘密があった。国家秘密組織バースはクローン技術によりその危機を回避しようとしていたが、いまだ完全な人クローンを作り出せずにいた。過去のクローン研究所爆発により多くの技術を失っていたからだ。しかしその研究メンバーで爆発事故を逃れた一部の者は、すでに“誕生”の名目で完全体“人”クローンを完成さ

せていた。しかもその精神をすべて管理捜査する知識まで得ることに成功する。その精神管理の重要な鍵を握るのが葉瑠音であるのを突き止めた元研究メンバーの組織は葉瑠音とその周辺人間たちを誘拐してゆく。

葉瑠音たちと、組織、そして国家組織との攻防、さらに所在が不明の歩大尉の両親の意外な存在までが明かされてゆく。

## 一部（前書き）

初めての小説です。思うままに書いてみました。  
読んでいただければ幸いです。

今後はこの中の登場人物をこれからいろんな作品で成長させてみようと  
思っています。

## 一部

H A R U N E

### 1 歩大尉ほおい

朝の日差しはカーテンの隙間から入り込むと、部屋の中を明るく照らし出し、一日の始まりを教える。

歩大尉ほおいはそれに答えるように上体を起こし、両手を挙げると背伸びをした。

窓の外からは都会に住み着いた小鳥達のさえずりが目覚めの号令のように駆け回る。

せきたてられるようにベッドから立ち上がり身支度を済ませる。

朝食の準備をするのだ。

キッチンで自分と祖母の葉瑠音はるねの分を用意し昼の弁当も一緒に作る。料理は得意な歩大尉であった。

先に一人で朝食を済ませると弁当と授業道具を鞆に入れる。

葉瑠音はまだ自分の部屋にいる。きっとまだ深い闇の中を瞑想しているのだろう。

「行つてきます」

玄関に向かいながら葉瑠音に声をかける。返事はないが聞こえているはずだ。

今朝は準備に手間取ったせいで遅れ気味だ。

荷物を抱え玄関を出る。

見上げれば外は雲ひとつない快晴だ。

そしてさわやかな風が吹き抜けていった。

急いで坂を降りて行くと、いつもの路地に高校の制服姿が見えてきた。

実芦みろだ。

「おはよう、ボウイ」

小柄だが元気いっぱい手を振って長い黒髪のポニーテールを揺らしている。

幼馴染の女子高生で隣のクラスだ。家も近いのでいつも一緒に通う。そして荷物を手渡す。

「ありがとう」

実芦に渡したのは昼の弁当で、自分の分と一緒に実芦の分も作っておく。

「急ぐよ、出席に遅れない様にしないと。うちのクラスの担任は遅刻にはきびしいからな」

歩大尉が焦る様に言々と実芦は頷いて早足になった。

担任の稲津は几帳面なうえに、ヒステリックな教師で、遅刻にはとにかくうるさい。

自宅から校舎まではたいした距離はないが、その近さゆえに返って甘く見てしまうのだ。

ばやばやしているとあつという間に時間切れだ。

校舎に近づくと同じ様に数人の生徒たちが校門を目指している。

そんな生徒たちを追い抜きながら、見た目よりずっと運動神経のいい実芦と、

まるで競争のように校門を走り抜け、一気に校舎内へ、そして昇降口で靴を履きかえると、

「じゃあ、後で」

先頭に行く実芦が二本指を立てて敬礼のようなしぐさをしつつ、振り向きながら言う。

そのまま階段から廊下、そして1 - Bの教室に入って行った。

歩大尉は1 - Aの教室へ、そして自分の席に着地。何とか間に合った。

いつものように稲津が出席を取り終わると一時限目が始まる。教科書を広げ、昨日の予習を思い出してノートを書き出した。

葉瑠音は雨戸を閉めたままの薄暗い部屋の中で集中状態から、精神を開放し一息ついた。

ゆっくりと立ち上がるとドアを開け明るいうちに出る。

すっかり日が昇り小鳥達の時間は終わり、日常生活の騒音が聞こえ始めていた。

正面の棚には写真があり、満面に笑みの子供が飛び込んでくる。

小学生の歩大尉が夏休みに田舎の親戚の世話になった時のもので、同級生の女の子と並びその周りを数人の大人たちが取り囲むように立ち、

画面いっぱい幸福感を湛えている。

歩大尉は今では高校に通うようになり、その写真からはすっかり大人びて来た。

それに伴って最近はその笑顔の回数が減ってきたと葉瑠音は思った。物心ついた頃にはすでに両親と離れ離れになってしまい、気が付けば無口な年寄りと二人きりでは、

気持ちも沈むであろう。

だからといって特別扱いしないのが、葉瑠音の性分なので、この年寄りには子供が親に向かって素直に甘えるようなことも、やさしさに対する期待も歩大尉には無いようだった。

キッチンで歩大尉の用意した朝食を食べ終わると、葉瑠音はまた精神統一をするため部屋にこもった。

これはいつもの習慣で、精神を集中し体内のエネルギーの流れを整えることにより、

自然のエネルギーをも自分に取り入れる事が出来るのだ。

葉瑠音が実年齢よりかなり若く見えるのはこのお蔭でもある。

ところが最近、葉瑠音が感知する外的精神の流れが乱れてきている。

過去にも度々、世の中の変化がある時に何らかの揺らぎが生じる事もあったが、

近頃のこの精神エネルギーのぶれは、今までに経験したことのない

乱れ様で、

きっとこれは大きな変化の兆しかもしれない。

大抵のことでは動揺しない葉瑠音であったが、今回ばかりは落ち着いていられそうもなかった。

校内のチャイムが6時限目の授業の終わりを告げると、歩大尉はため息を吐いた。

ふと廊下側をみると教室の後ろの出入り口に実芦が立っていた。小さくVサインをしている。

歩大尉はすぐに授業道具を鞆に入れると、クラスの友人に別れの挨拶をして、

実芦が待つ出口から廊下に行く。

そしてそのまま校門まで二人で歩き学校正面の道路に出た。

「今日は、どうするの？」

鞆を右手に下げ、歩大尉の方を見上げながら、実芦が話しかける「シヨッピングモールに行こうか？」

歩大尉が答える。

「じゃあ、いつものコーヒー店ね」

うれしそうに歩きながら実芦が言った。

「コーヒーが好きで、ケーキ系の甘いものや、スパイスの効いた調理パンなども食べる。」

続けて実芦が言う。

「今日は、私がおごってあげるね」

「ああ、ありがとう」

今週はハルの機嫌が悪く、小遣いをもらい損ねていたので、ちょうどよかった。

ハルとは、祖母の葉瑠音のことだ。

学校からそのシヨッピングモールに寄ると自宅に帰るには遠回りになってしまうが、

何時もの事なのでたいした気にはならない。



コーヒー店はショッピングモール内の入り口付近にある。

「何にする？」

店先に着くと実芦が、オーダーの確認をしてきた。

「いつものでいいか」

「では、ボウイはブレンドコーヒー、で私はエスプレッソね、あとそのチーズケーキ2つお願いします」

店員に席の位置を教えて、小さなテーブルを挟んで向かい合わせに椅子に座る。

オーダー番号の札をテーブルの上に置き、その隣に鞆から出したノートを置きながら実芦が話しかける。

「今日は、宿題があるんだ、ちょっと片付けてもいいかな」

実芦は雑音や人ごみがまったく気にならないようで、

いつも勉強や宿題の大半をこういった店のなかでこなしてしまう。

「ああ、かまわないよ 別に特別な話題もないし」

その言葉に頷くとペンを片手に課題のプリントと何時も持ち歩いている参考書とを見比べながら

実芦はノートを書き出した。

しばらくして、店員がコーヒーとケーキを持ってきた。

「おまちどうさま、ご注文の品です、ごゆっくりお召し上がりください」

「ありがとう。ボウイ、食べよ」

歩大尉の分を差し出しながら、実芦が言った。

高校に入学して一ヶ月が経とうとしているが、

幼馴染の実芦とこうして過ごしているのが不思議な感じた。

違和感がまったく無く、実芦が側に居るだけで落ち着いて居られる。同級生なのに親のように自分の事を見守っていてくれるような気がするのだ。

両親が居ない事が実芦の存在にそんな期待を持ってしまうのか。

それとも実芦自身のあえて何も要求せずただ一緒にいてくれる、

そんな態度が自分にそんな感情を持たせるのか。  
実芦がノートにペンを走らせるしぐさを眺めながら歩大尉はそんな  
思いに浸っていた。

コーヒーを飲み終えて、ふと実芦の後ろの方を見た。

歩大尉は壁際に座っていたので、外の様子は店のガラス越しによく  
見えた。

向かいの路上に大きめのグレーのワンボックスカーが止まり作業員  
風の二人が降りてきた。

彼らは辺りを見渡すと、歩大尉たちの居るコーヒー店に入ってきた。  
二人とも同じブルーの作業着の上下を着ていた。

一人は大柄で作業着と同じブルーのキャップ帽を長髪の上に深くか  
ぶっている。

キャップ帽のつばのせいで、あまり表情はわからない。

もう一人のほうは、帽子はかぶってはいいないが、薄茶色のサングラ  
スをかけている。

背はキャップ帽の男より少し低く、かなり身体は細いようだ。

彼らは店内のカウンターでオーダーを終えると、入り口近くの席に  
座り二人で何かを話し始めた。

店の雑音で内容は聞きとれないが、男たちの雰囲気では真剣な話ら  
しい。

「ケーキ食べないの？」

宿題が一通り終わり、ノートを片付けながら、実芦が聞いた。

「あつ、これ食べる？ かまわないよ、ほら」

歩大尉が差し出したケーキ皿に、うれしそうに手を伸ばしかけた  
が、すぐに腕を組んで、

「でも、やめとく。一度には食べすぎかもね」

残念そうに、ケーキに視線を落とす実芦が気の毒に感じたのか、  
逆に歩大尉は急いでその目の毒を一気に食べてしまった。

「あー、美味かった、これでさっぱりした」

あわてて飲み食いする様子を見て、実芦は下を向きながらくすくすしていた。

「何も、そんなに急がなくてもいいのに、口が汚れているよ、ほら」  
テーブルに置いてある紙ナプキンで歩大尉に手渡すと、実芦はノートを鞆にしまいながら、

立ち上がって、歩大尉の耳元にささやくと店の奥の化粧室に歩いていった。

渡された紙ナプキンで口元と制服を軽くぬぐいながら、歩大尉は先の作業員風の男たちに視線を向けた。

なにやら言い争っているようで小さなしぐさではあるが、それは尋常ならない雰囲気が見てとれた。

次の瞬間、キャップ帽がテーブルのコーヒーカップを片手で払いのけた。

落ちたカップが割れる音と同時に、キャップ帽はすばやく相手の顎めがけて、

その硬く握られた拳を当てた。

サングラス男はいきなり襲い掛かれて、たまらず椅子ごと後ろに倒れた。

一瞬で店の中は騒然となった。客は全員総立ちになり、入り口近くの者は店の外に出ようと慌て、

残りの客も今まさに男たちを避けて、同じく外に逃げ出そうとしている。

キャップ帽がそのまま倒れたサングラス男に襲いかかるうとするが、サングラス男は横に一回転して身をかわすと、逆にキャップ帽の腹めがけて強烈なキックを見舞わせた。

キャップ帽は後ろの壁まで飛ばされ背中を壁に打ちつけた。

そしてそのまま床に倒れると思われた瞬間、両足でしゃがみこむような姿勢をとり、

素早く身体を伸ばすと勢いよくサングラス男の胸元に頭から飛び込

んだ。

その場に立ち上がっていたサングラス男は避ける間もなく、キャップ帽もろともカウンターの前に落下した。

食器類は一瞬にして床に散乱し彼らの周りに飛び散った。

一連の物音にきづいて、実芦が奥から歩大尉に駆け寄ってきた。

「大変、ボウイ、そのスイッチ押しして、早く」

実芦の指差すほうに、非常ボタンがあった。

迷わず押すと店内には耳を覆いたくなるような警報音が鳴り響いた。  
「ちっ！」

キャップ帽が今まさにサングラス男の息の根を止めようと、むなぐらを押さえていた手が、一瞬緩んだ。

辺りを素早く見回しこの警報音のきっかけを作った歩大尉を見つけ睨み付けた。

その目はまるで獲物を狙う猛獣の様に見えた。

その鋭いまなざしに狙われて歩大尉の中に痺れる様な感覚が走ると、身体が硬直し動けなくなった。

「どうしたの、ボウイ！ しっかりして」

気が付くと、実芦が歩大尉の腕をつかんで、激しく揺すっていた。

キャップ帽はカウンターのなかで、苦しんでいるサングラス男の作業着の中をまさぐっていた。

サイレンの音が響き一台のパトカーが向かい側の道路につくと、開いたドアから二人の警官が素早く降りてきた。

野次馬たちは一瞬にして道を開けると警官はそのまま入り口を目指して駆けて来る。

サイレンと人々の動きに気がついたキャップ帽は、

やおら立ち上がり店の入り口に向かって走り出ようとした。その手には手紙のような紙を握っていた。

しかし一瞬、警官達が早く店に駆け込んできた為、鉢合わせになっ  
てしまった。

キャップ帽は迷わず一人目の警官のあごにすばやく肘鉄をくらわせ、

レジカウンターにはじき飛ばした。

それを見てもう一人の警官が、両手でキャップ帽の身体を押さえつけようとしたが、

キャップ帽は素早くしゃがみ込み、警官の両足めがけて回し蹴りを食らわせた。

警官はたまらず上下反転するかのよう空中を舞うと頭から落下しそのまま動かなくなった。

その様子に店の内外は騒然となっていた。

頼みの警官があつと言う間に倒されて皆そのすべを失ってしまった。その隙に、キャップ帽は向かいに止めてあつたグレーのワンボックスカーまで走り、

素早く乗り込むと一気に走り去ってしまった。

警報音はすでに消えている。気がつけば実芦は、カウンターの中央を覗いていた。

「ボウイ、中の人まだ息があるみたい」

いったい何が起こったのか理解できずにいる店員と、

あたふた動き回る客で騒然となっている店の中で、一番冷静に行動しているのが、実芦であった。

「大丈夫ですか？」

歩大尉は声をかけながら、実芦に背中を押されて、サングラス男の倒れているカウンターに入った。

何か言おうとしているのか、立ったままでは聞き取れないのでサングラス男の側にしゃがみ込むと、

いきなり腕をつかまれた。

「こ、これを頼む、誰にも見せないでくれ」

反対の腕で作業ズボンの後ろポケットから出したと思われる書類を歩大尉の手に握らせた。

それは小さく折られていて、手のひらにはいる大きさになっていた。歩大尉はそんなものを受け取りたくなくて押し返そうとした瞬間、

実芦が腕を引いた。

「早く、こっちにきて！」

気がつけば数台のパトカーや救急車が店先の道路に整列している。外では野次馬たちを押しやるように現場確保の警官が数人で店先を囲っている。

カウンターを出ると同時に他の警官が素早く店内に入ってきた。

先頭の警官のあとから、私服警官とおもわれる男がバッチをかざしながら、

「今から現場検証をします。皆さんは指示に従って勝手に動かないよう願います」

私服警官は店内をすばやく見渡すと警官にカウンターのの中の、サングラス男を確保するように命令した。

先に倒された警官二人はすでに救急隊員に付き添われ、救急車で手当てを受けていた。

「君たちは大丈夫かい」

歩大尉とそのかたわらで歩大尉の腕を握ったままの実芦に、目を向けた私服警官が声をかけてきた。

「ええ、大丈夫です、店を荒らしたのは二人組みでした。一人はこの中に倒れている人、

もう一人はグレーのワンボックスカーに乗って逃げました」

真直ぐに私服警官の目を瞬きもせずに見つめながら、実芦は説明した。

「これはしっかりしたお嬢さんだ。話を聞かせてもらってもいいかな」

めちやくちやになった入り口付近を避けて、奥の席に移動した私服警官が、

テーブルを挟んで前の席に座るように指示している。

そして席に着いた二人に一連の騒動の内容を聞き始めた。

「ああ、なんかあせった、あのまま帰れないのかと思ったよ」

明らかに不機嫌になりながら、歩大尉は実芦を見た。

「え？なにが」

家のほうに歩きながら、平然と実芦は答えた。

「なにが、って自分から刑事に向かって話しかけるなんて、いきなりだったからびっくりしたよ」

手に持ったカバンを足元において、両手を広げオーバーなしぐさで、

実芦の前に歩大尉は立ちはだかった。

実芦はそんな歩大尉を見ながら、

「ごめんね、でも一番最初に事情聴取を受けたんだから、よかったじゃない。」

このまま順番で待っていたら、晩御飯までには帰れなかったよ、きつと」

その通りだった。あの場にいた客と従業員は全て警官に身元の確認と事情聴取を受け、

全員が終わるのを待っていたら後2、3時間は掛かっていただろう。実芦のまったく理になかった行動と物言いにはかなわない。

おまけに言い終わった後には小首なんかかしげて、

「ね、よかったね」

なんていわれる始末。

「まあ、良かったのか、悪かったのかよく解らないけど、でも大変なことだよな。」

あんな騒動に立ち会うなんて。そう思わないかい？」

「そうかなあ」

歩大尉のことなど、構わずと言わんばかりに、軽く脇を抜けてそのまま帰ろうとする実芦だった。

「おい、おい！待って」

早足になった実芦を追うように、歩大尉はカバンを持ち上げながら走って追いついた。

ほんと、妙な所でしたっけかりした振りをするのがまるっきり大人の様

だ。

実芦のそんな態度は知り合った時からあった。こんなときは素直に従うしかなかった。

これが恋人か夫婦ならば、完全に尻に敷かれているといった所かと歩大尉は半分あきらめ気分になっていたが、

片や半分はそんな実芦と一緒に居られるのが心地よいのであった。

しばらくいつものペースで帰り道をたどって行くと、

突然、実芦が立ち止まり慌てた様に歩大尉に言い出した。

「あつ、大変！どうしよう」

何のことが解らず歩大尉は驚いた。

「なんなんだよいたい」

実芦は、いま来た道を引き返そうと振り返り、歩大尉を見上げてさらに言う。

「さっきのお店のお金、払ってこなかったよう、どうしよう」

なんだ、そんなことかと思い、歩大尉は言った。

「明日払えばいいよ、実芦はあの店の常連じゃなかった？」

意外な返事だと思わんばかりの顔つきで、実芦は見ていた。

「そつかあ、だよねえ」

あつさり納得した実芦は再び帰宅方向に早足で進みだした。

いまいち解らない性格だ、と思いながら、実芦の後姿を追いつつ、

歩大尉は制服から小さく折りたたまれた書類と、刑事の名詞を取り出し、

今日起こった出来事を思い出していた。

そして書類と思われた物は、今見るとそれは中に紙が入っている封筒だった。

「なにしてるの、おいてくぞお！」

実芦が振り返りながら、歩大尉を呼んだ。その足は相変わらずの早足のままで。



## 2 実<sup>み</sup>芦<sup>ろ</sup>

いつもの路地で実芦と別れた後、自宅の玄関の戸を開けると、薄暗い部屋の中から声が聞こえた。

「おかえり、歩大尉」

歩大尉の祖母、葉瑠音である。

「ただいま」

返事をする歩大尉はすぐに自分の部屋にいった。

葉瑠音は感覚が鋭く、目で見えるよりも確実に現状を把握できるのだ。そのため、自分以外の誰もいなければ、家の照明はほとんどが消されている。

やがて廊下と台所に明かりが灯り、着替えた歩大尉がそこにいた。

「いま、食事の準備をするから」

リビングには葉瑠音がいた。明かりは窓際のスポットライトのみをつけている。

ただ、かなり小さい灯りのため、部屋の一部がかろうじて見える状態だ。

静かに椅子に座り瞑想をしている様に見える。そして静かに話す。

「解っているよ」

葉瑠音がいつまでも待てるといった感じに、ゆっくりと答えた。

何時からだろうか、歩大尉が食事の一切を作るようになったのは、歩大尉を引き取りこの家で生活を始めた頃は葉瑠音が仕方なく炊事をしていた。

葉瑠音にとって料理を作ることは、苦痛以外のなにものでもなかったのである。

歩大尉と二人きりになる以前は、食事は元より身の回りの細々とした生活の一切はあまり気にすることなど無かった。

一人であれば何もしなくてもどうにかなっていたからだ。

瞑想の間に軽く口に入れられる程度の物さえあればよかった。

葉瑠音自身はそれほど食事らしい物は必要としていなかったが、子供連れになつてはいい加減な食事をする訳にもいかなかった。

歩大尉の健康のために考えたメニューで用意はしたが、

ただ作る物は必要最小限のパターンで後はその繰り返しであった。台所はいつも薄暗く、煮炊きをする炎の明かりのみで調理をしていた。

夕食時などはさながらキャンプファイヤーの様でもあった。

これは、本来の料理の雰囲気からはまったく違う意味ではあるが。でも、なぜか歩大尉は葉瑠音が作る料理には何も文句は言わなかった。

むしろ喜んで食べていたくらいだ。理由はわからないが、このことは確信がある。

何しろ葉瑠音は人の喜怒哀楽を感じ取ることができるのだから。食事の時に葉瑠音が唯一、人と接する機会であったからなのかもしれない。

一日のほとんどを部屋の中で瞑想する葉瑠音を少ないながらも身近に感じられる時間は、

歩大尉にとってはとても楽しみであったに違いないのである。

そんな歩大尉が料理に興味を持ち出したのは、小学校の頃からだろうか。

見様見まねで料理を手伝い、中学に入る頃には一人前の料理人ほどの腕前になった。

こんなに早く上達したのは、歩大尉にとって料理は心躍るものであったためだ。

いろいろな素材との出会い、数々の調味料は、その素材同士のハーモニーを引き出し、

何倍にも変化させる、まさにマジックのようだ。毎日が驚きと喜びの連続だ。

そして幼い頃に葉瑠音と過ごした暖かい時間を忘れない為に料理が出来れば、

自分と葉瑠音が何時までも関わり続けていられるという思いもあったからだろう。

小学校の時に同じクラスに転校してきた実芦が、

歩大尉の自宅に遊びに来る様になったのはちょうど料理に興味をもちだした頃だった。

料理の材料を山ほど抱え近くのスーパーから帰るのを手伝ってくれたり、

歩大尉の自宅で、よく二人で料理を作りあった。

もちろん夕食時には葉瑠音と三人で食事をすることもあった。

実芦は初めてこの家に来たときに葉瑠音とすぐに馴染んでいた。まるで自分の祖母の様に遠慮などすることも無かったのだ。

めったに人と会うことをしない葉瑠音も実芦とは歩大尉と同じように接している。

これは実芦の持つ何かに葉瑠音が興味を持っているからなのかもしれない。

「ハル、いいよ。ご飯が出来たよ」

歩大尉がキッチンから呼びかけた。

それに答えるようにゆっくりと葉瑠音が席に着く。リビング側の暗いほうだ。

テーブルの上に並ぶ料理はいたってシンプルで、野菜中心だ。

これは葉瑠音自身のレシピによるもので、4、5個の小鉢に盛り付けてはいるが、

いずれも量は少ない。

それに比べ、キッチン側の歩大尉の料理は肉中心でしかも相当のボリュームがある。

育ち盛りで、標準の一人前ではまったく足りない。

さらに今日はコーヒー店での出来事が空腹を倍増させるには十分す

ぎた。

「いただきます」

歩大尉が席に着き軽く挨拶をすると自分の好きな物から食べ始める。

静かに食事をする葉瑠音に比べ、歩大尉は若者らしく口いっぱいにおおぼり、

次から次へと箸を巡らせる。自分でも思った以上に空腹だった様だと歩大尉は思っていた。

量は少なくともゆっくりと食事をする葉瑠音とほぼ同時に歩大尉の食事も終わる。

ひと段落すると、テーブルに置いたウーロン茶の容器から自分の分をコップに注いで、

歩大尉は飲み始めた。

「店でのことは、片付いたのかい」

唐突にまるで、歩大尉の思いを先回りするように、葉瑠音が問いかけた。

「まあね」

飲み終えたコップを置きながら歩大尉は答えた。

そんな話し方をする葉瑠音に歩大尉も今は慣れてしまった。

葉瑠音との会話は伝えようと思う、葉瑠音が答える、それで成立と言った訳だ。

これは葉瑠音の能力によるものであった。

精神エネルギーを受け取るによりテレパシーのように相手の考えを読むのである。

大事な伝言は思ってたえいれれば葉瑠音に伝わる。

その特異な会話方法は歩大尉が物心付いた頃からだったので、普段は何も不思議には思わなかった。

だが学校に通うようになって、葉瑠音以外の人間には通じないと解るまでは相当苦勞した。

小学校に入った時にはまったくの無口で居た為、

誰も自分の気持ちを解つてくれないと泣いた事も微かに覚えている。そんな歩大尉を見かねた当時の学校の担任は、

自分が感じた事や思ったことは言葉で伝えなければ誰も歩大尉のこととは解つて貰えないと、

何度も言われてやっと会話で意思をつたえること、つまり本来の人付き合いの基礎を覚えたのだ。

「ありがとう」

葉瑠音のこちそうさまだ。

「また、明日」

歩大尉が答える。食事が、終われば葉瑠音は自分の部屋に入り込む。

なにもなければ、明日のこの時間までお別れだ。

「明日、実芦を連れておいで」

扉を閉める直前の細い隙間から、葉瑠音の声が聞こえ、すぐに扉が閉まる音がした。

今日の事を聞くのだろうか。

実芦はこの家を尋ねて来た時によく葉瑠音と二人きりで何かを話している時がある。

歩大尉は思った。

葉瑠音と世代の違いはあるものの女同士ということもあって、そうやって話をしたいだけかも知れないと。

食器を片付け、明日の朝食の準備をし終わると、歩大尉は自分の部屋にいった。

誰もいない部屋の明かりは予備灯を残して、すべて消していった。机の前の椅子に座ると、刑事の名詞と書類が入った封筒を机の上に並べた。

名刺には御手洗健治みたらい けんじと書かれてある。

刑事からは、事件の事で何か思い出したら、この名詞の番号に連絡をくれるようにと言われていた。

でも、この封筒のことはどうしても言えなかった。まだ中身は見えない。  
いやな予感がするし、見てしまえば重大な責任を背負われそうで、開く気になれなかった。

再び引き出しの中に名詞と封筒を重ねるようにしまい込むと明日の準備をし、

その後はシャワーを浴びて、不安な気持ちのままベッドに入った。

部屋のドアが、ゆつくりと開いた。ここは郊外の病院の一室だ。  
廊下をゆつくり見渡したその男は、周りに人の気配がないのを確かめると、

前がはだけたシャツの中に片腕をいれ、傷む胸をかばいながら、ホールに向かつて廊下を駆けていった。

部屋の中のベッドは、さっきまでその男がいた場所と思われたが今は空になり、

横の床には下着姿の男が、うめき声を上げながら、うずくまっていた。  
た。

監視のために付き添っていた警官が、

一瞬の隙をつかれ怪我人の男に襲われ着ていた私服を奪われたのだ。  
廊下を小走りに移動しながら、

逃げ出した男はシャツの中からサングラスを取り出すとすばやく顔にかけた。

そのサングラスは私服警官のもので形は多少違うが、

その顔は紛れもなくあのコーヒー店で歩大尉に封筒を手渡した男だった。

男は廊下をホール側に曲がらず、真っ直ぐ行った突き当たりの扉を開け、非常階段に出た。

そしてそのまま地上まで降りると、駐車場の中を横切って闇に消えた。

それとほぼ同時期に、ホール側から逃げ出した男の居た部屋の方に、廊下を曲がってくる男がいた。

目的の部屋の辺りを見て扉が開け放たれているのを見ると、その男は一瞬立ち止まり、

その状況に慌てふためいて部屋の中に一気に走りこんだが、ベッドはすでに空だった。

「遅かったか。あいつめ何処に行きやがった」

長髪でがっしりした体の男は病院の白衣を着ていたが、

その格好には似つかわしくない雰囲気を持っていた。

むしろ作業着が似合うようである。

いや、その男は、先ほど逃げ出したサングラス男を、この病院に送った張本人で、

コーヒー店で争っていたキャップ帽の男だった。

「くそ、なんて奴だ。仕事は出来ないくせに逃げ回ることだけは早い野郎だ」

部屋のベッドを見て悪態をついていると、監視の警官が這いつくばりながら、

男の足にしがみ付いて来た。

「にげられた、通報を、そして手当てを頼む・・・」

搾り出すような声で必死に助けを求めてきた。

「ばかやろう！なんでしつかり監視してないんだ、使えねえ奴だぜ」

キャップ帽はその警官を容赦なく殴りつけた。監視の警官は完全に気を失って動かなくなった。

その直後、ホール側から数人のかけてくる足音が聞こえてきた。

騒ぎを聞きつけた他の部屋の患者の通報によるものだろう。

キャップ帽は即座に隣の空き部屋のドアを開けると一瞬にして身を隠した。

警備員と医者、それと看護婦二人が部屋に入って行った。

彼らが部屋の中の状況に気を取られている隙に、

キャップ帽は隠れた部屋から素早く出ると廊下を走り出した。

もうここには用はない。

そう確信したキャップ帽はそのまま突き当たりまで行くと非常階段へのドアを開けて、

駐車場に向って階段を降りていった。

空は曇っているのか月も星も隠れ辺りがすっかり暗くなっている。そのせいで街頭がないところは完全な闇になっている。

そんな町の中を額にうつすらと汗を浮かべながら走る人影があった。時たま明かりのある所を通ると映し出されるその姿は、けっしてジョギングなどをするような格好ではなかった。

胸がはだけて着崩したシャツにサイズが合わないスラックス、薄汚れたデッキシューズ姿のサングラス男だった。

走る姿は苦しそうに喘いで足元がふらついている。

病院からどのくらい走っているのか本人にもわからなかったが、ただ、行く先だけは頭の中にはつきりしている。

あの場所へ、そう、あの女の居るあの部屋へ。

時折、車のヘッドライトでうつすらと辺りが明るくなるのを感じると、

その光におびえるように素早く身体を隠した。

今、あいつらに捕まるわけには行かない。どうしても確認したいのだ。

赤いテールランプの筋を残し車が通り過ぎ再び夜の闇が覆いかぶさつてくると、

男は身を乗り出す様に走り出すのであった。

やがて繁華街の端の裏通りまで来ると、

昔の土地勘に頼るように路地と路地のつながりを記憶の中でトレースして行く。

そしてそれが正しかったのを証明するようにアパートの前に着くと、ポストの表札を確認した。

「ここだ。やっと着いた」



かつて此処に訪れていた頃より周りの雰囲気がいぶ変わっていたが、その建物はそのままであった。

部屋の前に立ち、チャームを押す。

中からドアに近づく人の気配を感じた。

「由理<sup>ゆり</sup>、俺だ、早く入れてくれ」

かすれる声を振り絞ってドアの向うに語りかけた。

ドアのノブに手が掛かるのが解ったが、その動きは躊躇しているようだった。

鍵を開けるのを迷っている。

「頼む。一人でやつとここまで来たんだ。他には行くところもない。一晩だけでいい。入れてくれないか」

男はドアにすがりつくように身を預け、サングラスをはずしその扉に顔を付け懇願した。

鍵がはずされ防犯用のドアチェーンも外れる音がした。

男はドアから離れ一歩下がった。そしてサングラスをシャツの胸ポケットに入れる。

ゆっくりとドアが開き部屋の明かりが暗い廊下を照らした。

扉を開けたその人物は女である事は解ったが、後ろの照明によって表情は見えなかった。

だが、たたずまいは男のかつての恋人の由理である事は間違いなかった。

「あんだ、どうしたの」

その声はかすかに震えていた。語尾には愛しさがにじんでいた。

「変わらない様でよかった」

部屋に入れるため向きを変えた由理の横顔をちらと見て、

男は言い終わる前に中に入り、素早くドアを閉め鍵をかけた。

その動作は体が覚えていて勝手に動いた。

「いままで何処に居たの、恒<sup>ひさし</sup>。連絡もくれないで」

由理は恒の胸を拳で何度も叩くようなしぐさをし、

すぐにその胸に顔をうずめて恒の背中に両手を回すと持てる限りの

力できつく抱きしめた。

「すまない。お前に迷惑をかけたくなかった」

由理に抱きしめられて恒は怪我の痛みに一瞬顔を歪めたが、由理に会えた気持ちのよさが勝ったのかすぐに安らかな気持ちで答えた。

恒は由理の髪を撫でながらその香りを確かめた。

髪が掛かった頬に顔を寄せると甘い匂いと首筋から漂うかすかな汗を感じ、

今まで張り詰めていた心がほぐれていく。

二人で暮らした日々の思いが波のように押し寄せ、あの頃の熱い気持ちが一瞬で消えた。

由理は何も言わずそのまま恒を抱きしめていた。そして汗と埃にまみれて恒は疲れきっているのが解った。

「あんだ、食事はしたの」

由理はゆっくりと顔を上げ、恒を見つめると言った。

「いや、なにかあるか」

恒は由理の顔を見つめ返しながら返事をした。

それに頷き由理は恒を部屋の中に誘ってソファに導いた。

「ゆっくりして。いまずぐに食事を用意するから」

ソファに横たわる恒の手を離し、由理はキッチンに向うとすぐに料理を始めた。

恒はその後姿を見ながら安堵のため息を付いた。此処にきてよかった。

あの頃となにも変わっていない。

「由理、ありがとうな」

ソファに仰向けになりながら恒は言った。

「ううん、あんだは此処にきつと帰ってくると信じてた。だから待っていたの。」

帰ってきてくれてほんとううれしいよ」

由理は振り向き笑顔で答えた。

恒はその声を聞きながら痛む身体をかばうように楽な姿勢をとった。気がつくとテーブルの上に缶ビールとコップを運んできた由理がいた。

心配そうに見ている。

「怪我をしてるんじゃない。体が痛むの？」

「ああ、少しだけな。でも大丈夫だ。気にするな」

「そう。ならいいけど。喉が渴いているでしょ、これ飲んで待って。」

それと先にシャワーを浴びるなら洗面所に掛かっているタオルを使つて。」

恒はゆつくりと起き上がり、ビールを手に持ちそのまま飲み始めた。気がつけば何も口にせずここまで来ていた。その液体が体中に染み渡り程よい苦味と、

やがてアルコールの微かな火照りが身体を巡った。

由理の部屋はきれいに整理されていた。まったく男の気配を感じさせなかった。

それは、ここに移り住んでから一度も男が居なかった事を物語っていた。

知らず知らずに涙がこぼれた。恒の瞳の中にはキッチンに立つ由理の後姿がにじんでいた。

由理との出会いはどんなことだったか今では思い出せないが、やくざな男に金で縛られているのをかわいそうに思い恒が自らを半ば犠牲の様になり自由に

してやったのだ。

人助けなどのつもりはなかったし、

今までの恒であつたならそんな事は絶対にしないだろうと思つて生きてきたが、

由理に出会つた事が恒の生き方に何かをもたらしたのは事実だ。

とにかく由理を自由にしてやりたかつた。それを金で解決しようとして

した。

しかし金を工面するのは並大抵ではなかった。実の所、まともに働いて出来る金額ではなかった。

その男、矢敷<sup>やしき</sup>から持ちかけられたのは、

近いうちにでかい山があるからその仲間に加わり仕事をすれば女をお前にくれてやる、

と言った事だった。

所詮、いかがわしい奴らのことだから結果はある程度は解っていた。しかし何も出来ない自分に直接、由理の自由を約束すると言われればそれを断ることもないだろう。

最後はすべて自分が責任を負えばすむことだ。

別に由理と一緒にいなくてもよかったのだ。

由理が自由になり自分の人生を取り戻せればそれが恒の本望だと思つた。

そんな折、偶然に恒と由理に二人きりで居られる時間が得られたのだ。

その仕事に来るまで矢敷は由理を自由にしたのだ。

矢敷の本意は恒を仲間に留めて置く為に女をあてがったつもりなのだろう。

矢敷にとって女はただの道具と同じなのであった。

しかし、その仕事の日までの一ヶ月は夢のような日々であった。

由理と恒は心の底からお互いを受け入れた。思えば恒にとっては始めて本気になって愛した女だった。

そしてその好きな相手から愛されているという感情がひしひしと伝わってくるのだ。

恒にとって由理はそんな態度を何の遠慮もなく見せる女だった。

それは男には最高の女と言える存在だ。

まさに夢中になるとはこのことだろう。あつという間に一ヶ月が過ぎ去った。

仕事の日に矢敷が迎えに来た。それは突然で問答無用だった。

由理に別れも言えずじまいで車に乗せられた。

だが、恒はこんなこともあるだろうと思い、自分の荷物の中に由理宛の書置きと現金の全て、

そして自分がいなくなったら違う場所に移るようにと、

秘密に借りたアパートの場所と鍵を用意していた。

仕事は盗みだった。大方予想はしていたがその場所はかなり危険だった。

だが、以外にも矢敷は用意周到だった。

完全な計画でまんまと金は盗み出せたが、

逃げる間際に警備員の機転で逃げ道を閉ざされそうになったのだ。

矢敷は恒に犠牲になるように言った。

恒が奴らの盾になり男達を無事に逃げさせたら、

女の自由を保障し出所後も金の心配は要らないと説得しに掛かった。

恒は最初から矢敷達の身代わりになるつもりでいたからなんのためらいもなかった。

ただ矢敷達の約束は信じてはいなかったが。

自ら警察に捕まり、恒は全ての罪をかぶり2年間刑務所で過ごした。

そこで同じ房にいた男と知り合い出所後に仲間にならないかと誘われ、あのグループに入ったのだ。

その後、由理とは連絡は取っていなかった。

自分の行方はあの男たちも追っていると感じたからだ。

「あれからもう4年もたったのね」

由理が恒を見つめながら言った。その手にはビールがわずかに残ったグラスが握られていた。

「誰かいい人はいなかったのか」

恒が聞くが、すぐに恒は何を馬鹿な事を聞いたのかと後悔した。

「もともとあたいは家族もないし、男なんてどれも皆同じ。」

だから見ての通り誰もいないわ。付き合おうと感じるいい男もいなかったし。」

由理は冗談の様な返事をして笑みをうかべた。

「でも、恒。これだけは信じて。あんたは本当にいい人。あたいは最高の男だよ、

そして愛してる。」

グラスを置くと由理は突然、恒に抱きついてきた。そして恒の首筋に何度も唇を寄せた。

恒もそれに答えるように激しく由理を求めた。愛情の高まるままに。

着替えてタオルを首に掛けた恒がバスルームからシャワーを終えてリビングのソファに座った。

その姿を見ると由理はキッチンの洗い物を終えて、恒の側に寄り添うように座った。

「ねえ、恒。これ、覚えてる？」

由理が見せたのは一通の手紙のように見える紙だった。

二つに折られ中は見えなかったが、恒にはすぐに理解できた。

かつて二人で暮らした部屋から、

男たちと犯罪のために由理に何も告げずに出て行った時に残した書置きであった。

「いまさら何をだすんだ、そんなものを今でも持っていたのか」

恒は由理のその手を軽く払うように言い捨てた。

「うつん、これはあたいの一番の宝物だよ。何度も何度も読み返した。」

最初は涙がこぼれて、なんで出て行ったのかと恨みもしたけど、日々が過ぎると恒の優しさがあふれることに気がついたんだ。だって、そうでしょ。

その気もなければ絶対にこんな事はしないし、

いままで一人は辛かったけど、これに書かれている事は何よりも希望だったよ。何でも我慢できた。

そして、いま恒は此处にいる。あたいは幸せ者だよ。」

恒の目を見ながら由理は本当に幸せな顔を見せた。

「解った。由理、俺はうれしいよ。そこまで愛してくれてるなんて」  
その言葉を聞いた由理は恒の腕を両手でつかみ二度と離さない、  
と言わんばかりに身体を引き寄せた。

「もう、何処にも行かないで。ずっとここにいてるんでしょ。ね、お  
願いだよ。」

「お金の事は心配しないで。あたい、今の仕事でけっこう稼げるんだ。」

その言葉を聞いた恒の瞳は曇った。

そのわずかなしぐさに由理は一瞬、身体を緊張させたが、すぐに笑顔で返事をした。

「いいの、こんなのあたいのわがままだよ。」

愛してくれてても恒の心はもっと別のものを追いかけていたのは解  
ってたはず。

いまさらこんな事を願っても無理だつて。そうだよ。恒」

だまっただま恒はうつむいていた。

二人の間に沈黙が流れた。

「すまない。どうしても知りたい事が俺にはあるんだ。そのために  
どんなことも耐えて来た。」

それだけは捨てるわけに行かないんだ。許してくれ由理」

無言の時を切り裂くように恒は言った。

由理の笑顔は引きつったようにそのまま悲しみに包まれていった。

「解ってるよ」

その言葉は由理自身を言い聞かせていた。

どうにもならない人の感情を何とか理解しようとしていた。

後ろ姿を見せ両手で顔を覆いこぼれ出る涙と悲しみを必死に隠して  
いた。

由理の心は壊れる寸前だった。

今までの苦労が報われたと思った瞬間、

奈落の底に突き落とされた様で何もかもむなしく感じ始めてもいた。  
恒はその由理の態度に自分の心が流されないよう必死に耐えていた。

俺には何よりもこだわる事がある。それを目指さなくてはならない。由理、解ってくれ。それを手に入れなければならないんだ。

俺なんかよりずっといい男がきつと出来る。だからもうこんな俺は忘れてくれ。

恒の心はすでに石になっていた。それは由理の思いもいまや受け入れる事が出来ないのであつた。

その夜はお互いに離れていく心を感じながらも、

二人は最後の別れを惜しむように寄り添いながら眠りに着いた。

眠っていたはずの由理の気配がないのに違和感を感じ目を覚ました恒は、

バスルームからかすかに湯気のおいが漂うのを感じた。

だがその中に何か不快を感じさせるものも混じっているのが解つた。恒は飛び起きた。いやな予感がしたのだ。

勢いバスルームの扉を開ける。

「由理、いるのか」

開けながら呼びかけた。その瞬間に恒の目に映つたのは理解しがたい光景だつた。

眠るようにバスタブの端に頭を掛けて由理が湯に浸かっていた。

その湯は真つ赤な濁つた絵の具の海に見えた。不快に感じたのは血の匂いだったのだ。

「由理、なんてことを」

恒は赤い湯の中に両手をつ込み、由理のからだを抱える様に抱き上げた。

すぐにバスルームから運び出しベットのの上に横たえた。唇は青く身体は血の気が完全に引いていた。

由理の唇に手を触れ、ゆっくりと胸の心臓の辺りに手のひらを恒は置いた。

あの由理の息遣いが今は消えていた。完全に消え去ってしまった。た。



恒は由理の身体をゆつくりとバスタオルでしずくを拭い取りきれいにしていた。

そして両手首に切り傷がありそこから由理の血液がとめどなく湯の中に流れ出ただろう事を恒は感じた。

心臓がえぐられるような感情が押し寄せ、今までにない苦しさで思わず首元を両手でかきむしった。

なんでなんだ。俺が由理を追い詰めてしまったのか。

いままで由理は喜んでいてくれているとばかり思っていた。それなのに。

昨日のあの問いかけは由理にとって精一杯の思いだったのか。此処に来るんじゃないかった。

少なくとも俺がいなければこんなことも起こらなかったはず。なんて馬鹿なんだ。由理の事はよく知っていたはずなのに。

恒の目から涙がこぼれた。

今はきれいになってバスローブに身を包んだ由理の身体にとめどなく恒の涙が落ちていた。

由理の眠るような顔を見て今にも目覚めるのではないかと思うと、胸の中から押し寄せる悲しみに耐え切れず恒はひざを落とした。

そしてうずくまると床のカーペットを両手の指で千切れるほどの力で握り締め声を出し泣いた。

恒は由理の部屋をきれいにすると、バスタブにあったナイフを手に取り長い間見つめていた。

由理が最後にその命の終わりを決める為に使った鈍く光るナイフ。

そのナイフは今や由理の形見だ、

そしてその輝きが恒に自分の運命を決めるときが来た事をまるで由理自身が語り掛けている様に思えた。

ナイフをズボンの背に隠すようにしまい、由理の部屋を後にした。

二人で暮らした想い出も何もかもそこに置き去りにするように、全てを捨てきつた恒が扉から出て行った。

外に出ると朝の日が徐々に差し始めていた。

昨日と同じ日が何も変わらないように始まっていく。

商店街に差し掛かるとその地域に唯一ある公衆電話から警察に通報した。

アパートの名前、部屋、そして住んでいる女の名前。ベットに横たわり亡くなっていると。

電話を切ると、シャツから取り出したサングラスを掛け、痛む胸を押さえつつその場を足早に去っていった。

翌日の放課後、校門を出ると実芦は、

「お店に昨日のお金を払いに行くから先に帰っていいよ。後で寄るね」

と歩大尉に言うのと、さつさと店のほうに駆けて行ってしまった。

葉瑠音が用がある旨はその前に伝えていたが。

「なんか、ほっとかれた感じだな」

歩大尉は、その走り去る姿を見送ると思わずため息をついた。

実芦は時々、目的が見つかりと夢中になり、それまでは寄り添っていたかと思えば、

次の瞬間にはそっけなくなる時がある。

今回もそのパターンか。

仕方ないので帰りにスーパーによって買い物をしてから帰ることにした。

一方、実芦は修理されてすっかり元通りになったコーヒー店で昨日の飲食代を払うと、

「わざわざありがとうございます。これは私どもからの感謝の気持ちです」

と店長から感謝されて、実芦は上機嫌だった。

そして、手渡されたのはセットメニューの無料券だった。

これは、来店の際のポイントカードのスタンプが、満点にならないければ貰えない物だ。

「えー、本当にいいんですか、やったー」

実芦は、この無料券をもらうためにコーヒー店に通っているようなものだっただから、

大感激して思わずその場で踊りだしそうだった。

大事そうに、制服のポケットに無料券をしまいながら、

「やっぱり、神様って居るのかなあ。あつ、こんなこと言ったら葉瑠音ばあに叱られるかも」

ぺろっと、舌をだして自分の頭を拳で軽く小突きながら店を出ると、歩大尉の自宅方面に向かった。

コーヒー店からしばらく行くと住宅街に入る。

ここからは坂道を登れば、まもなく歩大尉と葉瑠音ばあの家だ。もう少しと思いながら早足になる実芦だった。

その後ろ姿を見逃さないように、そして気づかれないようにと、気配を消した男が付かず離れず後を追っていた。

昨夜、病院から抜け出したサングラス男、恒だ。

コーヒー店の中で少年に手渡した封筒を取り返しに、店の近くで張り込んでいたのだ。

少年は来なかったが、そのときの連れの女子高生を見かけたので今まさに尾行しているのだ。

このまま行けば、きつとあの少年に会うはずだ。と確信していた。しかし恒は追い詰められていた。

傷の痛みが何時まで押さえられるか解らないし、あのキャップ帽に発見されるとも限らない。

そのすべてが悪い方向に進んでいるようで、逃げ場がなくなっていた。

早くあの封筒を取り返して、目的の場所へ行かなくては。

実芦が歩大尉の家の前からのチャイムを押すと、しばらくして玄関の扉がゆっくりと開いた。

「こんばんは、来たよ」

「思ったより早かったね。コーヒーでも飲んでゆっくりしてくるかと思ったよ」

歩大尉が扉を開きながら、実芦を、招きいれようとした瞬間だった。

「おい！静かにしろ、騒ぐんじゃないぞ」

扉の影からサングラス男が現れ、実芦の首にその腕を回し、即座に自分の前に抱え込むと、片方の手でドアノブに手をかけ、家の中に入りながら後ろ手で扉を閉めた。

歩大尉はとっさのことに、声が出せずにサングラスの男の迫力に押され、

そのまま後退りしていた。

男の腕にしがみ付いて、少しでも楽な体制を維持しようともかく実芦だが、

小柄な女子高生の力では、大の男の足元にもその力は及ばなかった。苦しそうに表情は歪んでいたが、その視線は歩大尉に向けられ、私は大丈夫、と言っている様に落ち着いていた。

「おい、おまえだ！あの封筒はどうした？まさか開けたんじゃないだろうな」

サングラスの男は、歩大尉の返事を待てないのか、さらにたたみ掛けるように言い放った。

「とにかく、ここに早く持ってこい！こいつの首を絞めてやるぞ！」

実芦の表情は硬かった、瞳はさらに増した苦しみの為か涙で潤み始めていた。

歩大尉は動けなかった。

目の前で起こっていることは、とてつもない危険なことだ。

実芦を助けたい、その事で頭がいっぱいになり今にも破裂しそうだった。

「おい、早くしろ！」

男のあせりは加速しているようだった。

額からとめどなく汗が流れ出し、進入してきた勢いが止まり、何か思い道理にならない自分にも苛ついている。

傷が痛み始めたのだ。

「くそー、何てことだ！」

かすれた声で男はつぶやく。

「此処まで来たのに、どうにも成らないのか。」

サングラスで表情があまり見えなかったが、歩大尉に近づくために、

奥の明かりの前に進み出た男の表情は、蒼白であるのがはっきりと解った。

辛うじて実芦を抱えているといった状態だった。

そのとき、葉瑠音の部屋の扉が開くと同時に声が聞こえた。

「その子を放してやりな。私たちは、なにもしたりしないから」

かすかな声だが、ゆっくりとその場にいる者たちに、伝わる声だった。

「葉瑠音ばあ、」

実芦はこれで安心できると思い明るい表情にかわって、ささやいた。

男は葉瑠音を見ると、こんな場所に何で？といった表情になり、

実芦を絞めていた腕をゆっくり下ろした。

「あ、貴方は？！」

男は完全に実芦を離し、痛む胸を押さえながら葉瑠音にゆっくり近づいていた。

「ボウイ！」

実芦は小さな声で、歩大尉に走り寄ると、その腕にしがみついた。歩大尉は両腕で実芦を抱くようにすると、硬い表情で実芦を見つめた。

そして、ゆっくりと葉瑠音のほうに視線を向ける。

「あの方ですよね？」

サングラスの男は滴る汗を拭うおうともせずに、葉瑠音を見ていた。

「なにも喋るな。傷はだいぶひどいようだから、無駄な消耗をしないほうがいい。」

そしておまえの言いたい事はすべて解っているから」

葉瑠音は本当にその男の気持ちのすべてを理解していると思えるような、やさしい目で見つめた。

「それならば俺の目的は達成された。これですべて救われる。」

男は歓喜の表情を浮かべ痛む身体を休めるように、その場にしゃがみ込んだ。

葉瑠音はその男の肩に手をふれてささやいた。

「残念だが、私はお前が思うような立場の人間ではない」

男は、いったい何が、と言った表情で葉瑠音を見た。

「そのような人々も居なければ、集まりもないのだ。お前が考えているような形ではありえないのだよ」

「それは嘘ですよ、俺の記憶が正しければ、貴方です。いや絶対そのはずです」

歩大尉にはその二人の会話の意味が理解できなかった。

この男の頼る先が葉瑠音だとしても、そのようなことはまったく感じないからだ。

サングラスの男は、しゃがみ込んだままうめきだした。

もう、傷のいたみに耐えられなくなったようだ。

「ううー、なんとかしてください」

歩大尉がとにかく手当てだけでもと思い、あたりを見渡していると窓越しに、

一台の車が家の前の道路に静かに乗付けるのが見えた。

そして明かりを消して止まったままだ。

車の中から運転手らしき人物が家の様子を伺っている様だ。

そんな歩大尉の様子を見て、葉瑠音も感じたのか窓の外を確認した。

車のドアが開き中から人影が降りて、こちらに近づこうとしている。葉瑠音はそのタイミングを計っていたかのように、

まだ歩大尉の腕にしがみついて、サングラスの男を不安げに見つめていた実芦に、

ひとときわ鋭く視線を投げた。

その合図とも取れる視線を受けると、実芦は表情を一変させ、

強い意思が現れた鋭い顔つきになり、その両手で歩大尉をゆっくり奥へ押しもどすと、

自らは反対の玄関の扉の方に歩き出した。

突然、何をするのかと、歩大尉は実芦を止めようとしたが、

葉瑠音の視線を感じてその表情を見ると、そのまま動くなと語っていた。

それに答えるように歩大尉は頷いた。

実芦の動きに気がついたサングラスの男は、痛さにゆがむ表情のまま立ち上がり、

ドアノブに手をかけて外に出ようとする実芦を捕まえようと近づいたが、

すでに実芦は扉をあけて外に身を乗り出していた。

その瞬間男は実芦の腕をつかみ上げ、背中に隠していたナイフを握り、

その手を振りかぶりながら耳元でささやいた。

「この、娘め！」

さらに腕に力が込められ、振り下ろされようとしたその時、鋭い声が響いた。

「おい、やめろ、こっちを見ろ！」

サングラスの男が振り向くと、拳銃を構えた男がいつでも発砲できる体制で狙いを定めていた。

それは家の前にとめた車から降りてきた男だ。

もうすでに傷の痛みとすべてが思い道理に行かなくなった事で、体力の限界になっていたサングラスの男に冷静な判断をすることは

不可能だった。

「くそ、もうどうでもいい」

実芦を突き刺そうと、サングラスの男のナイフが微かに光ったその瞬間、男の拳銃が炎を発した。

男の脳裏に一瞬のきらめきが走った。

その男、恒の愛した女、由理が目の前に佇んで微笑んでいるのが見えた。

「由理」

声にならない声を発し、

恒は一瞬の夢の中で両手を差し出し由理の手をつかもつと身を乗り出していた。

恒の手を由理は確かに握った。

そのとき光が瞬き由理の身体を覆い始める。

ゆっくりとその身体を振り向きながら後ろ手に恒の手を引き光の彼方に向って飛び込む。

暖かな温もりと由理の微笑と全ての感覚が一体になってゆく。

恒は光の中に解けていく。その一瞬がまるで永遠に続いていたかのように。

発砲音と同時にサングラスの男はその場に崩れ落ちた。

実芦はその場にしゃがみ込み震えていた。

「だいじょうぶか、実芦」

拳銃を撃った男が素早く駆け寄り、サングラスの男の状態を確認する。

すでに息は無く抵抗は無理と判断すると、男は実芦をその場から引き離すように抱きかかえた。

実芦は外に飛び出した時の表情は消え、

今は自分の足元をじっと見つめ起こった事の全てを理解しようとしていた。



「中林さん、大丈夫です。助けてくれてありがとうございます」

顔を上げながら実芦は、すでに冷静を取り戻しゆつくりと答えた。男は中林剛汰といい、葉瑠音とは知り合いで、皆とも顔見知りであった。

元警察官で今は私立探偵をしている。

「よかった。葉瑠音と歩大尉は大丈夫か？」

「うん、大丈夫だと思う」

振り返ると、玄関口に倒れ身体を血に濡らしているサングラスの男を見つめ、

呆然と立ち尽くす歩大尉がそこに居た。

「歩大尉、大丈夫か？葉瑠音はどうだ」

中林の声に我に返った歩大尉が二人を見て答えた。

「はい、大丈夫です、ハルも無事です」

歩大尉は近づいてきた二人を招き入れるようにして、玄関の扉を全開にする。

部屋に入った中林は、葉瑠音を見ると近づきながら頷いた。

そして、無事を確認すると葉瑠音を部屋の奥の椅子に座らせた。

歩大尉は実芦とすでに反対側の椅子に二人並んで座っていたが、

表情は血の気が引き見るからに疲れきっていた。

そんな歩大尉を気遣ってか、実芦はしっかりと肩に手を掛けて庇うように寄り添っている。

その姿は実芦自身に起こった事など、まるでなかったかのように毅然とした態度であった。

しばらくすると外にはサイレンの音が遠くから響いて来て、

数台のパトカーと救急車が騒がしく集まって来た。

最初に到着した車からは警告灯が内部から光り、それは覆面パトカーと解った。

中林の車の前に勢いよく停車すると、中から私服刑事らしき二人が降りて足早に近づいてくる。

刑事達は玄関の前に倒れているサングラスの男を確認した。

そして一人は救急隊員に声をかけ処理するように指示し、もう一人は開いたままの玄関に入ってきて、中を確認した。

住人の中に中林を発見すると、声を掛けて来た。

「やはり先輩でしたか、外に先輩の車があったもので。どうしたんですか？こんな所に」

葉瑠音と部屋の奥で、なにやら相談をしていた中林が振り向きながら答える。

「おお、健治、おまえか。まあ、成り行きでな。とりあえず片付けておいたよ」

二人は知り合いのようだ。

刑事は他の連中を家の中に入れまいと、外の制服警官に誰も入れないよう指示し、すばやく扉を閉めた。

「この家の住人の事に付いては穏便にたのむぜ」

中林が刑事に歩み寄りながら伝え、そして事件の経緯を説明した。「解っていますよ、先輩。第一、外の男は脱走犯ですからね。

この家には何の落ち度もないってことになるでしょう。

そして、先輩は事件を解決したヒーローですから」

笑いながら中林に話しかけている刑事をみて、歩大尉は思い出した。

それは、コーヒー店で話を聞かれて名詞を手渡された御手洗刑事だった。

その視線を感じた刑事は、改めて歩大尉と実芦を見て話しかけてきた。

「君たちか、大丈夫かい？」

「はい、大丈夫です」

歩大尉は座ったままで、軽く頭を下げて答える。

隣の実芦も御手洗に視線をむけて挨拶をした。

「君たちが襲われたと言うことは、奴は君たちを探し当て此处に来たのか」

御手洗は二人に確認するかのように言った。

「そうかも知れませんが。実芦を家に入れようとした時に、突然後ろから出て来ましたから」

歩大尉はその瞬間を思い出しながら答えた。

「奴は、よほどの用があったのかもしれない。何か思い当たる事はないかな」

今度は家の中の全員に問いかけるように視線を振り分けながら質問した。

即座に答えたのは葉瑠音であった。

「此処に来た理由ははっきりとは解らんが、私の事を見ると誰か知り合いと思い込んで、

何かをしきりに伝えたがっていた」

歩大尉に視線を送り軽く首を横に振って、葉瑠音が皆の発言をさえずるように答える。

その葉瑠音の行為に何も言うなと感じた歩大尉は発言を抑えた。

「人違いと解るとかなり気落ちしていたようだったし、さらに怪我が痛み出した事と相まって、

自暴自棄になり、助けを求め外に出ようとした実芦に襲い掛かった結果が、

このようになってしまったと言う訳だ」

さらに付け加えるように葉瑠音が話を続けた。

簡潔な物言いの葉瑠音に頷くようにして、御手洗は納得した様だった。

「とりあえずみなさん無事ですのでから、この家のことは先輩に任せます。

あとで、所長のほうから先輩に連絡が行くかもしれませんが、

そのときは適当にあしらって置いてください。

報告書はそれなりにまとめて出して置きます。

私たちはその後始末とマスコミの処理をしますので、家の中で休んでいてください」

御手洗が中林に言う。

「ああ、何から何まですまないな」

「なに、大した事ないです。この所轄で事件解決の処理が早くて他の管轄より成績がいいのは、

先輩のお陰ですしそれで私たちもだいぶ助かっていますよ。では皆さん私はこれで失礼します」

玄關のドアを背に姿勢よく立ちながら、皆に軽く会釈をすると中林に敬礼をしてその後、

御手洗は外に出て行った。

しばらくして、外の警官たちも引き上げ、皆が落ち着き始めた頃、  
「なんか、おなか空いてない？」

と実芦が言い出した。

「そうだね、じゃ、今からすぐに作るよ」

歩大尉が席を立つと、

「わたしも、手伝うね」

実芦も同時に席から立ち上がり、二人で一緒に台所に向かい食事の準備を始めた。

歩大尉が食材を吟味しながら、中林に声をかけた。

「中林さんも、食べていってください。大丈夫ですよ。」

中林は葉瑠音とテーブルで向かい合わせに座って、小さな声で何かを話していたが、

声をかけられて台所の歩大尉のほうに向きを変えた。

「ああ、久しぶりだから、ご馳走になるよ。なんせ歩大尉の作る料理は天下一品だからな。」

歩大尉はその言葉に照れたのか、うつむき加減に小さな笑顔を見せた。

その横顔をちらりと見た実芦は、振り向きながら中林に話しかけた。

「えー？　じゃあ私のは要らないのね」

「そ、そんなことはないよ。実芦ちゃんの料理も最高だよ」

中林はあわてて手を前に出して、否定のしぐさをしながら、付け加えた。

「ウソですよ、ゆっくりしていつて下さいね」

実芦が小首をかしげて言った。

「いやあ、まいった。実芦ちゃんには、かなわないなあ」

中林はやられたと言う格好で、思わず吹きだした。

そんなやり取りで、部屋の中は、みんなの笑いにあふれていた。

やがて、歩大尉と実芦が4人の食事を運んできて、食器が、次々と並べられていった。

今までのことが、嘘のように楽しげな時間が流れていた。

和やかな時の中で、葉瑠音はサングラスの男のもたらした事を思い出していた。

その事はなにやら今以上に、自分の身边が騒がしくなりそうだと感じさせずにはいられなかった。

## 二部

### 3、徒具呂とくろ

時間は、少し前にもどる。

サングラス男が警察の監視から服をはぎとり、病院から逃げ出した頃である。

その直後、病院の非常階段を同じように降りて来る男がいた。

コーヒー店でサングラスの男とひと騒動を起こした、キャップ帽である。

サングラス男が収容されている病院を着きとめ、その中の監視されている部屋に、

たどり着いたものの直前で逃げられてしまった。

病院を出ると、グレーのワンボックスカーが駐車している場所に戻り、

胸ポケットから携帯を取り出し、ある場所に連絡を始めた。

二言三言話した後、携帯を切り再び胸ポケットにしまうと、車のエンジンをかけ、

すばやくハンドルを切り返し広い通りに飛び出していった。

道は空いていた。すべては何の問題なくうまく行っていた。

少なくとも今までは。

何が悪かったのか、きっかけは何なのか、今日一日を思い出し、これまでのことを振り返ってみる。

きっかけは、あの事だろうか。

このグループに入ってずっと一緒に仕事をしてきた相棒が、突然自分の目的があるので、やめたいと。

何を言い出すのかと理解できなかった。

グループでの仕事は、金銭的にも待遇も問題はないと思っていた。ただ、人に胸を張って誇れるような組織ではなかったのも、中には手が汚れるようなきわどいこともやらされて、やばいこともあった。

けれどもすべてはグループの力でうまく処理してしてくれた。

このグループに入るまでは、およそ世間一般といわれるものに馴染めず、

ことごとく周りの者達と問題を起こしてきた自分であった。

普通に一人の自分ならば、とつくに警察の世話になり、今頃は一生刑務所の中か、

どこかでトラブルに巻き込まれ野たれ死んでいたかもしれない。

そんな者にこうして生きていけるチャンスを与えてくれたのがグループGだった。

そう感じていたのは、相棒も同じとばかり思っていた。

しかし、実際は違っていたのだ。あいつは最初から目的があつてグループに入つたらしい。

そのことは、今日あのコーヒー店で聞かされた。

そしてグループの危険な立場も具体的に話していたがキャップ帽にしてみれば、

その事はどうでもよかったし、理解もしたくなかった。

ただ、自分達を必要としているグループを最初から裏切るような真似をしてきて、

拳句に批判めいたことを聞かされたのが許せなかった。

内から湧き出る怒りに任せて、裏切り者に制裁を加えようとしたが、あとで考えると今ここにいるのが不思議なくらいだった。

何しろ勢いでさらに警官を二人も、のしてしまったのだから。

きっと今頃は指名手配されていることだろう。

まあ、いい。やってしまった事はいまさらどうしようもない。

それより奴が持っていた封筒をボスに渡せば、事情を理解してくれ

て、

すべてはグループが後処理をしてくれるだろう。

やがて車は、大通りを渡り正面の巨大なビルの地下駐車場の中へ吸い込まれるように入った。

何度もハンドルを切り返ししながら、地下深くへ潜ってゆく。

そして行き止まりに達したとき、車は止まることもせずそのまま正面の壁めがけて突っ込む。

その瞬間、コンクリートの壁とおもわれた部分が消えた。

まさしく、空洞ができたのだ。

そのまま、グレーのワンボックスは中に入ると、空洞は一瞬にして壁に変わってしまった。

もとの行き止まりに姿を変えた。

ワンボックスカーが入った中は、グループGの部外者には決して入れないフロアだった。

キャップ帽は車から降りて、奥のスペースに移動した。

そこは黒い壁に覆われて、床と天井が発光している異様な空間であった。

スペースは奥行きがかなりあるが、奥に行くほど蛇の身体のように曲がりくねっている為、

入り口からは奥はまったく見えない構造になっていた。

中間地点まで行くと、無限と平田むげん へいたがいた。

「すいません、ただいま戻りました」

キャップ帽は二人に深々と頭を下げると指示をまつた。

「よし、奥へ行きな、ボスがおまちだぜ」

にやけながら体格のいい無限が顎で奥を指した。

中肉中背の平田はその場にしゃがみながら、身じろぎもせずにキャップ帽を見ていた。

この二人はいつも一緒に行動する。



グループGは常に二人以上で行動するのが決まりになっている。

これは、どんな仕事も確実にこなす為のシステムだ。一人が手一杯になった場合、

対応不可の状態を避けられるし、

とっさの状況判断についても選択の幅が利きよりよい結果をもたらすと思われるからだ。

キャップ帽はこの二人には別に話すこともないので、そのまま通過した。

そして、一番奥のフロアを目指した。

そこは巨大なモニターが設置され、その正面に一段高くなった赤い長方形の台が横長に置いてある。

さらにその前にはソフトクッションのようなものが置かれ、そこに軽く腰を下ろした少女がいた。

赤い台にクッションごと背中を預けた格好で入り口方向を見ているような姿勢だ。

「お帰り、それであんたが言っていた物は見つかったの？」

少女が自分の爪の手入れをしながら、上目使いでキャップ帽をゆっくり見上げた。

高校生ぐらいだろうか、化粧はしているがあどけなさまでは隠しきれていない。

茶色いカールがかった長髪が肩にかかり、シャープなあごのラインと大きな目は、

その顔の小ささを強調していた。

「ええ、まあ 手には入れてきましたが。」

罰が悪そうに、視線をそらしながらキャップ帽は話し始めた。

「それで、奴には逃げられてしまいました。いま、別ルートで行き先を追ってはいませんが」

話し終わると、少女をゆっくりと見た。

「それは、連絡で解っていたわ、それよりなんであんたが相棒と争う事になったのか、

そこが納得できないわ」

少女は腑に落ちない様子でキャップ帽に話すと、爪の手入れを終え退屈そうにクッションに寝そべてひじを着いた。反対側の腕はまっすぐ身体に乗せて、手には爪やすりを持ったままだ。「奴は、俺たちを裏切っていたのです。それを見逃すわけにはいかなかったから……」

「殴りかかったと言うの！」

少女がブーツで激しく床を蹴り、キャップ帽の語尾を奪い言い放った。

そして身体を起こすと後ろの真つ赤な台から飲み物の空き瓶を手に取り、

すばやくキャップ帽のすぐ脇の壁に投げつけた。

キャップ帽は反射的に上体を斜めに反らせて避けると、瓶が飛んでいった壁の方を見た。

瓶は壁に当たると、割れずに音を響かせながら床を転がりやがて止まった。

それと同時に少女が鋭い視線をキャップ帽に向けて言った。

「相棒をどうするかは、こっちが決めるって！なんであんたが勝手に判断するのよ！」

まったく何も解ってないよ。少ない人数で仕事をしているのに、そいつの代わりを探さなきゃならないじゃない。

余計な事をさせないでよ。そして、連絡の仕方もおかしいよ。

もつと細かく連絡して。そうしたらいろいろ教えてやれるのに。

このグループに無駄な人間はいないんだし、一度メンバーになったら、

みんな必要なんじゃないの。解ってるでしょ。特にあんたは。

私が最初にメンバーとしてリーダーに押したんだし、

危ないことを頼んだ後もそれなりに助けてきてやったんじゃない。

なんでなの？ グループの決まりごとともいまままで何度も話をしたよね？」

一気に溜まっていた物を吐き出すように喋る。

「もう、ほんとかっかりしたよ」

言い終わると、少女は後ろを向き一息入れた。肩が怒りと失望であえいでいた。

「すいません、でも俺はグループの為をおもって、」

少女の後ろを追いかけるように近づきキャップ帽は言った。

「なに？まだ言うの！」

少女はクッションの側に置いてあった革のバッグつかむと、振り向きざまにキャップ帽に詰めより、

そのバッグを振り上げてその顔面に叩き付けようとした。

しかしその瞬間、細い腕は動きを止められた。

少女は腕をつかまれて思わず振り向くと、いつから居たのか後ろにはスーツ姿の男が立っていた。

「あつ、徒具呂とくろ」

男はこの組織グループGのリーダーである徒具呂だ。

少女が腕の力を抜くと、男は自らの手も離れた。

「まあ待ちなさい、雨豆裸うづい。あれだけ言えば満足でしょう。

この人が大事ならもっと冷静に対処したほうがいいですね。それにそんな怖い顔をしていては、せつかくのかわいさも台無しです。」

ぶたれる覚悟をしていたキャップ帽は、呆気にとられた顔をしていたが、

素早く一歩後退すると頭を下げた挨拶をした。

「リーダー、いま戻りました」

スーツ姿の男は軽く頷くと、真っ赤な台に近づきモニターに向かって二人に背を向けて腰を下ろした。

見た目は20代後半、細身で髪の毛は肩までの長髪。サングラスを掛けいつもタイトなスーツを着ている。

「持ってきたものを見せて下さい」

徒具呂が背中をむけたまま、左手を後ろに伸ばし、指を鳴らした。

キャップ帽はすばやく前へ進み、

徒具呂の差し出した手のひらにサングラスの男から奪い取った封筒を差し出した。

徒具呂はその封筒を受け取り外観を一通り確認すると、

中から一枚の折りたたまれた白い紙を取り出し、すぐに広げて書かれている文字を読んだ。

「これはなんですか、冗談のつもりですか」

意外な問いかけに、キャップ帽は答えに詰まった。

徒具呂はその封筒から取り出した白い紙を、側でふてくされている雨豆裸に、

確認させるように差し出した。

雨豆裸は紙の端を指でつまむ様にとると、ひと目見て笑い出した。

「何、これ。冗談のつもり？　もし、真面目にこれを持って来たのなら、とんでもないよ」

紙を持った手を高くかざし、その紙をキャップ帽に見えるようにひらひらさせて、

取れるものならとってみな、と言わんばかりにキャップ帽の周りを歩きまわった。

キャップ帽はそんな雨豆裸の振る舞いに苛立ち、思わず手を差し出した。

その手にすばやく紙をのせて、雨豆裸はさっと徒具呂の横に退いた。

「こつ、これは、病院の薬局のレシートだ。

解熱剤、ビタミン剤？何だ、いったいどうなっているんだ！」

紙の内容を見たキャップ帽は、そんなはずはない、絶対おかしい、と言った素振りですと紙と徒具呂の方を交互に何度も見ていた。

徒具呂はゆっくりと振り返ると、腕を組みながらキャップ帽に近づき静かに言った。

「なぜ、中身を確認もせずに持ってきたのですか」

深く、言いくるめるように問いただした。

それは、小さな子供に当たり前のことを諭すような口調でもあった。

その言葉に、悔しさを押し殺すように、唇をゆがめて立ち尽くすキヤップ帽は、

「たしかにあいつは、ここに持っている、と言って上着の胸を叩いていたんです。」

とは言ったものの言い訳にしかないこの状態をなんとか取り繕うとした。

キヤップ帽はコーヒー店のことを思い出していた。

席に着いてグループを抜ける話を始めた奴に、なにか根拠があるのか、と問いただしたときに迷わず、

「それはここに持っている、今ここにある。ただ今すぐには見せられない」

と、奴は言ったのだ。

これは、なにか暗号でもあるのか、それともほかの場所に持っていたのか。

いや、まてよ。あいつ、いつも胸ポケットとズボンの後ろポケットに手をいれて、カードとか、

紙幣を出し入れしていた。

倒れていた時に奴のズボンまではあの短い時間では探せなかったし、思いもつかなかった。

きつとそうだ。キヤップ帽はやるべきことはわかったと決意した。

奴を探すのだ。いや探し出し必ずここにつれてこなければ、俺の立場がなくなってしまう。

「すみません、リーダー！もう一度俺に奴を探させてください。今すぐ行動します」

キヤップ帽は徒具呂に向かい深く頭を下げ、必死の形相で頼み込んだ。

その額は汗で濡れていた。

徒具呂は少し考えるように片手を顎にあて、しばらくそのままにい

た。

すると考えがまとまったのか、その手を下げ、ゆっくり口を開いた。「いいでしょう、今、奴に外をうろつかれても困ります。計画は着実にうまくいっているし、そして、完成しつつある。」

そんな時期に裏切り行為をした者をこのままふらつかせておく訳には行かないでしょう。

もう一度、機会をあげましょう。

ただし、この雨豆裸とその二人をバックアップに連れて行きなさい。

絶対に奴とその身につけた情報を手に入れてくるのです」

徒具呂が近づきながら、キャップ帽に言いつける

「そして今の車にはしばらく乗らないように。もう手配が回っているはずですからね。」

違う車で出かけてください」

付け加えるように徒具呂が話し終わると、雨豆裸と無限、平田に顎で合図した。

雨豆裸はキャップ帽に近づいて、ため息をついた。

「あんた、今度は最後だよ。もう二度と失敗はできないと思ってね」その顔を覗き込むようにしながら言い終わると、

すぐに徒具呂に向き直り足元にあったバッグを取り上げた。

肩に背負うようにして一呼吸してから、もう一度向き直り出口側に居る二人に声をかけた。

「無限、平田、さあ出発だよ。車を用意して」

その呼びかけに答えるように、二人は軽く返事をしてすぐ外に出ていった。

さらにその後を急ぎ足でキャップ帽が追いかけて行く。

雨豆裸はゆっくりと確実な足取りで、徒具呂に軽く目配せをしながら頷き、

指を鳴らすと軽く口笛を吹きながら出口に消えていった。

日が昇り始め、街は白々と姿を現し始めた。

まだ静かな路上をゆっくりと走る2台の車がいた。

一台は、グレーのセダン、そしてもう一台は、

その後を突かず離れず一定の間隔を守りながら走る黒いセダンだ。

グレーのセダンには、キャップ帽が運転席に座り、あたりを見渡し  
ながら運転している。

その横で助手席に座りひざの上にはノートパソコンでなにやら検索  
している雨豆裸がいた。

いい結果が出そうもないと確認すると、キャップ帽に視線を向け話  
しかけた。

「なにか、ほかに情報はないの。あいつどこに隠れてるの。」

どこにも足跡が見つからないし飲食店、カフェ、ビジネスホテル、  
そのほか隠れられそうな場所でもグループの情報検索にまったくか  
からないし。

いままでの行動範囲で心当たりはすべて回ったのに。ねえ、そうだ  
よね」

「まったくです。今まで奴が回りそうなところは、すべて確認しま  
したし、

外部から当たれるところは検索範囲ですべてのはずですが」

キャップ帽が必死に周りを見ながら答えた。

そしてハンドルをその両手で強くたたきつけた。

「きっと何もない場所ですと隠れているのかも知れませんが」

そうなつてくると奴が動き出すまでこっちは手が出せません」

キャップ帽は軽く雨豆裸に視線をむけて指示を仰ぐように言った。  
「仕方ない。今日のところはおとなしく引き下がるしかないか。し  
かしむかつく。

そんなに必死に守るものならなおさら奪いたくなってきた。

いまに見てなよ、絶対につかまえてやる。」

ノートパソコンをダッシュボードにしまつと、携帯をだして話した。

「平田、今日はお開き！戻るよ」

後ろの車から、ヘッドライトの点滅をサイドミラーで確認すると、キャップ帽にGのフロアに戻るようにつた。



## 三部

### 4、雨豆裸うまひ

どこに行方をくりましたのか、サングラスの男は見つからずじいた。

昨夜から今朝方まで雨豆裸と無限、平田の4人、2台の車で知る限り、

グループの情報範囲を探し回ったが、まったくの不発に終わった。皆、いらつき、あせり、などを伴い険悪な時間が過ぎたが、どうしようもないと観念すると、ひとまず帰ることにした。

グループのフロアにもどり、徒具呂に状況報告して、3人と別れたキャップ帽はひとりねぐらに戻るためにビルから通りに出た。

近所の飲食店で食事をしながらも、探しもれたところはないかと、そのことが頭からはなれずにいたが、部屋に戻り、横になると疲れのせいかなそのまま眠りについていた。

グレーのセダンが地下駐車場から出る。

通りに出て走り去る運転席の窓にはキャップ帽の横顔が見えた。

再び夜の夕闇が訪れる頃、もう一度サングラスの男を追い求めて出かけていく。

今夜こそは何か手がかりがあるはず。いや、必ず見つけださなければ。

その思いだけでキャップ帽は車を走らせる。

新しい居所がわかるわけでもない。完全に行き詰まりだ。

だが、使命感だけで動くには十分だ。今のキャップ帽にはそれしかなかった。

もう一度何もかも空にして、あのコーヒー店から探すことにした。グレーのセダンが、コーヒー店近くに来たとき、対向車線を赤く点滅したライトの集団が近づいてきた。

予感がしたのか、グレーのセダンをすばやく路地にいれ、ライトを消して様子を伺った。

救急車とパトカーが集団で同じ方向に走り去った。

これはなにか事件だな。キャップ帽は直感した。

一息つくつと、エンジンを掛け、その方向をなぞるように、セダンは走りだした。

パトカーの光の後を遠目に追いかけてゆくと、住宅街の坂の上のほうに人だかりが出来ていた。

救急以外の車も着ていた。マスコミ関係だろう。

その喧騒を避けて、キャップ帽は少し離れた目立たないところに車を止めた。

車を降り野次馬にまぎれて、事件の現場と思われる家が見えるところまで来た。

ちょうど、被害者が担架に乗せられて玄関口から救急車に運び込まれてくるところだった。

その人物は男だ。担架が近づいて横を向いたとき、男の顔が振動でこちらに向いた。

完全に息をしていないのが解り、絶命しているのは明確だった。

そしてその男はキャップ帽の捜しているサングラス男であるのもしきりと解った。

何があったのか、キャップ帽は思いをめぐらした。

しかしどう考えてもここに奴がきて、何らかの形で死にまで至らしめる事情が解らない。

やっと奴を探し当てたが、これだけの人だかりでは手が出せない。

まして近づくなど無理だ。

ただひとつ確かなのは、奴の口からグループの秘密は漏れなくなつた。

その点ではいいことだ。あと残された事は奴が持っていると思われる書類だ。

何とかその死体に近づき、探してだすことだ。

しかし警察のことだからもう奴の持ち物はすべて持ち去られているだろう。

そうだ、そうに違いない。

ここはうかつに奴の身体に近づこうものなら、捕まえられてしまう。奴のことはあきらめよう。

それよりなぜここで命を失う羽目になったのか答えの一部でもいいから見つけられるまで、

近くで様子を伺うことにした。

事件処理の警官達も調査を終え、引き上げにかかると、

それに合わせてマスコミ連中も潮が引くように事件現場から立ち去っていく。

後には熱心な野次馬が数人いたが、彼らももう何も新しい展開がないことを確認すると、

それぞれの家に消えていった。

いつもの静かな住宅街に戻った道路に、グレーのセダンが止まっていた。

中にはキャップ帽の男が背を低くして、事件現場となった家の様子をじっと伺っていたが、

外からでは何も中のことはうかがい知る事は出来ないでいた。

待つこと数時間、玄関のドアが開き男と少女が会話をしながら出てきた。

中林と実芦だ。

「では、ごちそうさま。俺の車で実芦を送ったらそのまま帰るので」

中林が中にむかつて挨拶をすると、実芦も一緒に中の少年に手を振りながら挨拶をする。

「じゃあ、明日ね 歩大尉」

「ああ、また明日」

歩大尉が答える。ドアを手で支えながら玄関口に見送りに出てきた。

そのとき、向かいの道路沿いの木の陰に止められたグレーの車の男の目が光った。

あれは、たしかコーヒー店にいた少年、そして男と一緒に車に乗り込もうとしているのは、

そのとき少年と一緒にいた少女ではないか。

なにか事の次第の一片が見えたような気がした。

そうか、細かい事情はわからないが、

この少年達に会いにきて自ら事件を招いてしまったのかも知れぬ。

奴のことだからうまく行かなくてしくじったのだ。

となれば、この少年、もしくは少女が奴の死に至らしめた理由と、

例のことを記した書類等のありかを知っているかもしれない。

なんとしても聞き出さねば。

キャップ帽の男はふつふつと湧き出る強い意思に意外なほど心地よい物を感じた。

もう、迷うことはないのだ。

目的が決まったキャップ帽の男は車の中でじっと彼らを見つめていた。

中林の車は、マンションの前に止まる。

住宅街からは少し離れた広めの公園の並びに建つ比較的高層の四角い建物だ。

公園の木々と同じ種類の立ち木を敷地内にも取り込み、

淡い色を基調とした外装タイル、そして積極的に緑を取り入れたエントランスと、

その全てが景観調和を演出した静かな雰囲気をかもし出している建物だ

その正面に止まった車から実芦が降りて、中林に声をかける。

「今日は、本当にありがとうございました。またよかったらお食事をご馳走させてくださいね」

にこやかな挨拶を送ると、車の中林は頷いた。

「まあ、無事でよかったよ。近頃はどこも物騒になっちまった。本当に困ったものだ。」

実芦も気をつけてな。じゃあお休み」

中林が軽く手を上げると、実芦は車のドアを閉めた。

再度、中林にウインドウ越しに挨拶すると、すぐに振り向きエントランス向って行った。

中林は実芦がマンション内に入るのを確認するとハンドルを握りなおし、

軽くあたりを見渡すとすばやく発進させ自宅のある方向に向って走り去っていった。

その姿を照明を消した車から、

二人がそれぞれに立ち去るのを確認するキャップ帽の姿があった。そして、ヘッドライトが光る。

グレーのセダンはその場を中林の車と反対方向に走り去った。

キャップ帽は勝利を得たように笑っていた。

これで、それぞれの場所がわかったと言わんばかりの気配を漂わせながら。

グループのフロアに戻ると、雨豆裸がクッションに座りながら、ノートパソコンを操作していた。

戻ってきたキャップ帽を見ると即座に口を開いた。

「あいつ、死んでたみたい。道理で見つからないはず」

素早くノートパソコンの画面をキャップ帽に見せた。

そこにはグループの情報一覧があり、

その中のウィンドウがサングラスの男の死を知らせていた。数枚の現場写真も載っている。

地面に血のりを広げその中で折れ曲がった木の枝のように、生気を失ったサングラスの男が倒れている写真だ。

「あいつを撃つたのは、現場近くに居合わせた警察関係者みたい。これはかなりの腕で抵抗する暇もなかったようね。一発でしとめられている」

雨豆裸がおよそ少女とは思えぬ観察力で現場写真の分析をして説明する。

どのくらいそんな状況を経験しているのか、と思うとキャップ帽は背筋が寒くなった。

確かにこの雨豆裸の物腰は人を威圧する迫力がある。

この威圧感やはり修羅場を潜り抜けた物のみが有するものなのであろう。

そう思うとますます逆らえぬと思うのだ。

「実はそこに、今まで居ました。警察達が現場に向かうところを偶然通りかかったので、

後を追うとその場所でした」

「えっ、それで、なにか収穫はあった？」

雨豆裸が身を乗り出して、これは気が利くじゃないかといったしぐさで話す。

「ええ、事件現場で、その警察関係の者と思われる男と、例の書類のことを知るガキどもを見つけました。

そして居場所も確認してきました」

「よし、じゃあやることは解ってるわね。いつもの手順でやるから」

雨豆裸はノートパソコンを真つ赤な台に置くと、無限と平田を呼び出し、

3人にこれからのことを話し始めた。

次の日の午後である。

学校が終わり何時ものように歩大尉と実芦が自宅に向って歩いていく。

歩きながら話を交わす二人の話題はお互いのクラスでの出来事や、同級生が話題にしたテレビのドラマやバラエティのことなどであった。

普段の通学路の行き帰りは話などあまりしなくてもそれなりに時間が過ぎていたが、

昨日までの出来事が二人の関係に違和感を生じさせてお互い黙っていられたかった。

自然と肝心の話題から避けようとしている。

このまま時が過ぎて忘れてしまえばいいと感じていたし、

この違和感も時が解決してくれると思うのは二人とも同じであった。そしていつもの角まで来ると、実芦は歩大尉に別れの挨拶をする。

「又、明日ね」

「じゃあ」

実芦に軽く手を振り歩大尉は坂の方へ歩いてゆく。

実芦も同じように手を振ると背を向けてマンションに向かう。

今日の二人は何か味気ない感はあるが、

しばらくは仕方ないかなと実芦は考えていた。

でも一人になるとまったく別の思いが湧いて来た。

学校ではそろそろ中間の試験が近づいている。

最初の試験なので少し心配だそして高校に入るといろいろと忙しいことがある。

今日は担任から部活動に入る様に進められた。

将来進学等に有利になるので、放課後に用事がなければ入っていたほうがいいそうだ。

別に何も興味がないので、今まで気に掛けていなかったが、いざどれかを選択しなければならいとなると迷うばかりで決まらない。

友達がいればそれに続いて入る手もあるが、正直仲のいい友人はい

ない。

そうだ歩大尉が部活に入ればそれと同じにしよう。

明日、歩大尉に聞いてみよう、

などと思いながらその歩みは何時しかマンションのエントランスに近づいていた。

ふと気がつくとマンション入り口の道路の前に、

なにやら車が一台エンジンを掛けたまま停車している。

窓にはスモークの黒いフィルムが張られているようで、中の様子は見えない。

何かいやな予感がして、すぐにそこを通りすぎようとした時、

いきなり後ろから身体を抱きかかえられ、口元をガーゼの様な物で覆われた。

身体を離すため、その腕を払おうとしたが、身体が利かず、次第に目の前が暗くなり力が抜けていく。

口元を薬品のついた布で押さえられて呼吸ができない。

実芦はもう自分の力では動けなくなっていた。

鞆を持つ手が力なく下がると道路に鞆が落ちた。

実芦は完全に意識を失った。

「ここに早く！」

車のドアが開き、少女がすばやく出て、後部のトランクを開けた。雨豆裸である。

実芦を抱きかかえて男が足早にそのトランクに連れて行く。

雨豆裸は実芦の落とした鞆をすばやく拾い上げる

「手足を縛ったら、頭に袋をかぶせて。くれぐれも息ができるように、死なれてはまずいから」

雨豆裸の言葉にうなづく男は、あのキャップ帽である。

言われた通りに、実芦の手足を白い拘束テープで縛ると、

黒い目隠し代わりの布袋を頭からかぶせた。

首周りに十分余裕があるのを確認すると、トランクを閉めにかかる。この車は通常の車と大きな違いがある。それはトランクルームの中



だ。

一般的な車両は荷物スペースを確保する為に内装は、薄いフェルト地で荷物が車両の鉄板に直に当たらないようにしているだけなのに対して、

これはかなり厚い衝撃吸収素材で覆われて中はかなり狭い。

とは行っても大人ひとりとは十分横になれるようになっている。

いや、車に詳しい者でなくても人間が中に入る事に気づくのは用意である。

つまりこの車は誰かをトランクに乗せて運ぶために作った車と言えるだろう。

実芦を横にして寝かせてトランクを閉めると、

キャップ帽はあたりを見渡し人の気配がないことを確認して運転席に乗り込む。

助手席には雨豆裸が座り化粧を直していた。実芦の鞆は後部座席に置かれている。

「さあ、戻るよ」

キャップ帽に指示すると、車はそのまま走り去って行った。

実芦と別れた歩大尉は自宅に帰り自分の部屋に入ると、

机の引き出しからサングラスの男が持っていた封筒を取り出して、机の上において何かを考えている。

これはいったいどんなことが書いてあるのだろうか。

あの男が必死になってこれに拘っていた事が今だに頭の中をめぐっている。

結局、警察に出すことも出来ないでいたし、誰に相談出来る訳でもない。

こんな時に話せるのは、ハルしかないか。

と考えているその時、ドアがノックされた。

「はい」

「歩大尉、あけるよ」

葉瑠音が静かに部屋に入ってきた。

「実芦が行方不明になった。中林に連絡してくれないか」

「えっ、どうしたの？何処かに行ったのかい？」

「いや、解らない。ただしこれは普通じゃない。実芦の存在が感じられない」

歩大尉は部屋を出るとあわててリビングの電話で中林を呼び出した。

葉瑠音はリビングの椅子に静かに座る。

中林に話をする、

今からそこに向かうとの返事でした。しばらくそのまま待っていてくれと言った。

いったいどうしたと言った。

次から次に何かに巻き込まれたように事件が起こるなんて。

しかも、今度は実芦が行方不明とは。

歩大尉は動揺する気持ちを抑えきれず、葉瑠音の横に座ると話し出した。

「ハル、どうということ？実芦の存在が感じられないって」

「いや、大丈夫だと思うが突然、実芦の精神波が遮断された。

これはなにか特殊な物体で包みこまれたような感じで、

こんなことは普段であればほとんどない。

きつと何か特別な状況になっているはず。」

「どうしたらいいんだろう。」

「やっぱりこれは中林さんに相談するしかないみたいだけど」

歩大尉の言葉に葉瑠音がうなずいた。

中林が到着するまでまだかかりそうだった。

歩大尉は自分の部屋にもどり、気になっていた封筒を手にとって葉瑠音のまえに来た。

「ハル、これは昨日の男が持っていたものでどうしたらいい？」  
差し出された封筒をみて、葉瑠音はゆっくりと言った。

「それは、しばらくお前が持つているがいい。  
さして気にするほどのことではない。

ただし、欲しがる者達には非常に重要なことが書かれている。  
歩大尉、これを見たとしても今のお前には意味はないだろう。  
今まで通り机の中にしまつて置くがいいだろう」

「もう、中に何が書かれていたか見た？」

「いや、昨日きた男が私に向けた“思い”の中にその書類を書いて  
いるところを感じた。

そしてその文字もはつきりと私には手にとるように解った」

葉瑠音の言葉にうなずくと、

部屋に行き歩大尉は封筒をまた机の引き出しにしまい込んだ。  
台所からお茶をいれて葉瑠音にわたして、歩大尉もコーヒーをいれ  
た。

実芦が行方不明とのことは何か、

今までの男たちの関係ではないのかと思ひ始めていた。

あの封筒がすべての原因ではないのか。

歩大尉が自分の思いにふけっていると、葉瑠音が言った。

「歩大尉、今はまだ状況がわかっていない。余計なことを考えない  
方がいい」

はつとして、振り返るとそこには葉瑠音のやさしいしぐさでお茶  
をのむ姿があつた。

もうすべて歩大尉の思いは解つたからと言う態度であつた。

いつものように葉瑠音のその存在を感じると歩大尉は落ち着いてき  
た。

そうだ、悪いことは考えずにこれからの事実だけに目を向けようと  
思った。

そのとき、ドアがノックされ外から声が聞こえる。

「中林です」

ドアに近寄り、返事をしながら扉を開けるとすばやく中林が家の中  
に入る。

「実芦が行方不明だつて。昨日は無事に帰ったはずだが」

葉瑠音に話しかける中林は冷静な感じだった。

「いや、ほんの前のことだ。突然消えたようなのだ」

ゆっくりと、中林に答える葉瑠音。

「不明になった最期の場所は解るか？実芦のマンション前か」

「そうだ、そこでなにかに捕らわれるように実芦の精神波がみだれ、直後に遮断された。

精神波の乱れは何らかの形で実芦の意識が失われたことを意味している。

ただその精神波が遮断されたことは今の状況ではまったくの不明だ。でも最後の精神波は生気を感じさせていた。

実芦は眠らされたまま連れ去られたと思うのが妥当だ」

葉瑠音の話を聞くうちに、これは只ならぬ者たちの仕業であると中林は確信した。

## 四部

### 5、中林

中林は以前、警察で刑事をしていた。

主に行方不明、失踪、誘拐そして殺人事件等の凶悪犯罪の特捜部の一員であった。

警察時代ではその中で何度か解決に導いたものもあるが、失踪事件の中には事件が特殊で手がかりすら発見できずに、時間だけが過ぎて失踪者が危険に追い込まれてしまうものも多々ある。

これは、警察権限等の制約により捜査が行き詰まり、事件は最悪の結果を迎えるのだ。

中林はそんな警察に限界を感じ自ら退職を願い出て、独自に失踪者、誘拐事件を解決すべく私立探偵をするようになった。ただしこれには非公式の権限を与えられているのだが。

警察時代に担当した事件がきっかけで、葉瑠音と出会うことがあり、そのときの事件解決に葉瑠音の能力が多分に貢献したのだ。

このことは表ざたにされたくない葉瑠音自身の頼みもあり、最終的に事件の解決をしたのは中林の地道な捜査による物とされていた。

そんな経歴を評価されて、中林は警察上層部より声が掛けられる事になった。

詳細はこうだ。

ある時、国家レベルの要人の家族が誘拐されるという事件が起きた。当然、警察の持てる力を使い全力で捜査をするも、犯人も家族の行方もまったく手がかりがつかめないまま時間が経つ

ていった。

そこで特別プロジェクトが緊急に組織された。その中の一人に中林が抜擢された。

中林はその特別プロジェクトに入る条件にメンバーは個々に活動できること。

表向きは私立探偵、

もしくは私設警察としてどこの組織にも属さない単独警察官であることの条件を出した。

さらに捜査に関する情報の出所は一切探索しないとの条件も要求した。

すべては結果次第との事であったが、

上層部が最後の頼みの綱である彼らの条件を飲まない訳はなかった。これが中林が非公式として与えられた権限である。

要人の家族の誘拐事件については、

中林は事件担当直後から葉瑠音に失踪者の探查依頼をしていたため、即座に被害者の居場所を確認できた。

どのような場合でもその情報源は探索されないので、

堂々と中林はほかのメンバーと共にその要人の家族を救い出すことに成功し、

当然その犯人も確保できたのだった。

この功績により中林はプロジェクトの継続活動とリーダーの権限を得た。

このことは葉瑠音もすべて承知していた。

中林の行方不明者を探し出して救いたいという純粋な気持ちに賛同し、

今では積極的に協力をしている。

そして中林の協力スタッフの維持経費が葉瑠音たちの経済的支援となっているのだ。

しかし、今回は最初から葉瑠音の能力を超えた困難が待ち受けて

いた。

実芦の失踪はその直前までの存在は確認できたがその後の足取りの一切が消えているのだ。

葉瑠音が感じ取れる精神波を妨害するものにより探査行動が無力化されている。

でも中林の捜査にはこのような場合も当然想定されている。

人知を超える能力が使えなくなった場合は、地道に手がかりを追いつくだけでも誘拐犯に近づくのが基本だ。

中林はまず実芦が連れ去られたと思われるマンション前から捜査を始めた。

エントランスにはさほど変わった様子はなかった。

車を止めしばらくそこに留まることにした。

何人かの行きかう人々が居たが、どれも別にとりだて変わったところは見受けられなかったが、

実芦が失踪したと思われる時間に、

マンション前をゆっくりペットの犬と散歩をしてくる男性が目についた。

中林は直感した。

車を降りてその男性に挨拶をすると話しかけた。

「いつも、このあたりを散歩なさっているのでしょうか？」

「はい、いつもこの時間ですね。意外とこの時間は人通りも少なくてのんびり出来るので」

「それでは、昨日もこの界隈を散歩なさっていましたか？」

「ええ、そうですね。そうだと昨日は珍しく車が止まっていましたね、このあたりに」

中林は自分の直感が正しかったことを確信した。

男性から特徴を聞き出し、再度挨拶をすると自分の車に乗り込み、運転席の車載コンピューターにその車の特徴を入力した。

すると最近特徴的な失踪事件に関する情報の中に条件に当てはまる車両があった。

その事件は、いずれの被害者も失踪してから二、三日で自宅に戻るといったもので、

しかも無傷で返っている。

中には失踪していたが家族が被害届けを出さずに終わっているものもあるとのことだ。

なぜそんなものまで報告されているかというと、

どの被害者もその失踪した日からの記憶が一切ないのだ。

どこで連れ去られどこに居たのか一切覚えていないらしい。

持ち物も一切奪われていないし、その間に携帯電話や、

現金カード類も使用された形跡もない。

携帯電話が失踪直後に電源を切られていた以外は。

その車は、被害者たちが最後に目撃された場所にいずれもいた形跡があった。

正面にはナンバーが取り付けられず後部ナンバーだけのはずだが、どの目撃も車両の後部を塀や壁に向けられて止まっていた様だ。

この手の被害者が無傷でしかも周辺の家族や友人にさほど被害がない場合、

通常では中林の管轄外になる。

しかし、今回は特別だ。

いつも捜査協力してくれている葉瑠音の頼みでもあるし、

ましてあの実芦が失踪、

いやもう誘拐であるのは確実だ。

そしてこの事件の真相は何か深いものがきつとある、と中林は感じ始めた。

ともかく、目撃証言によるグレーのセダンの足取りを追うことにした。

Gのフロアを先頭きって雨豆裸が歩いて行く。

手にはそのファッションには似つかわしくない通学用の鞆を下げて



いた。

その後ろに少女を抱えたキャップ帽の男が付いて歩く。

少女はまだ黒い袋をかぶされたままで、意識はないようだ。

フロアを一番奥まで行くと徒具呂が壁に沿って立っていてその片手が壁を撫ぜる様に上下すると、

壁の一部が開いた。

開いたというよりは四角い空間が空いたと言う様であり徒具呂はまるで二人を招き入れるように、

手を進行方向に差し出した。

雨豆裸とキャップ帽は慣れた風に、静かに奥に入っていった。

入り口の空間は3人が中に入ると元の壁に戻っていた。

部屋は計測機とそれぞれにモニターが接続されている機材が壁一面に並べられて、

中央に寝台が用意されていた。

その寝台を取り囲むように各種のカメラとセンサーが大量に設置されている。

キャップ帽はその寝台に少女を寝かせ静かに頭から布袋を取った。

実芦の顔が静かな眠りを漂わせている。身体は制服のままだ。

靴は脱がされ寝台の床におかれ、その横に雨豆裸が静かに鞆を置いた。

「ご苦労。私はしばらくこの子をモニターさせてもらいます。後は自由にしてください。ここにいるなり外で自分の用事を済ませるなり好きにしてくださいです」

二人に言い終わると徒具呂は白衣を身に付けサングラスからゴーグルに付け替えた。

そして、実芦の頭部にセンサー装置の付いたヘッドキャップを静かに取り付ける。

それと同時に自動起動の各機材のモニターがいつせいに瞬き始めた。ものすごい速さで画面が切り替わりすべてをデータ化していく中時折、

徒具呂がセンサーの感度を調整しつつ様子を見守る。

部屋の奥の机に座りその様子を見守りながら、

雨豆裸は自分の荷物から化粧品を机の上に並べ始めた。

爪の手入れを始めるつもりだ。

そんな様子を徒具呂は指してとがめる様子もなくそのまま実芦の観察をしている。

キャップ帽の男は無言で部屋を出て行った。

結果が出るまでは何も指示がないのはいつものことなので、自分のねぐらに戻っていったのだ。

観察は少なくともまる一日はかかるだろう事も解っていたから。

しばらくすると、実芦の意識が戻り始めた。

自分の置かれている事態を確認するようにまぶたが静かに開かれ回りの様子を見ている。

頭にかぶせられたヘッドキャップにより首は自由に動かせないし手足は寝台の柵に固定されていた。

身動きをし始めた実芦に気がつく徒具呂はそばに歩き寄りそつとささやく

「はじめまして。私はここの研究施設の徒具呂といいます。しばらくあなたを調べさせてもらいますが、抵抗はしないでください。何も悪いようにはしませんから」

言い終わると実芦が抵抗をしないことを確認してまたモニターの調整を始めた。

一通り検査を完了すると今度はデータの分析をする。

ここからは被験者は関係ない。

今までのデータとの比較により結果がわかる仕組みだ。

徒具呂は目で雨豆裸に合図した。雨豆裸が静かに実芦に近付き、目を合わせた。

実芦は一瞬たじろいだがその派手さとは裏腹に化粧の顔の瞳にはまだあどけなさがあった。

もしかして自分と同じかそれより年下かもしれない。

「いま、これをとってあげるからね。静かにしててよ」

そつと実芦のヘッドキャップをとり、手足の枷もはずしていく雨豆裸だった。

少しずつ自由になる身体と、

雨豆裸のそれぞれのしぐさに意外な優しさを感じて実芦の緊張は消えていた。

「実芦、だよ。ミロって呼んでもいいかな。高校生だよ。学校ってどんな感じ？よかったら教えてくれない」

意外な物言いに、実芦は一瞬とまどった。だが悪気はないと感じたのですぐに答えた。

「いいところです。」

みんなそれぞれに考え、おしゃべりをして、笑ったり、励ましたり、走ったり、転んだり？とかでとつてもにぎやかです」

楽しそうに話を始めた実芦に、雨豆裸は引き込まれ始めた。

実芦は寝台に腰をかけるような姿勢になり、

雨豆裸はその隣に軽く飛び乗って同じ姿勢で座った。

そして実芦の顔を覗き込むように話す。

「うん、うん、それで、具体的にどんなことするの」

「えーと、たとえば、」

毎日のなんでもないことを並べているだけなのに、

雨豆裸は目を輝かせて実芦を質問攻めにした。

雨豆裸はとても楽しそうだった。そんなやり取りがしばらく続いた。

「へえ、そうなんだ。今まで知らなかったよ。」

そんなに楽しいなら行ってみたいけど、多分無理だよな」

一通り話を聞いていた雨豆裸の笑顔が翳った。何かさびしそうでもあった。

そのとき会話を遮る様に、徒具呂がしゃべり始めた。雨豆裸に命令する。

「もう、いいでしょう。さあいつもの機械を用意してください」

雨豆裸は一瞬戸惑うような視線を実芦に向けた。

「何？どうしたの」

実芦の問いかけに、雨豆裸は悲しそうな目で答えると、首を激しく左右に振った。

「徒具呂、今回は無しにしてくれないか、いや、いやだ。絶対にしたくない」

雨豆裸は視線を合わせないように下をむきながら思いつめたように言った。

「何を言うのですか。これは我々を守るために必要な事なのです。さあ、準備をしてください、雨豆裸！」

徒具呂の声が大きく部屋に響くと雨豆裸は身をすくめた。

とんでもないことを言ってしまったと感じ、

自分でもいっただい何をしようとしているのかと思うと身体が震えはじめていた。

そんな雨豆裸を隣から肩を抱き寄せるように実芦がささやいた。

「何も気にしなくてもいいよ。」

あの人の言う通りにしてかまわないから、ね、雨豆裸ちゃん」

雨豆裸は信じられない、といった表情だった。

なんでこんなときにそんなに落ち着いていられるんだ。

しかも、自分の事を優しく名前まで呼んでくれた。

こんなことは初めてだし、なにかとても暖かい物が身体の中に広がっていく。

雨豆裸の気持ちは決まった。

この子をいつものように出来ない。いや、してはいけない、と。

「やっぱり、出来ない。そんな事この子にさせない」

雨豆裸は必死だった。後のことは考えられなかった。

あの機械は記憶を操作してこれまでの誘拐から部屋のこと、実芦の中の雨豆裸と話した時間まで消されてしまうのだ。

そのことがなぜか雨豆裸にはとても大事な時間を奪われるような気

持ちになり、

拒絶反応になったのだ。

「まったく、役に立たない子だ。退きなさい、私が直接やります」

徒具呂は正面に立ちはだかる雨豆裸を力づくで押しやり、実芦の手を握った。

それはその直後に起こった。

徒具呂は一瞬痙攣をしたような動きを見せたかと思うと、

そのままその場に立ち尽くし硬直してしまったのだ。

その瞳は焦点を失い、遙か彼方を見ている。

まるで魂が抜け出てしまった肉体がそこに残ってしまったかのように。

そして実芦の表情は険しいものになり、

目は大きく開かれその瞳は強くすべてを見通すように徒具呂を見据えていた。

徒具呂は落ちていた。深く静かな水の中を果てしなく。

そこには時間の流れも深い呼吸の音も存在しない。

それは、暗い記憶の海の中を深く深く降りていくかの様だった。

やがて何処からともなく明かりが差し込んで、

周りが見えてくると同時に、ぼんやりと人影のようなものが徒具呂の目の前に現れた。

そしてはつきり見えてきたのは、明るい部屋の中で楽しそうに話しかう男女の姿だ。

一人が振り向きながら声をかけてきた。にこやかに話しながら抱き上げられた。

徒具呂は少年になっていた。

身体を軽く揺する様にあやし、もう一人がほほを指でつつきながら同じように話しかけてくる。

古い記憶の断片は、自らの両親の記憶であることを徒具呂は感じていた。

とても満ち足りていた。なにも怖くはない。希望と愛が彼らを包み込んでいた。

永遠に存在している。と思われたとき、  
光の渦が両親を包みさらに明るく輝きだすと深い闇の手がその光ごと両親を引き裂いた。

大きな悲鳴の様な音が渦巻き、あちこちから発せられた悲鳴が甲高く共鳴していた。

暗い闇の中で徒具呂は泣き叫んでいた。もう二度と取り戻せない時の中で。

雨豆裸は立ち尽くしていた。徒具呂の様子がおかしい。

実芦に触れた途端、言葉が途切れ遠くを見つめたまま硬直している。ほんの数秒だったが、何か時間が止まっていたかのような感覚になっていた。

その緊張が徒具呂の深い呼吸の後、消えた。

徒具呂はその場にしゃがみ込んでしまった。

そして頭を抱えながら自分の記憶と戦っているようだ。

実芦は寝台に座ったまま静かに目を閉じていた。

徒具呂が叫ぶ

「みんな、出て行ってくれ。今すぐ」

雨豆裸はその言葉に即座に反応し、実芦に声を掛けて意識を確認した。

「実芦、大丈夫？」

「え、ええ。平気」

実芦はすでに徒具呂に触れる前に戻っていた。

それを確認すると、雨豆裸は実芦を抱きかかえるように寝台から降り、

靴を履くように言った。

そして実芦の鞆をすばやく取り上げて入ってきた壁の方に二人で向

かった。

壁は雨豆裸が近づくと消えて、フロアへの出口になる。

二人はそこをフロアに向かって出て行った。そして出口は壁に戻った。

徒具呂はじつとしゃがんだままで、今の出来事を理解しようとしていた。

両親はあの時どうしていたのかと。

記憶の糸を遙かな過去より辿ってみるが、何に結び着くのかまったく解らずに居た。

中林はグレーのセダンの足取りを追って、ある町の大規模駐車場に来ていた。

周辺にはアパートや宿泊施設が多数あり、この界隈に宿泊しているものは、

まずこの駐車場を利用するはずだ。

そう踏んだ中林は持ち前の勘でここに来たのだ。

駐車場内の空車スペースに車を止めてしばらく車両を観察してやることにした。

調べると何台か特徴に当てはまる車があったが、

その中でほとんど車内が確認できないスモークフィルムを張られた車両があった。

その車をしばらく“張る”ことにした。

何人か駐車場に出入りする人影があり車も何台か出入りがあったが、その車の持ち主らしき人物はいまだ現れない。

まあ、張り込みなんてものはじっくり構えていかないと意味がないからなあ、

などと自分を励ましながら、さめた缶コーヒーの残りをすすった。

座席を倒し背筋を伸ばしてストレッチを始めてみるが、

そのとき駐車場を取り囲む道路の向こう側から人影が急ぎ足でやってきた。

青い作業着の上下に長髪、そして同じ青いキャップ帽。

その表情は帽子で見えないが、かなり身体はがっしりしている。

中林は座席を元に戻しいつでも車を出せるように身構えると、その男は中林が目を付けた車に乗り込み、エンジンを掛けた。

「よし！待ってました」

中林はささやいた。

即座にグレーのセダンは走り出したので中林も付かず離れずその後を追った。

しばらく走ると、高層ビルの立ち並ぶ場所に着き、

そして路地を曲がるとビルの地下駐車場に入ってしまった。

中林はビルの駐車場入り口を確認すると自分は近くの民間駐車場に車を乗り入れ、

歩いて再度グレーのセダンの入った駐車場に戻ってきた。

しばらく様子を伺い中に入って見ると、

そこはビルの床面積いっぱいフロアが何層にもなっているかなり深い駐車場であった。

一階一階フロアを確認してグレーのセダンが止まっていなかったか確認して回るが、

目的の車は見当たらないし、結局そのまま最下階まで来てしまった。何かおかしい。

「車が消える訳がないだろう」

中林はつぶやいた。

今まで見たフロアではエレベーターと階段室への出入り口があるだけで、

車両が出入りできるのは入ってきた通路だけのはずだ。

しかも最下階は以上に狭く、車は一台も止まっていけない。

一番奥まで来て中林は床のタイヤの跡に気づいた。

頻繁に車の出入りした後がはつきり解るのだが、

タイヤ痕は行き止まりの壁に向かっていて前で止まった形跡もないし、



まるで壁に吸い込まれたように壁に当たって消えている。  
何度も壁を叩いてみたり、

継ぎ目がないか確認したがこの建物を覆っている壁と何ら変わりがない。

むしろほかの壁よりもしつかりしている感じで、  
しばらく壁を触りながら見落としがないかじっくり調べていると、  
かすかに振動を感じた。

その瞬間壁の向こうからエンジン音が近づいてきている。

「やばい！」

中林は、壁から離れると柱の影に身を潜めた。

その直後ヘッドライトが壁の中から現れた、  
というより車が飛び出してくる瞬間壁が消えたのだ。

車が一台通れる大きさに開き、

黒のセダンがすばやくフロアを通りぬけて出口に向かっていった。

振り向いて見るとその通路はまた壁に戻っていた。

いそいで壁に体当たりをしたが、むなしくはじき返された。

「あう、いつてえ、あちちち、くそ！」

痛む肩を押さえながら思わず叫んでいた。

何も考えずに壁に向って体当たりをするとは。

後から考えるとばかな事をしてるとつくづく自分が情けなくなった。

自分が理解できないことは根性で何とかなるんじゃないか、

などと学生の運動部気分がまだ抜けずにいることを含めて、

もう年なんだから考え直せ、と言い聞かせた。

これは理系の人間でないと理解できそうもない現象だな。

そうだ、あいつらならこの壁のことがわかるかも知れない。

中林は携帯を取り出した。しかし圏外だ。これじゃ仕方ない。

フロアを出口に向かい登り始めて、

やっと通話状態になったのはビルの外に出たときだった。

「やあ、おれだよ、中林だ。今いいかな」

「あ、先輩。いいですよ、ちょうど外回りから戻ったところです」

通話の相手は御手洗だ、相変わらず、中林に対して明るい態度だ。  
「わるいなあ、ちょっと調べてもらいたいことがあるんで、頼むよ」  
「はい、なにか？」

「確か、お前の同期に科学課に行った奴がいたな。あいつ今どうしてる？」

「俊、結城俊ゆづきとしですか。」

今は総合科学庁に移ってなにか研究していますよ。

たまに会って話を聞くのですが、俺にはちんぷんかんぷんで、まいつちやいますよ、でその俊がなにか役に立つんですか？」

「おお、そうそう、そういう奴がほしかったんだ。」

今まさに捜査の行き止まりでなあ、はははは、」

中林はあの壁と行き止まりを掛けた自分を思わず笑ってしまった。  
「なんすかそれって、先輩大丈夫ですか？」

「な、なに言つてやがる。これはマジ！マジなんだよ。」

「わ、解りましたよ。で、どこで打ち合わせします」

「そうだな、あの店知ってるか、ショッピングモールのセンター街の海洋って店」

「はい、大体解ります」

「で、そこに今夜でどうだい」

「了解です。俊はきっちり定時で上がれるいいご身分だから、大丈夫でしょう」

皮肉たつぷりに御手洗は言った。

「じゃ、宜しく」

よし、あとは若い奴らの知恵を借りて実行あるのみ、と中林は鼻息を荒くした。

そして携帯を背広の胸ポケットにしまうと自分の車のところまでもどり、

素早く運転席に乗り込むと、その店の方角に車を走らせた。



## 五部

### 6、稲津いなづ

学校の午前中の授業の終了を知らせるチャイムがなった。

「それでは、ここまで。今度の授業まで予習をしておくこと。解りましたか？」

その、最後の言葉を聞いてか聞かずか、生徒たちは席を立ち廊下に飛び出していった。

皆の目指すところは食堂だ。

いいメニユーは早い者勝ち、とにかく空腹を満たす為一目散である。そんな生徒たちを授業道具を片付けながら見ていた稲津いなづは、ため息をついていた。

教室には何人かの生徒が持参した弁当を広げそれぞれに食事をとっている。

ふと見ると歩大尉だけいつも用意している弁当も無く静かにしていた。

窓の外を眺め何か物思いにふけっている様にも見えた。

「弥呼みこくん、今日はどうしたの？お弁当も持って来ていない様だし、それに元気なさそうだけど」

歩大尉ほおいの苗字だ。葉瑠音はるねの苗字でもある。呼ばれて稲津いなづのほうを見た。

「ああ、別にたいした事じゃないんですが、今日は都合が悪くて弁当は作れなかったんです」

歩大尉は席を立って、稲津のほうに歩いてゆく。

「何か心配事があるようですね。私も貴方達の頃は毎日悩んでいました。そんなときは誰かに話せばいくらか楽になりますよ」

優しい言葉に歩大尉は、以外な感じを受けた。

授業中のあの騒がしさとは打って変わった態度だ。

「ええ、そうですね」

歩大尉はうなずいた。

「そういえば、いつものあの子、確か明日尾さん？隣のクラスの。今日は見かけないようだけど」

「あ、実<sup>み</sup>芦<sup>ろ</sup>ですね。うーん、ちょっと具合が悪いようで、二、三日休むそうです」

とつさに言葉がでたが、実際のところ稲津に言われたことが一番の悩みとは言い出せなかった。

「そうですね。いつもの友人がいないのは一番寂しいですね。相談することも出来ないのでしょうか」

ますます、心の中を見透かされているようで、この場から早く居なくなりたかった。

「じゃあ、先生、今日は食堂にいくので」

「はい。午後からまた宜しくね」

歩大尉はため息をついた。

それにしても実芦は何処に行ってしまったのか。

とにかく心配だ。中林さんと一緒に探すべきなのではないだろうか。そんな思いに振り回される。

何をしていてもその事が気になって、落ち着いていられない。

自分は何が出来るのか、何をすべきなのか。

苛立ちと焦りばかりが渦を巻いたように繰り返される。

なにか理由をつけて捜査に協力したい。歩大尉は思っていた。

授業が終わったら御手洗さんの所へ行ってみよう。理由はある。

あのサングラスの男が持っていた封筒を渡しに来たと言うのはどうだろう。

すぐに渡せなかった言い訳はなんでもいい。

今、あの封筒は持っている。自宅から出てくるときに持ち出して来た。

歩大尉の気持ちは決まった。

必ず警察に行つてこのことを理由に実芦の搜索に少しでも協力するのだと。

やがて食堂に着くと生徒たちの活気に、自分も空腹であつたことに気がついた。

すべては何かを食べてからだと思ひ、食堂のカウンターにいつて注文をした歩大尉であつた。

放課後、学校から警察署に向かう商店街を歩く歩大尉がいた。

一途に実芦が無事でいることを思ひ、きつといい結果がまつていると自分を励ましながらか歩いていて。 そうしないとくじけてしまひそうだったから。

少しうつむき加減に考え事をしながら歩いていく歩大尉にゆっくりと近づく車があつた。

黒いセダン、そしてその中には二人連れの男が乗っていた。

じつと獲物を吟味しているハンターのように見つめている。

しばらく徐行をしながら歩大尉の後を付けて行くと、

商店街の外れ辺りの比較的交通量の少ない道路に出た。

車は路肩に寄ると停車しエンジンを止めた。

路上から車の流れが途絶え、行き交う人々が居なくなると黒いセダンのドアが開いた。

中から降りて来たのは大柄な筋肉質で体格のいい無限と中肉中背の平田の二人だ。

彼らは車が停車中にだいぶ離れていつてしまった歩大尉を、

ドアを閉めると同時に駆け足で追いつこうとした。

商店街を抜けて警察署を目指している歩大尉は、

なにやら後ろから間隔の短い足音がすばやく近づいてくるのを感じた。

後ろを振り返ろうと身をそらせたとき黒い袋を頭にかぶせられた。

無限がささやき声で歩大尉の耳元に話す。

「いいか、声を出すんじゃないぞ。黙つていてくれれば危害は加え

ない。解ったか」

歩大尉が頷くと、そのまま両腕と身体を押さえ込まれもう一人が両足を持ち、

歩大尉を横にし運び始めた。

自由がまったく利かない。

なにかに縛られている訳でもないのにまったく抵抗が出来ないのだ。無限と平田はこのような手順には慣れていた。

セダンのトランクを開けると、実芦を連れ去るときに使用していた車と同じように、

大人一人がすっぽりと納まるような構造になっていた。

その中に歩大尉を寝かせると身体を確認して、持ち物を調べた。

財布、キーホルダー、封筒、レシート等。

それらを無限は自分の上着の中から取り出した収納ビニールに入れると、

歩大尉が持っていた鞆と共に後部座席に置いた。

歩大尉を拘束具で手足を固定すると、トランクをしめて無限は平田に声をかけて車に乗り込んだ。

「よし、そのまま戻るぞ」

周りに目撃者らしき人物がいないことを確認しながらエンジンをかけ車を走らせる。

しばらくすると、平田が口を開いた。

「今回は速いペースで二人もさらって大丈夫ですかね」

「リーダーのことだ、訳があるのだろう。この二人がああブルー作業員どもの一人の死に関係していることも解っていることだし」

平田は納得出来ないようだが、これ以上聞かないほうがいいと、無限の横顔をみて感じた。

「こんな仕事、いつまでやるのかね」

平田が前を見ながら独り言のようにつぶやいた。

「まったくだ」

無限はその独り言に答えた訳でもなかったが、相槌のように呟いて

いた。

平田は金さえ貰えればこの仕事をいつまでもやっていけるだろう。しかし、自分はもうこのような状況にはそろそろ見切りをつけたいと思っていた。

この裏家業をやり始めたときは何も考えずにただ命令に従ってこなしてきたが、

最近は何も得るものは金だけでなにも残らず、むしろ失っていくものが多いように感じている。

自分の残りの人生の時間をただ無駄に過ごしているような、

そして何かはつきりは言えないが、ここにおいても自分の胸の中にある隙間は広がって行くだけで、

今にすべて取り返しが付かなくなり己を見失うのではないだろうか。無限はそんな考えに入り込んでしまった。

車に乗りグループのフロアに戻る途中にも、歩道に集う人々が次々と行き交っていく。

その中には小さな子供をつれて忙しそうに歩く母親と思われる親子連れ。

嬉しそうに少年を見上げる少女とのカップル。

ゆつくりと路肩の植物や花々を散策しながら歩く老夫婦。

そんな人々の中に自分の姿はなく仲間にもなれないでいるこの思い。すべてが無限には遠い過去に失ってしまったように感じ、

それを取り戻したいと苦しみもがく心が迷いはじめている。

今さらどうにもならないと自分を納得させてその思いを断ち切る。

その繰り返しにいつまで耐えられるのか。無限は自分の居場所を失い始めていた。

やがて黒いセダンはビル街に入り、グループのフロアのある地下駐車場に入っていた。

ショッピングモールの中央に位置している飲食店“海洋”にスー



ツ姿の二人連れが入ってきた。

御手洗みたらいとその同期の結城であった。

店の中を見渡すと一番奥から二番目あたりのテーブルに体格のいい同じスーツでもラフな着こなしの男がメニューを見ながら座っていた。中林だ。

「よお、健治！ここだ」

店に入ってきた二人の気配を感じ、御手洗とその連れだと確認して声をかける。

二人は席のほうに歩きながら周りを見渡した。

店は海鮮料理から和洋折衷まで幅広い料理を出しているようで、店の客も比較的広いフロアにもかかわらず8割は埋まっている。

男女半々といった客達である。

「どうも、先輩、これが結城俊です。トシと呼んでやってください」  
「はじめまして、結城です」

二人は一通り自己紹介をした。

御手洗はいつもの明るさで気さくな感じだが、

結城は研究者タイプなのか素直に感情を表には出しにくいようだ。物腰もしずかな感じで席に着いた。

「さあ、今日は俺のおごりだから好きなものを遠慮なく頼んでくれ。その代わり俺の相談に乗ってくれよな」

メニューを二人に見せた中林は手をあげて店員を呼んだ。

オーダーをしながら御手洗が話す。

「先輩、あの少年たちの家に入り込んだ奴の身元を洗っているのですが、

なかなか興味深いことが解ってきました」

「そうだった。その話が先だな。で、どんな奴だったんだ」

注文を終えた中林が御手洗のほうに向き直り話を聞きだした。

「奴は水木恒みなぎ ひさしといって、数年前に窃盗で逮捕歴がありました。

二年程度で出所してその後の足取りは消えていましたが、

最近、その水木がいろいろと調べていたようです。

15年ほど前にこのショッピングモールが出来る以前、

ここにあった宗教団体の事を元信者や幹部たちと接触して聞きまわっていたようです」

「その団体なら知ってる。

設立当時は宗教団体ではなく精神的に疲れた人々を治療目的とする癒しの家といったものだったのが、

その中心人物に治療された人々の間では疲労した心がとても楽になり、

しかも幸福感すら与えられるとのことで、やがて中に狂信的な者達が出てきて、

お布施や寄進が日に日に多くなっていった。

それを一部の宗教行事にくわしい連中が加わり経済的に楽な宗教法人申請をして、

団体の資金運営および蓄財などを始めた」

「先輩、やけに詳しいですね」

中林は手元にあった水を軽く飲むと話を続けた。

「そうなんだ。実はあの団体で事件があつてそれを担当したのが俺って訳さ。

で、その団体も最初はうまく行っていたようだが、会員も増えてくると当然、

動く金も多くなり経営のみを管理している連中で利益をめぐり内部での不正が発覚したんだ。

経理の中心人物が団体の金を大量に着服して行方不明になるといった事件で、

当初は単独犯行と思われたが、真実は彼を利用したほかのメンバーの誘拐事件だった。

その事件を調べるなかで、当然団体の中心人物に事情聴取することがあり、

教祖と呼ばれている人物に会い話を聞いたが、

この人物は女性でじつに不思議な感覚を俺に与えてくれた。

実際は手を触れて見つめていただけたが」

「なんか、色っぽい話になりそうですね。先輩」

にやけながら御手洗が中林を見た。

「そうか？だがな、その中心人物は70前後のおばあさんなんだよな、残念でした」

「あ、やつぱり。世の中そんなにうまくはいきませんねえ」

二人はそうだよなあ、などと笑っていた。

それを見ていた結城もつられて小さく笑顔を見せていた。

そこに、注文の品々がテーブルに並び始め、飲み物がそろ々と中林の合図で一同は乾杯した。

「それじゃ、お疲れ、さあ食べてくれ遠慮しないでいいからな。」

そして俺の話の続きはこうだ。

そのばあさんに触れていると身体が暖かく感じすーっと疲れが取れるんだ。

これは凄かった。

よくそんな癒しをうたい文句にする金目当ての偽者はたくさんあるが、これは本物だと思ったよ。

実際へたなマッサージや鍼灸などよりよっぽど楽になるし癒される」

二人は、小皿にテーブルの品々を取り分けてそれぞれに食事をしながら中林の話を聞いている。

「それと、そのばあさんの本当の力というかもっとも強力なのが、特定の人物の居場所が解る様なんだ。しかもその人物の生死をも感じ取れるとので、

その誘拐された人物を探し出して見せるから何とか穏便に事件を解決してほしいと言われた。

先の癒し能力もあつたので俺は出来るなら是非頼むといって、そのばあさんにはこれで事件が解決したら悪いようにはしないと約束した」

「でも、その事件がきっかけで団体は2年近くで解散してしまった訳ですよ」

御手洗が中林に飲み物を注ぎながら話した。

「結果的にな。事件そのものは教祖のばあさんのおかげで、行方不明の人物の監禁場所も解りその建物の所有者が黒幕でその部下達の中に団体の経理メンバーもいて、すべて逮捕され解決はしたしかしそのばあさんがその後、行方をくらましてしまい後に残った団体は内部の内輪もめの結果、

建物が放火と見られる火災によって消失してしまって、そのまま解散という訳だ」

「その団体を調べるうちに水木はこのショッピングモールにあるコーヒー店に来ていた、という訳でしょうか」

御手洗が中林に同意を求めるように話す。

「それは解らないが、その宗教団体のメンバー、いや当時の教祖に会うためにその手がかりを探しに来たのではないだろうか」

「それが、あの少年達の家に行ったことに結びついている訳でしょうか」

「どうだろう。そのことは健治のほうで把握しているのではないのか？」

中林は少しはぐらかすように御手洗に聞き返した。

「いや、本当の事を言うつと先輩の情報を欲しいくらいで、あと少しという所で水木の事は調べ切れていないし、

その教祖の老婆のこともまったく把握できていない状態なんです」

飲み物を口にしながら、行き詰っているという渋い顔をした御手洗であった。

「悪いなあ、そこから先は俺も現場から離れてしまっているので、健治ほど情報は無い」

やはり、といった表情で御手洗は諦めた様子だった。

中林はこのままでいい、そう思っていた。

教祖は葉瑠音のことだ。

ただ御手洗も葉瑠音をあの家で見かけはしていたが、当時70歳であれば今はもう90歳近い。

葉瑠音の現在の見かけは50歳前後ではないだろうか。

容姿だけでは本人とは見分けられないであろう。

これは、中林も感心するのだが、知り合った当時よりむしろ若返っているようで実に不思議だ。

いま、御手洗や警察に葉瑠音の正体を知られても厄介だ。

自分は葉瑠音と協力して不明者捜査に貢献しているのだから。

それは今の中林には生きがいでもある。

だからこのことは自分、

いや自分がこの家業を続けられなくなるまでこのままにしておこう  
と思っている。

水木恒。

奴が葉瑠音の家で騒動を起こし、警察が現場検証をしている時に中林は直接、

葉瑠音から奴のことは聞いた。水木に葉瑠音がふれて奴の過去が見えたそうだ。

14年前彼ら一家は団体の狂信的な信者だった。

家や彼らの財産すべてを団体につき込んで当時の建物に住み込みで働いていた。

しかし団体の建物が燃え落ちたときに水木一人を残し、

両親は建物と一緒に焼け死んだらしい。

水木もかなりの重症で入院したが、そのときのショックで記憶喪失にもなり施設を転々として、

ある日施設を抜け出しそのまま犯罪の中に身を浸す生活になったのも、

両親がいなかったという飢餓感が彼を追い詰めた結果でそのことは納得できる。

そして犯罪仲間の中に団体に所属していた者がいて、

その人物との接触が水木の過去の記憶を呼び覚まし、  
覚醒した水木は自らの人生を取り戻すかのように団体と教祖を探し  
始めた。

団体そのものは解散してしまったことにショックを受けたが、  
どうしても教祖に会いたく行方を捜していた。

それは当時少年だった水木にしてみれば、  
実の母親以上に優しく暖かい思い出が鮮明によみがえったからであ  
ろう。

そして歩大尉たちを追っているうちに偶然に葉瑠音と再会できた  
という訳だった。

「それじゃ、俺の話も聞いてもらおうか。そうしないと結城、いや  
俊の出番がなくなるからな」

御手洗は食事をしながらどうぞと手をだし、  
結城はやつと本題かと緊張し飲み物を飲んだ。

中林は二人に地下駐車場での消える壁のことを話すと、結城の目が  
輝いた。

「それは、興味深いですね」

「おお、そうこなくっちゃ。でどうなんだねその消える壁の仕組み  
は」

息つく間もなくせかされて、結城がしゃべりだした。

「まず、ここで聞いた事は部外には話さないとお願いできますか？  
それが条件でなら」

「いわゆる守秘義務って奴だな。大丈夫だよ俺たち警察と元警察だ  
から。な、健治」

当然というしぐさで、御手洗の肩を叩いて、中林は頷いた。

御手洗は突然叩かれたので喉を詰まらせむせた。

「ちよつと、先輩。ごほ、ごほ」

「はは、すまん」

中林は笑っていた。

御手洗も勘弁してくださいと言うものの、うれしそうであった。そんな二人のやり取りにすっかり打ち解けたように、

結城は微笑むと少し間を置いて喋りだした。

「消える壁というのは、多分もともとあつた空間に、ほかのところから壁になる材料をそこに出現させたり元に戻したりといったことだと思います。」

中林さんが調べたものはちゃんとそこに存在していたとの事です、で、間違いはないと思います」

結城はゆつくりと話し始めた。中林と御手洗は興味深深といった面持ちで聞いていた。

「物質転送という言葉聞いたことがあります。」

その仕様はいろいろありますが、一番わかりやすいのは、テレビや映画で有名な“スタートレック”で描かれた“転送”というものです」

「知っているぞ、あれはおもしろかったな。カーク艦長が危機一髪となったときに身体が消えて無事脱出成功というシーンだな」

中林が嬉しそうに言う。

そのあとに結城は付け足すように話続ける。

「そうです。しかし現実には人間などの生物は転送不可能です。」

その理由として生命体は複雑な組み合わせのDNAや、

その中に無数の物質やさらに小さな生命体と共存状態にいるために、転送に必要な情報を瞬時に網羅できないのです。

ですが単純構造である静物や素材関係であれば、比較的簡単に転送することは可能です。

ただし、今のところ理論だけは確立されたのですが、

どのように現実化するのか具体的な構造等が研究段階のままです」

「そうなる、あの消える壁は転送ではないとなるが、どういこうとだろう。」

もっと違う仕組みなのか」

中林はテーブルのつまみを口に運びながら問いかけた。

「いえ、これからが本題なので、じっくり聞いてください。

私が総合科学庁に配属された直後内部資料、

といってもこれは現在は開示されていますので、問題はないでしょう。

内部資料に総合科学庁の前身の施設の項目があり、

その場所でかなりの科学技術を研究していたようです。

中には物質転送の項目もありました。

ほかに生命維持、対病原、念動力、思念解析、等々、

現代科学でも解明できていないものが多数ありました。

そして一部には量産化可能な状態にまでに完成されていたものがあったようです」

結城が一息いれて、飲み物を飲んだ。

「それが、今回俺が見たものではないかというのか」

中林がやつと解ってきたぞと身を乗り出してきた。

「それが残っていればの話なのですけれど」

「え、それじゃお宅の総合科学庁にはないのか？」

「残念ながら、いまだ完成と呼べるものではありません。

ただ、鉄の塊ぐらいは転送させられるのですが、

少し複雑な形になるとまったく見られたものではないです。

たとえば転送した先で元の形の表裏が逆になったり、

もともとパチンコ玉の大きさの塊が転送したとたん、

巨大なバルーンぐらいになって中がスス力だったりとかですね」

結城は両手を軽くあげて、お手上げといった表現を言った。

「そいつは残念だなあ、ここでお手上げも悔しいぞ」

中林は机をガラスの底で軽く叩いた。

「その施設があればだいぶ違うのですが、施設自身は15年前に爆発事故を起こしているのです。

そこで完成されていた記録、設備、人材も失われてしまった。

そのためすべての研究結果はそれ自身を研究していたといった記録



のみで残っているだけです。

ただし、ここからは記録にはないのですが、爆発事故を免れた人間と設備があったという話です」

中林が話しに割って入ってきた

「今回の消える壁は、その爆発を免れた機械の仕業による、可能性があるかもしれないというのであるう」

結城は頷き、その言葉の跡を継いだ。

「その通りです。それと研究施設の人間が生き残っているとしたら、その研究技術だけで相当の財産を生むでしょう。

何しろ部外には一切その記録がないわけですから、

ほぼ独占状態で、特許権を持っているようなものです」

「その事に関してはもつと調べる必要がありますうだな。

きつとこの消える壁を調べればそこに繋がるような気がする。

結城、理論が解っていて、できそこないでも、

ある程度の設備が完成しているのだから、それを調べて破壊できるよな」

「先輩、それは強引ですよ」

中林の話を完全に否定するように御手洗が割り込んだ。

「いや、健治。中林さんの言っていることは不可能ではない。

完成形が出来ていないだけで、仮定は間違っていないのだから後は設備の構成だけだ。

今回はいい機会です。

ぜひ現場を見せてください。その消える壁を暴いて見せますよ」

御手洗があつけに採られているのを、

気にせずに結城は中林の手をとり完全協力体制に入ったかのように見詰め合っていた。

「おお、気持ち悪い」

御手洗はふざけて寒がつて見せた。

「健治、これが男の友情の始まりと言ってほしいね。な、俊ちゃん」  
「ますます寒いです、先輩！」

御手洗が両手で自らの肩を抱くように席でのけぞっていた。

結城は笑い出した。中林も笑いながら

「なんだと。こんな阿呆はほっておいて、早速お願いしたのだからいいかな」

「はい、いつでも良いです。出来れば早々をお願いします」

中林はよし！と頷くと御手洗に話した。

「その建物の、検査許可をとれるか？多分地下駐車場の容積を偽っているはずだ。

建築局からの査察許可を明日取ってくれ」

「はい、解りました。そんなことならすぐ取れます。任せてください」

「頼む。で、俊は調査用の装置一式準備していてくれ。明日その許可が取れ次第現場に踏み込みたい」

御手洗と結城はわかったという態度で早々に明日の準備をする為に立ち上がり、

出かける準備を始めた。

「なんだか、せっかく楽しませようとしたのに、逆にせかせちまっで悪かったな。

大事な者の安否がかかっているので申し訳ない」

深々と中林は頭を下げた。

「やめてくださいよ、先輩。そんなことはお互い様じゃないですか。気にしないでください。

それじゃ、俺は捜査部で事情を話し表向きは建築物査察として、メンバーを集めて出勤態勢をしておきます。

先輩の指揮で俊の科学班と合流して現地に向かうようにします」

「頼む、じゃあ許可が下りたら現場で待ってるからな」

三人はうなずくとそれぞれの職場に帰っていった。

## 六部

### 7、無限 むげん

研究室からフロアに急いで出てきた、雨豆裸うずうと実芦みろだった。  
グループGのフロアである。

赤い台にふたりで並んで座ると雨豆裸が実芦に話しかけてきた。

「いったいどうしてしまったんだ、徒具呂とぐろは。」

実芦、なにかしたのかい」

どうにも解らないといった表情に戸惑いながら実芦が答える。

「私もよくは解らないけど、手を触れられたとき、なにか自分と違う力みたいなものが、

彼に入って行ったような気がしたの。

そうしたら彼がしゃがみ込んでしまって」

雨豆裸はいまだ納得できずにいた。

あんな徒具呂を見たのは初めてだからだ。

やはり実芦の身体によって徒具呂が異常をきたしたに違いない。

雨豆裸はおもむろに実芦の手を握った。

「何、どうしたの」

実芦は突然の仕草に尋ねた。

雨豆裸は黙ったままその手を見つめ自分に変化がないかじつとしている。

しかし何もおきない。

でもその手は柔らかくとても暖かい。

そしてはつきりと理解できた。

自分は実芦を好きになっている。雨豆裸の中にはじめての友情が芽生えたのだ。

胸がときどきしている。このことは素直に受け止めていいのだろう

か。

雨豆裸の心は揺れていた。

「ね、雨豆裸ちゃん。このままこうしていてもいいよ。雨豆裸ちゃんが飽きるまで構わないから」

素直に雨豆裸は頷いた。そつと実芦を抱き寄り添ってみる。良い匂いがしている。

懐かしい思い出に浸っているような、

あまいそしてゆっくりと心の平穏が訪れてくる。

雨豆裸はやがて眠っていた。

実芦はやさしく頭をなでていた。

この子はどうしてここにいるのだろう。

自分と同じ様に普通に暮らせるようになればいいのに、友達だったらもつといいのに、と実芦は思っていた。

寄り添った二人の時は優しく静かに流れていた。

フロアの入り口に黒いセダンが入ってきた。

あわただしくドアが開き、二人の男はトランクから歩大尉を連れ出すと、

頭に布を被せたまま立ち上がらせ、手足の拘束具をはずした。

車の中から歩大尉の持ち物と鞆を床に置き、その近くに椅子を置くと少年を座らせた。

「これから頭の布を外すが、おかしい真似だけはするなよ、解ったか」

歩大尉はうなずいた。

その態度を確認すると無限は布を歩大尉の頭からそつとはずした。一瞬、眩しそうにしていたが、すぐに明るさに慣れて周りを見渡している。

フロアは広く黒のセダンとグレーのワンボックスカーが止まっている。

グレーの車はコーヒー店で見かけた車に似ている。

フロアの反対側は同じ幅で奥に続いているようだが、少し壁がくねっていてどのくらいの距離があるかは解らなかった。もう一度車の方を見てみたが、車が入ってきた入り口らしきものが見当たらない。

ここまではどうやってきたのだろうか。

不思議に思った。

無限と平田は歩大尉から目を離すことなく休んでいる。

少しすると無限が近くのダンボールの中から、自分達の飲み物と軽食を取り出し持ってきた。

「お前も腹がすいたろう、ほら好きなものを食べ。そのうちリーダーが来るだろうから」

歩大尉は渡された物を手にした。

この様子では危害を加えられないと解ると急に腹が空いてきた。とりあえず飲み物と軽食を口にして、しばらくこのままにしていようと思った。

車の中では自分はどうなるのか必死に考えた。

どこへ向かっているのか。

このまま帰れなくなるのか。

そう思う中で、もしかしたら実芦をさらった仲間だとしたら、この行く先には今自分が一番会いたい実芦がいるかもしれない、と不安の中であっても、そうであってほしいと願っていた。

歩大尉は自分の身が危ないのに妙に落ち着いていた。

入り口の物音で、雨豆裸がそつと起き上がった。

「実芦、入り口を見てくるよ」

「わかったわ、私はこのままここに居るから安心して」

「解ってるよ」

軽くうなずくと雨豆裸はいつもの気位の高い少女に戻っていた。無限と平田がいる場所まで歩きだし、長いフロアの入り口近くまで

来ると、

彼らが静かに軽食を食べながらそれぞれの場所で休んでいた。

「例の少年を連れてきました」

平田が顔を上げて雨豆裸に視線を向けながら行った。

「こいつが水木<sup>みなぎ</sup>がやられた家の者だね」

無限に目をやり確認の合図を送り、歩大尉に近づいてきた。

そしてその目をみて飲み物を持っていない手をゆっくりと握った。

歩大尉はじつと雨豆裸を見ていた。この子がリーダーなのか。

化粧をしてはいるけど自分と同じ16歳ぐらいではないのだろうか。そしてあの二人を命令しているところを見ると少し不安な気持ちが高まった。

「ふん、何にもなさそうだ。あんた実芦に会いたいかい？」

突然の問いかけに一瞬とまどった歩大尉だが、雨豆裸の握った手はとても優しくかった。

そのまま実芦のところまで連れて行ってくれるような気がした。

「会いたいです」

「わかった。私に付いてきて」

ふりむき、奥に向かう後姿に歩大尉は立ち上がって付いて行こうとしたが、

無限と平田をみて躊躇していると、無限が顎でいいから行けよといった態度をとった。

歩大尉は軽くうなずいて足元にあった靴を履き、

自分の鞆と荷物をもって雨豆裸の後を付いて行った。

フロアの奥に向かうと一人の少女が、真っ赤な台の上に座っていた。

先頭の雨豆裸がその少女に合図をするとそつと微笑み、

やがて後ろから歩大尉が歩いてくるのに気が付くと、

驚きながらすぐに歩大尉に駆け寄ってきた。

「ボウイ、よかった。でもどうしてここにいるの」

「実芦と同じようにうちの連中が連れてきたんだ」

実芦が歩大尉の腕にそつと近づくと、雨豆裸が説明をした。

「だけど、何もしていないから安心しな」

歩大尉は実芦を見ていた。

会えなかったのは、ほんの1日だけだったがとても懐かしい気がした。

「よかった、無事なんだね。心配したよ」

実芦の手をとり素直に喜んでいた。

実芦もうなずきながら無事を伝えていた。

そんな二人のやり取りを雨豆裸は無言のまま見つめていた。

実芦のうれしそうな気持ちが自分にも伝わるような気がして、なんとも奇妙な感覚にとらわれていた。

今までは自分のことばかりで、他人のことなど気にもかけた事などないはずなのに、

実芦の一つ一つのしぐさや表情に自分の感情が移っていく。

いまでも安心して実芦を感じている。

人と通じ合うことがこんなにもいいことなのかと。

そのとき奥の壁から、サングラスの男が静かに歩いてきた。  
徒具呂だ。

「雨豆裸、その二人はこのまましばらく居てもらおう。

例の機械は使わないことにした。

でもこここの事を知られた訳だから、当分は帰れないぞ。いいか」

突然現れた男を歩大尉はじつと見つめていた。

雨豆裸と実芦は徒具呂の行った意味を理解し、頷いていた。

徒具呂はすっかり平静を取り戻しいつもの態度でいた。

「よし、後もう一人必要だ。無限と平田はどこに居る？」

「入り口にいるはず。呼ぼうか？」

徒具呂の普段のままの態度に安心したのか、

いつものように雨豆裸が入り口方向に行こうとすると、

それを手で制して解ったと言う態度で徒具呂は自ら歩いていった。

「今のは、リーダーの徒具呂。そんな訳でしばらくいてもらうよ、  
実芦と、えーっとボウイ？」

雨豆裸は実芦に目配せをして、大丈夫だよと言う表情を見せた後、歩大尉に近寄り問いかけた。

「あ、歩大尉です」

そのままの姿勢で雨豆裸に答える。

さっきの男がリーダーでこの子は違っていたのか。と考えを巡らす歩大尉であった。

「こんな場所に連れてきてすまない。でも悪いようには絶対させないから」

雨豆裸は両手を差し出し二人の手を握った。

実芦はそつと微笑み、平気だと言うように頷いた。

それを見て歩大尉も静かに微笑み三人は無言で挨拶を交わした。まるで懐かしい友達同士が出会ったかのように。

徒具呂の指示で再び黒いセダンで、外に向かっていく無限と平田がいた。

駐車場を出ると今度は住宅街を目指していた。

「まだ、足りないんですね。一日に二人もさらって、きつと今度はやばいかもしれません。いやな予感がある」

平田が助手席から無限に話しかけた。

「確かに、だが仕方が無い。」

たまにはやばいと解っていても従わなければならないのがこの手の仕事だ。

それは平田、お前も解っているはずだろう」

「そうですが、いままで慎重に行動してきたのが、今回は違うような気がするだけです。」

なんか行き当たりばったりで、すごく心配ですよ」

平田の言うとおりだった。無限の思いも同じだ。

無事に行くかどうかは解らないが、

今回の件が片付いたらそれなりの結論を自分なりに出さなければな



らないだろう。

もう潮時と感じていた。

目的地まで行く間、無限は何度もそのことを考えていた。

こんなに迷うのも初めてだった。

この仕事を辞めたとしても後は何がある。

今まで全てを捨てて来た自分に。

いや捨てさせられたのかも知れない。

遠い昔の記憶がよみがえる。

あの時のあの場所。

何が自分に起こっていたのかはつきりとは思いつけないが、

物事に迷うとき無限の心はいつもその場所に行こうとするのだった。

車は静かな住宅街の坂に差し掛かり、そのまま上ってゆく。

静まり返った中心部の道路に車をとめて、無限は車を降りた。

「今回は俺だけで連れてくる。お前は車の中で見張っていてくれ。

何か変化があつたら携帯で。もし間に合いそうも無ければ車ですぐに立ち去れ。

それから携帯で連絡しろ」

「解りました。とにかく早く片付けてしましましょう」

平田の返事に無限は解つていると言い目的の家に近づいていった。

玄関の扉の前に立つと無限は鋭くとがった金属を鍵穴に差し込んだ。ほんの数回手首を動かすと鍵が外れる音がした。

外から見ている者がいるとしたら、

その無限の行動はさも扉の鍵を持っていて自然に開けた様にしか見えなかった。

中に入ると電気は消されている。薄暗いが部屋の中の物の位置は見えていた。

人の気配はなかったが、

この仕事のおかげで家の中を一見したただけでどこに人がいるのか、即座に感じられるようになっていた。

無限は迷うことなく奥の扉を目指した。

とその時、扉のノブが動き、静かに開いた。

無限はとっさに物陰に身をひいて、出てくる人物を見極めようとした。

薄暗くてはつきり見えなかったが、

その容姿は女性であることに間違いはなかった。

物陰に身をひいて相手の出方を伺っている無限に向かって、

その女性らしき人物は語りかけた。

「そんな所に隠れていないで出てきなさい。私は何も抵抗はしないから。」

お前が来るのは解かっていたのだから」

小さいがはつきりと聞こえるその声を聞いた無限は、

一瞬にして押さえ込まれるような重圧を受けた。

だが次の瞬間、

包み込むような暖かさが伝わってきて無限は無意識にその女性に近づいていく。

薄暗い中で見えてきたその表情は穏やかで、やさしさに満ちていた。歩大尉の祖母、葉瑠音であった。

「ここに来なさい。そして手をだして」

無限は言われるままに、両手を差し出していた。

「今からお前の中で起こることは現実です。素直に受け入れるのです」

無限はこの女性の言うことの意味が解らなかったが、その両手に触れた途端、無限の心は遠い過去に飛んだ。

ランドセルを背負って、全速力で家路を急ぐ少年がいた。  
木崎丈小学校4年生。

彼は遠い過去の無限であった。路地を曲がると家だ。

その玄関に近づきかけたとき、いつもは閉まっている引き戸が開け放たれている。

正面の道路には荷物を半分ほど積んだトラックが止まっている。何も解らずそつと玄関をのぞくと、

土間に片足を掛けて中で作業をしている者たちを指示している男がいた。

始めて見る顔だ。

玄関に来た丈に気が付くと男は振り向きながら話した。

「なんだ、おまえは。」

「ーん、この家のガキだな。残念だったな、

この家の住人はさつき出て行ったばかりだ。

もう二度とここには戻ってこないだろうよ。

お前は捨てられたんだよ」

丈は訳が解らなかった。家の中の荷物が次々運び出されてゆく。

テーブル、筆筒、食器棚、母親が使っていた化粧台、そして丈の机も。

「やめろ、これは俺のだ、もっていくな！」

作業員を押しつけ机を取り返そうとした丈だったが、

玄関口の男に襟を後ろからつかまれ外に引きずり出された。

「じゃますんじゃねえ、くそがき！これでもくらえ」

男のこぶしで顔を殴られ、その場に叩きつけられた。

丈は激しい痛みで声もでなかった。

「今度邪魔したらこれじゃすまねえからな」

男はつばを吐きかけ、再び荷物の運び出しにもどった。

そこへ騒動を聞きつけて駆けつけた近所のおばさんが、

丈を抱き起こして身体に付いた砂を掃ってくれた。

「ちよつと、あんたらひどいんじゃないの、まだ子供じゃないの」

「ちつ、うるせえなあ。文句があるならこいつの親に言ってほしいね。」

こつちとら借金踏み倒されて困ってんだからよ」

作業を続けながら男は言った。

しばらくその光景を丈は見ていた。

やがて何もかも運び出された部屋には何も残っていないかった。外に自分のランドセルが横になって玄關脇に置いてあるだけだった。「いったいどこに行っただんだろうね。木崎さん達。丈君は知らないよね」

おばさんが問いかけても、丈はなにも答えられなかった。

本当に自分は捨てられてしまった。

そう思うともうここにいられない。

なにも考えられないまま、丈はその場を走り去ってしまった。

「ちよっと、丈くんまって」

おばさんの声もいまの丈には聞こえなかった。

どこをどう走ったか覚えていない。

繁華街に迷い込み、やがて空腹に耐えられずスーパーで食料品を盗み、

そこを警官に補導されてしまった。

その後、身寄りのない丈は同じ境遇の子供たちのいる施設に、しばらく預けられたが、

まったく馴染めず、施設を抜け出すが連れ戻されることを何度か繰り返した。

抜け出すと決まって夜の繁華街で接触してくる、

町の不良グループの仲間となりやがて、16を過ぎた頃、

町の住人とのトラブルで逮捕されてしまう。

その後少年院から更生施設を経て仕事には就いたが、

気が短くすぐに同僚と喧嘩をして会社を退社。

さらに街中で度重なるトラブルを起こし、何度も警察に世話になる。

あまりの素行のひどさを見かねた指導員に、

体格もよく喧嘩も強いとの事で、格闘技のチームに紹介された。

チーム内は同じ境遇の者達の集まりであつたが、

似たような運命を背負った仲間の結びつきは今までの殺伐とした生活を一変させた。

以外にも同じ目的を持つことで皆が一丸となり大きな連帯感も生ま

れ、

毎日が充実していた。

やがて丈は人並み外れた体力と持ち前の勝負勘で、頭角を現しやがてチームの人気、実力ともナンバーワンになるまでになった。

しかしそれを素直に喜べない連中もいた。対立するチームの一部のメンバーだ。

彼らは反則を得意とし時には、丈のチームメイトを出場不能にする時も多々あった。

試合後の合同慰安会で丈はその反則メンバーをみんなの前で諫めた事がきっかけで、

彼らの反感をさらに買ってしまった。

ある日いつものように巡業先の試合が終わり宿泊施設に帰ろうと、最寄の駅で電車を待つ為にホームにいたところを、不審者に突き落とされた。

酔っていたためとっさにかわしきれず、線路上に落下。その直後電車が通過。

丈はホームから付き落とされた所までは記憶にあったが、

その後はベッドで目覚めるまで記憶がない。

そして目覚めたときの自分の状況に丈はもう二度とリングには上がれないと観念した。

身体はぼろぼろだった。

生きていたのが奇跡で、両足切断、右手と左肩は複雑骨折、

頭部も一部損傷していたが、顔面、脳は無事だった。

しかしそれは気休めでしかなかった。

そして何よりも丈を打ちのめしたのは、二度と自分の足で立てなくなることだ。

すぐにでも死にたかった。

多くのファンや仕事関係の人間が見舞いに来てくれたが、誰もがこの身体を見るなり、哀れみとあきらめの視線を投げかけて

くる。

誰一人丈の気持ちを理解できる人間などいなかった。

ベッドで何ヶ月も横になつているときに浮かんだのは、

子供の頃のあのやさしかった母親の姿だった。

あの日いつたい何があつたのか。どうして自分だけ取り残されたのか。

豊かではなかったが、毎日学校から帰つてくると、

玄関の近くで内職をしている母の後姿があり、

お帰りを言つてくれていつも丈の大好きな手作りのお菓子で迎えてくれた。

心は満たされていた。

少なくともあの日までは。

だが、あの日は誰も何も無くなつていた。

しかも知らない奴に殴られもした。

あの痛さは今でも忘れない。

痛みと共に心の中まで深くえぐつたあの拳を。

死ぬのならせめて母親に会いたい。

そして理由を聞きたかった。

なぜ自分を置き去りにしたのか、本当に自分を捨てたのかを。

「母親に会わせてやるよ」

葉瑠音の言葉に無限はわれに返つた。

本来の無限であればそんな言葉に見向きもしなかったであろう。

しかし今の無限は葉瑠音に出会う前の無限とは違つていた。

自分の本当の過去に出会い、今まで追い求めていたものに出会つたのだ。

このいつまでも落ち着かない飢餓感は自分の子供のときに、

分かれた家族に会いたいといった気持ちにあることに気づいたから。

「本当か？場所がわかるのか」

以前のように人を疑い、暴力で言いくるめてきた無限はそこには

なかった。

葉瑠音の言うことに素直になれる自分に無限自身が驚いていた。しかしその態度は自分が思っていたよりもずっと楽なことだった。「会わせてくれ、それが本当に出来るのなら、ばあさん、あんたの家族にも合わせてやる」

無限の言葉に葉瑠音は頷いた。

「母親は中央病院の障害診療棟にいる」

それは隣町のこの地域ではかなり大きい総合病院だ。

こんな近くに母親はいたのか。

わずかな時間で母親に合える、その気持ちで無限の心は高鳴った。

無限は葉瑠音を連れ出し外の車に向かった。

車に近づいた無限は周りを見渡し異常がない事を確認する。

「平田、ちよつと降りて手伝ってくれ」

呼ばれた平田は車から降りると、

無限の抱えている老婆のそばにようと無限の正面にまわった。

その時無限の拳が平田の腹にめり込んだ。

声も無く平田はその一撃で、その場に崩れ落ちた。

「悪いな、平田。おまえとの仕事は楽しかった。

もう二度と会えないかも知れないが、

おまえはお前なりの人生を進んでくれ」

平田を歩道の横の住宅側の立ち木の陰になる場所の芝生に、

そつと横たえながら無限は言った。

その胸ポケットから携帯を取り出しスイッチを切った。

再び平田の胸に携帯を戻すと、葉瑠音を助手席にのせて無限は運転席に着いた。

車はライトを付け病院のある方向に向かっていった。

葉瑠音は車の中で無限に語り始めた。

「お前の母親だが、お前をあの時捨てたのではない」

「なぜ、それを知っている。おれは誰にも話したことは無いはずだ」

突然の言葉に無限は驚いて言い返した。

「私はお前の心を読んだのだ。そして同じ精神波をたどってお前の母親の場所を見つけた。

母親は今でもお前の事を気に掛けている。

だから私にもすぐにお前の母親の居場所がわかった。

母親はあの日からずっとお前に私はここにいると思いを伝えている。その母親の気持ちの中にはあの日、お前が帰ってくる前の状況も見える」

「わかった。あんたを信じるしかないな。すぐにでも教えてくれ。あの日に起こった事を」

じつと前を見ながら無限は葉瑠音の一言、一言をかみ締めるように聞き入った。

「あの日、あの男たちが突然やってきて、父親と母親を連れ去ったのだ。

そのとき父親は彼らに抵抗したがかなり痛めつけられて、意識不明になった。

母親はその父親を守るように側に付いていたが、二人とも何も持たされずに、

車に無理やり乗せられ男たちの管理する倉庫に連れ去られた。

その直後お前が帰ってきたようだ」

無限は無言だった。

父親はどうしたんだ。

母親は病院、でも父は。

さらに葉瑠音の話は続く。

「その後、倉庫に監禁された二人は、

そのままにされていたがしばらくして父親の様態が急変した。意識がなくなったのだ。

母親は倉庫のドアを叩き助けを求めた。

しかし奴らは居ない。

かろうじて鍵の壊れている窓から身を乗り出し外に助けを求めに出たところを、



倉庫の様子を見に来た奴らに捕まってしまった。

ただ助けてほしかったただけなのに、

奴らは逃げにかかったものと思い母親を殴り倒した。

やがて父親はそのまま死亡。

母親は寝たきりになって意識ももうろうとしている状態で、今病院に居る」

無限は泣いていた。

運転しながらも目からとめどなく涙が流れていた。

あの日、誰も居なくなつた日から一度も泣いたことの無い無限に、悲しみがこみ上げてきたのだ。

そうだったのか。

俺は棄てられたわけじゃない。それだけで救われた気がした。いままで胸につかえていたものが取れたようだった。

車を路肩に停車して無限は泣いた。

ハンドルに上体を倒したままで。

それを見ていた葉瑠音はそつと無限の肩を抱いた。

無限の身体は温かいもので包まれた。

心のわだかまりはすべて涙となつて流れ落ち、

孤独は愛に満たされ消えていた。

そして無限は葉瑠音を抱きしめた。

それはあの日うしなつた母親のぬくもりを取り戻すようだった。

そして葉瑠音は無限に母親の精神波を送っていた。

それはまさに無限の母親が今そこに居るかのように感じさせた。

「ありがとう、あんたは素晴らしい人だ。やつと俺は救われる。

きつとほかの人たちにもあんたは必要だ。今わかった。

あんたのその能力をほしがっている者がいることも」

無限はやさしく葉瑠音を助手席に戻すと、

再び病院に向かって車を動かし始めた。

歩道の住宅寄りの立ち木脇で、身動きをしている者がいた。

かなり痛むのかその顔はゆがみ、身体を労わる様に起き上がるうと  
していた。

「ふー、だいぶ寝てたようだ。

しかし無茶しやがる。結局こうなるのか。

まあ、殺されなかっただけいいか」

身体に付いた葉っぱくずを掃いながら、平田は呟く。

薄々、感じてはいたがこんなに早くお払い箱とは。

最近、自分でも無意識にグループの批判ばかりしていた。

そんなところを他の連中にやる気の無い奴とか、

裏切るのでないかと感づかれていたのかも知れない。

平田は、自分は根無し草だと思っている。

一つ所に落ち着くのはどうにも性に合わないし、持ってもせいぜい  
2、3年か。

この居場所も最初は良かった。

徒具呂達からの命令は定期的にあるが、

そんなものは金の為、等価交換みたいなものだ。

問題はやり方だ。

課題があつて結果だけを要求されるといった感じで、

目的の為の手段はとやかく言われない。

そこが平田は気に入っていたし、掛かった費用も報酬以外にもらえ  
た。

今まで落ち着くことの無かつた平田にしては長く勤まっていたし、

徒具呂や他のメンバーとの相性は悪くなかつた。

いや、むしろ今まで係わつて来たやばい奴らに比べればずっとま  
もだつたろう。

徒具呂と雨豆裸、妙な関係の二人だが、徒具呂は秀才、雨豆裸は美  
少女、

といったところが今まで平田が出合つたことの無いタイプであり、  
此処に長く居られればもつと親密になりたかつた二人だ。

平田には家族も知り合いも居ない。

親戚など生きているのか死んでいるのかも解らなかったが、いまさらどうでも言いと思っていたし、自分から探す気もまったくなかった。

そんな中で唯一、平田が抱いたのが雨豆裸に対する恋心だった。思うと今でも顔が赤くなりそうだ。

何時も勝気で容赦ない雨豆裸だったが、一度仕事をしくじり瀕死寸前で無限に抱えられフロアに運び込まれた事があった。

徒具呂が検査室に平田を寝かせるように無限に指示をし、体の損傷具合と脳波を確認し最善の治療を施した。

だが平田の様態が一向に良くならなかった。仕事をしくじった精神的挫折感と、

長年の不摂生も加わり心身ともに疲れきっていたのだ。

そんな平田を見かねてか、雨豆裸はさりげなく暇を見ては平田に話しかけてきてくれた。

最初は話もろくに出来なかった様態のときは、

平田の看病を兼ねて、口元まで顔を近づけて話を聞いてくれた。

今までの平田のろくでもない生い立ちにいろいろと耳を傾けて、そして質問をしてきた。

元気になるまで日課のように同じ時間に話し相手になってくれた。

今思えば日中は雨豆裸も待機が多くて退屈だったのかもしれない。

でも、男の病人にしてみれば、

若く、しかもかわいい女子が毎日話を聞いてくれるのは何よりの治療だったし、

そんな気遣いに恋心が湧いてもなんの不思議も無いだろう。

見る見る平田は本来の元気を取り戻した。

仕事に復帰してもしばらくは雨豆裸との会話関係は続いた。

平田も此処に居る意味があった。

だた、最近は徒具呂の計画も進み雨豆裸の出番が多くなると、話す機会も失われた。

一度離れてしまうと後はそのまま流されて、

二人の関係も昔のようにただの組織関係に戻ってしまった様だった。雨豆裸はどう思っていたのか。

その真意を聞く間もなく此処にこうして捨てられてしまった。

平田はもう潮時と思った。

もう一度あの平田の話に夢中になっていた雨豆裸の姿を見たかったが、

それもあきらめ、また昔のように根無し草になって人の流れの中に身をゆだねる。

それが平田の生き方だ。

そう言い聞かせるとその場所から少しでも、遠くへと行くように歩き去ってしまった。

## 七部

### 8、葉瑠音<sup>はるね</sup>

グループGのフロアがあるビル前。午前4時を過ぎた。中林は検査許可が下りた事を御手洗からの連絡で知った。これである壁の向うを調べられる。

すぐ御手洗の捜査チームと結城の科学班の出動を指示した。数分で合同捜査班が来るだろう。ビルの管理者に事の次第を説明し、まもなく令状をもって正式捜査を開始する旨を伝えた。ただし、今回はビルの構造的なものが基準道理に運用されているかどうかの検査であり、

中林達の事件捜査の件は伏せて調べることになる。そしてビルのオーナー側が不利益にならないよう、捜査のことは外部には一切伏せておく事を条件に関係者から了承を得た。

この捜査を開始する前、葉瑠音から歩大尉が行方不明になったとの連絡があった。

学校の帰りに商店街に向かってその後足取りが途絶えたらしい。今回も実芦と同じように突然所在不明になってしまったようだ。それは同じ連中の仕業であることは予想できる。

今回の捜査にて必ず二人を見つけてみせる。中林の決意は強かった。

やがて、ビルの正面の道路に数台の乗用車、ワンボックス、トラックの一団が乗りつけた。いずれの車も工事関係のような外観で、ビルの設備調整などの仕事に来たと思えなかった。

先頭の車から御手洗が中林を見かけて窓を開けた。

その姿はヘルメットに作業着という井出達だ。

「先輩、お待たせしました。準備はいいですか？」

中林がすばやく走り寄り御手洗に手を上げ駐車場の入り口を指し示した。

「それじゃ、打ち合わせ通りに頼む」

その声を合図に車は地下駐車場に整然と入り奥へ向かった。

車両の一群は最下階より一階上のフロアの一角に止まった。

中から作業員の格好をした捜査員が降り必要機材を準備し始める。

「あくまでもこのビルを調整、メンテナンスをしている様に頼む。

例の奴らも普通に出入りするだろうから、

そのときは感づかれないよう慎重に振舞ってくれ。

中に入れるようになってもすぐには行動しないで欲しい。

捜査対象が人質として監禁されていた場合は、

さらに次の手順を用意して再度確認の後、

捜査開始とする。いいな」

準備作業をしながら、静かな声で中林がメンバーに指示を促した。

御手洗と結城を呼ぶ。

「あの壁を調べる手順はいいな。御手洗は出入りの車を見張っていてくれ。

奴らの車がきたらみんなに合図を。結城は俺と一緒にあの壁まで行く。」

「はい、大丈夫です。とりあえず必要最低限の機材をもっていきま

す」

結城が中林の後をついて最下階へ向かうと、

それを合図に御手洗と数人が各主要な出入り口に散っていった。

中林たちが最下階の一番奥に着いた。

例の壁は相変わらず何の変哲も無いままである。ただし、その壁の床には勢いよくその壁の奥に向かっていている事を示す、

タイヤの跡がある以外はである。

「これは実に不思議なことですね。」

このタイヤ痕は壁を目の前にして一切停止していないですね。」

「いや、俺はこの目で見ているから当然といえば当然なんだが、解つていても理解できないでいる。」

そこをお前にその手品の種を明かして欲しいのだ。」

中林はどんな手順でこの壁のなぞを解き明かしてくれるのか、期待を込めて結城に話した。

「では、少し準備させてください。」

結城は手早く機材を壁から数メートル離れた位置に設置し始めた。突然の車の出入りがあってもすぐには見えない柱の影を選び、カメラのような物をその壁に向けていた。

「これで対象を確認します。」

後はその開いた場所の四隅のマーキングを中林さんをお願いします。」

結城は短いマーキングペンを中林に手渡した。

中林は渡されたペンの先を確認しながら壁の前に立ち、車が入りしていたときの事を思い出し、

床の位置、上部の位置の四隅にペンの先を押し付けた。

「何も印が見えないが、大丈夫か？」

中林がげんそうに結城のほうに振り向いた。

「こちらのセンサーでそのペン先をモニターしています。いま機材のほうで認識完了です。」

そうなのか、と中林は納得した。

下手に印が残れば中の連中に入出入りの際に感づかれてしまう。機材の後ろ側にまわり、

壁の様子が見える位置に来た中林は結城の様子を見ることにした。準備が出来ると結城の動きがせわしくなってきた。

センサーカメラの後ろに設置したモニターに、

中林がマーキングした部分が映し出されている。

キーボードから調整用の入力をして、そのつど画面が変化していく。

モニター全体が波を打っているように見える。

しばらくするとマーケティング位置を基点に四角いものが色違いで表現された。

「では、これから特殊光を照射します。このゴーグルを掛けて下さい」

中林は手渡されたゴーグルをつけた。小さな音が聞こえると壁が薄くなってきた。

明らかにその場所が空間であるように見える。

ただ、中の様子は見えない。

ゴーグルをはずすと壁は前のままだ。

「壁は消えないが、どうしてだ」

「いまは構造を確認しています。

あと数分ですべての位置を限定して、

この壁が維持されている周波数を認識できれば、

いつでも壁を消すことができます。もうしばらく待っていてください」

結城の作業を見守りながら、中林はすでに突入の準備を考えていた。

上階までの駐車スペースを考えるとこの中はかなり広い筈だ。

ほかに出口があるとすれば地下通路のようなものだろう。

これは奴らが実際に逃げ出さないと位置特定は難しい。最悪は立てこもった場合だ。

交渉が長引けば二人の身が確実に危険な状態になる。

中林は考えられる状況を模索していた。

「中林さん、準備できました。分析結果は私たちが研究しているものと同じですが、

構造維持と分子レベルの再配置技術が革新的です。

これを考えた人間はまさに天才でしょう。

転送というよりは分子構造で再配列し、完全に既存の壁との融合を成功しています。



その技術によりまったく継ぎ目の無い壁が可能になっています」

「まあ、詳しいことはお前に任せるとして、すぐに消すことは出来るのか？」

「はい、大丈夫です。ただ中に同じ壁があつた場合は現在の周波数と同じでないと、

次の壁を消すのに数分から数十分かかるかもしれません」

「となると、最初の壁までが勝負だな。場合によって長期戦は避けられないか」

中林は腕を組んだ。せめて中が見通せれば作戦も立てられるのだが。

「結城、単純に中の構造は調べられないか？」

「いま、同時に外部より構造を調べていたのですが、なにか内部の壁全体にコーティング素材のようなもので覆われているようで、

はつきり見分けるのが不可能です。

あらゆる周波数で確認していますが、

すべて反響してしまいどのような形のフロアか認識不可です」

「となると、突入は無理か」

中林が残念そうに顎をなでると、突然、結城が振り向いた。

「そうだ、これは賭けですが内部の人間は多分外部との連絡を取るために、

携帯電話の無線機能を設置しているかも知れません。

一瞬ですが壁を消してその隙に小型センサーを内部に送り込めば、携帯通信で内部の構造を確認できるかも知れません」

「よし、今は出来る事をすべて試してみるしかなさそうだ。すぐに始めてくれ」

結城はすでに小型センサーを中林に渡そうとしていた。

雨豆裸は話が終わるとゆっくり立ち上がり奥のスペースに向かっ

た。

「シャワーを浴びてくる。実芦も使うかい？」

実芦は軽く首をふった。

「いい。私はこのままで平気だから」

歩大尉のほうに視線を向けながら小さな声で返事をした。

歩大尉は疲れたのかだいぶ前に赤い台を背中に、クッションの上で寝息を立てていた。

ここに連れられてきて、危害が加えられない事が解ってから、雨豆裸と実芦と歩大尉はすっかり打解けて、

三人は与えられた時間をお互いの話で過ごしていた。

それは三人が同じ年齢であったのもひとつの要因であろう。

いろいろな話題がでた。

ほとんどは実芦を中心とした高校生活の話題や、最近街に出来たシヨップに、ファッションの事。

意外だったのは雨豆裸のファッション関係の話題だ。

そのことには広い見識で自分のこだわりを語っていた。

実芦と歩大尉は感心していた。

激しい気性を感じさせる雨豆裸が、

ことファッションになると肌理の細かいセンスが感じられたからである。

そして、雨豆裸が一番興味を惹かれたのは歩大尉の料理の話である。小学校の頃から身につけ、

今では出来ない料理が無いのではないだろうかと言わんばかりに語る様子を、

雨豆裸はあきもせず聞き、逆に質問攻めにしていた。

料理は出来ない雨豆裸であったが、

どこで覚えたのか料理の種類はよく知っていた。

歩大尉の説明するいろんな料理はほとんど知っているようである。

ただ素材の詳しい料理方法は知らないのです、

歩大尉の話すことに一つ一つ、ああ、あれはそういうものだったの

か、

と相槌をうち長々と会話は続いた。

実芦は今まで歩大尉と料理はすることはあったが、その考えまではあまり気にしていなかった。

改めて二人の会話で歩大尉の料理に対する情熱を感じた。

一通り話題が一巡すると歩大尉は疲れたといつて横になった。

実芦と雨豆裸は相変わらず話が続けていた。

そしてそろそろ夜明けが近いとなると、雨豆裸がシャワーを浴びに立ったのである。

このフロア的环境は最適に保たれているようだ。

暑くも無く寒くも無い。乾燥もなく心地よい空気が漂っている。

窓も無いのに時間や人の出入りに合わせて、

最適の明かりが間接的に上下から来る。

ただ入り口から一番奥まで壁のくねりだけで区切られているだけで、脇へのドアは無い。

雨豆裸たちが特定の壁を前にして腕を上下させると、

そこに空間ができて出入り出来る様になっている。

ここのメンバー全員が腕につけている細いリングがその鍵になっているようだ。

一方、徒具呂は研究室にはいったまま出てこない。

だいぶ前に無限と平田は出かけていったきりだ。

その後、グレーのセダンに乗って実芦を連れてきた、

キャップ帽の男が戻ってきていたようだ。

雨豆裸がキャップ帽に話をしに行っていたが内容は不明だ。

ただキャップ帽は入り口近くで休んでいるようだ、

ここからは遠いので何をしているのかはまったく解らなかった。

これからの事を考えると実芦は不安になったが、

きつと葉瑠音ばあと中林さんが必死になって二人を探しているはずだ。

いや、すぐ近くまで来ていてすぐに助け出す準備をしているかもしれない。

れない。

実芦はそんな感じがしてならなかった。

そのために、いつでも歩大尉のそばにいなければと実芦は強くそう思った。

キャップ帽の男はフロアの入り口近くで車の整備をしていた。

もともと機械整備の技術は持っていた。

その能力も活かすように徒具呂から指示されていて、

グループで使う車両はすべてキャップ帽が整備改造を手伝っていた。車両はフロアの入り口があると思われる場所から10メートルぐらいの場所である。

その壁が一瞬瞬いた。

そして空洞が出来、下の隅に小さな球状のものが転がって静かに止まった。

すでに壁は元のままになっている。

キャップ帽はちょうど壁に向かって背を向けていたのでまったく気づかなかった。

整備も片付いたので、

休憩をするために飲み物をとりに近くの収納スペースに移動したキャップ帽であったが、

何かざわめく様な気配を感じ後ろを振り向いたキャップ帽の身体は凍りついた。

そこには中林が銃を構えて立っていた。

さらに後ろには御手洗と数人の作業員の格好をした警官達が銃を構えて周辺を見張っている。

「よう、下手な真似は無しだぜ、素直にそこに手を上げてうつ伏せになってもらおうか」

言われるままにキャップ帽は床に這った。

御手洗がキャップ帽の手を後ろに回し手錠を嵌めて、身体をしらべて武器らしきものがないと確認すると、

後続の警官に確保するように指示した。

実芦たちがいる奥のフロアに中林が突入した瞬間、照明が赤い色に変わった。

突然の変化に実芦は歩大尉を揺り起こした。

「大変、何かあったみたい。起きて歩大尉」

少しだるいのか、ゆっくりした態度で目を覚ました歩大尉は、周りが真っ赤なのに一瞬たじろいだ。

「え、どうしたんだいなにか起こったのか」

「いえ、照明が突然変わったただけだけど、なにか変よ」

そこへ、雨豆裸が壁の中から出てきた。着替えていた。

「奴らが来たようだ。悪いけど一緒に来てもらおう。すまない」

雨豆裸がこつちへと合図をした。

その瞬間今まで出口方向の一番狭くなっている所に壁が出来ている。侵入者を防ぐ為だろう。

仕組みは解らなかったが一瞬にして出口は塞がれた。

歩大尉は緊張していた。実芦が腕をつかんで歩大尉を見上げていた。

「大丈夫、雨豆裸ちゃんが私たちを守ってくれるから」

その言葉には信頼できるものがあつた。

今までの歩大尉たちに接してきた雨豆裸の態度だ。

それを思うといくらか落ち着いていられた。

雨豆裸が指し示したところが空間になっている。

そこは部屋ではなく真っ直ぐに奥へ続く通路であつた。

「さあ、必要な荷物はもって、私に付いてきて」

それぞれの鞆とそのほかの荷物を手に持ち、歩大尉と雨豆裸はその通路に入った。

その瞬間壁は消えフロアの中も照明が普段の明かりになり、出口方向の壁だけが残った。

中林はキャップ帽以外その周辺に誰もいない事を確認すると、

警官たちと奥へ進んだ。大体の大きさは把握していたが、実際に踏み込んでみるとかなり深い。

ゆっくりと周りを確認しながら一番奥と思われたところに来たが、センサーのデータと若干深さが違うようだ。

結城が一番奥の壁を調べた。

「ここに新しい壁が作られたようです。すぐに消します」

結城が背中に背負った機材をすばやく床に置くと、端末のキーを押した。

一瞬にして壁が着えた。

そこには巨大なモニターと赤い台が置いてあり、何人かがそこに今までいた痕跡があった。

「しまった。逃げられたか」

「中林さん、これは、高校の制服の一部じゃありませんか」

御手洗が白いスカーフを手にとつて、中林に見せた。

それには高校の校章のマークとイニシャルのM・Aと刺繍があった。「確かに、これは実芦がいつも制服の首に巻いているものだ。

やはりここにいたのだ。

くそ、あと一歩だったのに」

中林はそのスカーフを強く握り締めた。その間、結城は次の壁を調べていた。

左右に居住スペースがあるようだ。次々と壁を消していく。

すぐに警察隊が中を確認したがいずれの部屋にも誰もいない。

あの検査室にも徒具呂の姿はなかった。雨豆裸たちより先に逃げたようだ。

そして最後の壁が消された。

そこは雨豆裸たちが歩大尉と実芦をつれて出て行った場所だ。中林は叫んだ。

「ここだ、この通路はきつと外部に通じている。

すぐに探査して出口を突き止めてくれ。

健治、お前は外の車に待機して結城からの情報を確認したら、

すぐに出口の先に行け。いいな」

御手洗は周りの数人を集めて駐車場に向かっていった。

結城が探査を開始した。

数分で結果が出た。

「かなり先は長いですが、2キロ近くはあります。

出口はこの先の正面に当たる駅構内の地下とされます」

「よし、健治に場所を教えて地上で待機するように。俺はこのまま進む。

あと二人着いてきてくれ、残りは結城と共に現場保持と調査してくれ。頼んだぞ」

「了解です」

中林は言い終わると、彼らは通路に入ってしまった。

中央総合病院、その駐車場に黒いセダンが止まっている。

建物の外からは目立たぬように多くの車の陰になる様な位置だ。

しかも植栽の多い直接日が当たらない隅のほうで、病院の入り口が見える方向を向いている。

中には男女と思われる二人の人影が見える。

「さあ、行っておいで。母親はお前を待っている」

「でも、あんたはどうする」

葉瑠音の言葉に無限は問い返した。

「安心していい。私は待っているよ、いまさら逃げようなどとは思わない」

解ったと頷き、無限はドアを開け静かに閉めると病院の入り口に向かって歩き出した。

受付で名前を確認し母親のいる病室番号を聞いて、ゆっくりとエレベーターに乗り込む。

木崎 安子 障害診療棟 503 Cベッド

確かに無限の母親である。受付で母親の今までの経過を聞いた。担当者が名簿一覧を見ながら答えた。

「木崎さんはここに來たのが、ちょうど私が担当になってまもなくでしたから、

2年前です。

でそれまではまったく意識が無かったようで名前も何もかも不明だったのですが、

ここに來てまもなく一時的に意識が回復したときがあつて、そのときに木崎さんだと確認できました。

でもまもなく様態が悪化していまは一日中意識が朦朧としている状態です」

そんな状態では、きっと俺だと気づかないのではないだろうか。いや、気づかないほうがいい。

ここまで來てはみたものの、何を報告すればいい。

親に棄てられたと思い込み、何もかも投げやりに生きてきた少年時代、

成人してもろくな仕事に付く事もせず拳句に人の恨みを買ひ、地獄に突き落とされてしまった。

そのまま死ねばよかったのに死に切れず、悪魔と契約をして、さらに人の道から外れる一方の人生だ。こんな事をいまさら母親に言えるだろうか。

だまつたまま帰ろう。

そう思いながらも無限の足はいとしい母親のいる部屋の前まで來てしまった。

部屋の中に入ると4人部屋だった。

誰も見ることからに障害を負っていた。

「こんばんは、えーとどちらの方に面会です？」

入ってすぐのベッドの患者が語りかけてきた。

上体は起きていたが、多分自分で歩くことは無理なようだった。

意識はしっかりしているようで、語りかけてきた表情はにこやかだ



った。

「あのう、木崎ですがどちらでしょう」

その患者に返事をする、患者は驚いたように奥のベッドを指差した。

「木崎さんのご家族の方ですか、めずらしいわ。初めてじゃないの。いままで誰も木崎さんに面会なんてなかったわ。

私がここに来てから誰も訪ねては来てないはずだから」

「そうね、木崎さんはご家族がいないものだと思っていたから。で、ご関係は？」

隣の患者が治療中の右腕をかばいながら無限に視線を向けた。

「息子です」

ごく自然に無限は答えた。

そう答える自分がなぜかうれしかった。

周りの患者は驚いていた。

事情はどうであれ子供が尋ねてきたことに、みな自分達のことのように喜んでいた。

「よかったねえ、木崎さん。息子さんだよ。やっと会えたねえ」

みな歓迎してくれた。無限は来てよかったと思った。

ゆつくりと一番奥のベッドに近づいた。

躊躇はなかった。

そこには小さい老女が鼻に管を通して眠るように横たわっていた。目はうつろで髪は真っ白であった。

思い描いていた母親は変わり果てていたが、その表情には確かに昔の面影が残っていた。

小さく感じたが、最後に見たときの自分は少年であった。

そのときから自分は無駄に大きくなっている。

その分を差し引けば、当然母が小さく感じてもおかしくない。

ただずっと寝たきりなのであろう、

身体は痩せ細り過ぎ去った年月がその身体に無数のしわを刻んでいる。

でもこれはあのやさしく迎えてくれた母親に間違いはなかった。

無限の目は涙であふれていた。

「おかあさん」

言葉にならない声がでた。

そしてそのやせて枯れ木のようになった手を無限は両手で包み込む様に握った。

小さく硬くなっていたが、何よりもおしかった。

あの少年の頃に握ったやわらかく暖かい手と同じに感じた。

無限はベッドの横にしゃがみ込みその手を自分の口に当て、そしてほほに押し当てた。

涙がその手を濡らしていた。

「おかあさん、やっと会えたね。丈だよ。帰ってきたよ」

こぼれる涙をぬぐおうともせずに無限は、小さな木崎丈になっていた。た。

木崎安子の息子の丈に。

無限はその時かすかな手の反応を感じた。

安子の顔を見た。無限を見ていた。

さつきまで意識が感じられなかったのに、いまその目ははっきりと無限の目を捉えていた。

「かあさん！」

無限は安子の顔に自分の顔を近づけた。

「丈、丈だね。お帰り。やっと、会えたよ。」

ごめんよ。迎えにいけなくて」

ゆっくりと言葉を選ぶように、でもはっきりと無限に話しかけた。

「かあさあん！」

その小さな身体を無限は抱きしめた。もう言葉は要らないと。

今までのことはどうでもいいと。すべてこの時だけでいいと。

安子は丈の頭をなでた。ゆっくりとやさしく。

周りの患者たちの嗚咽がきこえる。

誰もがこの親子の気持ちを感じていた。

事情はわからないがやっと出会えた喜びに涙があふれていた。

「丈、お前は、私の大事な、息子だよ。やっと、願いが、かなった。お前も、大きくなって、よかった。

私は、もう、思い残す、ことは、無い。

もう、そろそろ、お父さんの、元に行くよ。

あの人ずっと、私を待つてゐるから。

丈、ごめんね。

今度は、お父さんの、そばにいて、あ、げ、た、い、の」

残った力を振り絞るように、安子は丈に伝えた。

その言葉を言い終えると、安子の身体から少しずつ力が抜け生気が失われていった。

「かあさん、だめだ、もつと生きて。だめだあ！」

無限は抱きしめたまま、安子の魂が抜け出ないように抱きしめた。しかし、そのまま安子の身体から大きなため息と共に力が抜けていった。

「ああ、かあさん」

無限は安子をもとのベッドに静かに戻した。

その顔はとても穏やかに見えた。

一番幸せなときに笑っている母親の顔であった。

さようなら、かあさん。

無限は心の中でつぶやいた。

そつとその手を放し、

もう二度と見ることの無いであろう姿を、

目に焼き付けるようにじつと見ていた。

そしてそのまま病室を後にした。

ほかの患者たちのすすり泣く声を聞きながら。



## 八部

### 9、御手洗みたらい

グループ《G》のフロアのあるビルの駐車場出口付近で、

捜査車両の中で待機していた御手洗に結城から携帯電話で連絡があった。

「通路の出口は都市大学前駅の構内の地下です」

「了解。よし、駅構内へ向かってくれ」

運転担当に声をかけ、御手洗の車両が発発すると同時に数台がその場を後にした。

駅周辺は混雑していたが、緊急車両通過のアナウンスとサイレンで程なく駅入り口に着いた。

駅公安と確認を済ますと、御手洗は警官数人と駅構内に入っていた。

さらに結城の指示を仰ぐと、場所は現在工事中の引込み線内部の奥らしい。

幸い運行中の車両を止める必要は無いようだ。

未工事分で線路を引いていない部分があり、

壁をコンクリートで覆っているだけのトンネル区間が見えて、

まもなく照明施設が途切れるとその奥は真っ暗だった。

後からついてきている保線担当者に投光器を準備してもらい、

奥まで見通せるよう明かりを灯しが、一番奥には終点と思われる壁があるだけで、

肝心の出口らしきものは見当たらなかった。

御手洗は携帯を取り出していた。

「このままでは先輩の援護は無理だな。」

「解った。今から俺もそっちへ行く。多分こっちのフロアと同じ仕

掛けがあるかもしれない」

結城が携帯の向うで答えた。到着まではしばらくかかるだろう。次の手配に御手洗は動いた。

「この壁から10メートル以上戻った場所に捜査本部を設置するので、

手の空いた者は準備に手を貸してもらおう。

保線担当の方々には、電源、明かりの準備をお願いします。

あと、署に連絡して、飲食その他一般滞在用の準備をするように手配してくれ」

人々がそれぞれに動き出し、あわただしくなった。

御手洗は中林が要求してくるであろうあらゆる準備をして待機するつもりであった。

実芦は雨豆裸の後を追いかけて、歩大尉はその後を付いて来ている。フロアからの通路を進んでいる。

「もう少しだから、我慢して」

雨豆裸が振り向きながら、速いペースで進んでゆく。

通路はフロアと同じく上下から照らされてかなり明るいが緩やかに蛇行しているので、

フロアからの出口はもう見えない。

そして行く先の出口も今の段階では見えていない。

しばらくいくと、雨豆裸が立ち止まり振り向きながら後ろの二人に告げた。

「ここからは足場が悪いから気をつけて」

すると今まで平らだった通路が終わりコンクリートそのままの通路に変わった。

照明が黄色の小さいものになり一気に薄暗くなり、三人がそこに出た途端今までの通路の照明が消えた。

「何もしないで来られたのはここまで。」

ここから先は自分の足元をしつかり確認しながら付いてきて」

雨豆裸が自ら証明するように慎重な足取りになった。

三人はお互いの足元を確認するように一列になってゆっくりと進んだ。

しばらく進むと重厚な扉が一行を迎え、

雨豆裸が手をかざすと扉が横に移動して突然明るい空間が現われた。中は競技場のように広いスペースで、雨豆裸が入ると後続の二人もそれに続いた。

地下の様であった。

地上からはどのくらい深いのかは解らなかったが、中央部分にはいろいろな機材が用意されていて、

さらにその中心はドーム状の透明な空間が用意されていた。

人が中で座れるように椅子も設置されていて、

その外側にはドーム中央を見張るかのように棒状のものが数本中心に向けて置かれている。

ビルの4、5階と思われる見上げるほどの高さの天井は、

彼らが居たフロアと同じような一面が発光する照明がついて、

そのおかげでこの場所は昼間のように明るい。

実芦と歩大尉がその大きさに呆然としていると、

ドームの向うからサングラスの男がゆっくりと歩み出てきた。

徒具呂だ。

それを見た雨豆裸が側に歩み寄り話しかけた。

「多分、警察の奴らだと思うけど、フロアに乗り込まれてしまったみたい。

入り口の仕掛けを見破ったようなので、この通路にも時期やって来ると思う」

「では、後は時間の問題だな。

皆さんここもあと数十分で警察の皆さんが駆けつけてくるでしょう。ただしすんなりとここを明け渡す気はないです。覚悟していてください」

徒具呂は二人に語りかけた。その態度には何か不穏な気配を漂わせていた。

「二人にはそこに座って休んでいてください。きつと面白いことが起こるでしょうから」

ますます不気味な気配を漂わせ、

振り返りながらドームの装置にスイッチをいれ機材を調整しだした。作業を続けながら徒具呂は語り出した。

「この施設を作るのに数年かかりました。

これは昔、ある場所にあった施設の一部を完璧に復元させた物で、ほぼ完璧に出来たのですが、

肝心の心臓部といえる部分の設定値の精神エネルギーの正確な波長が解りません。

そのために、その施設に保存してあった記録によるリストから、その精神エネルギーの持ち主を探してあて、

数々の人々のデータを取りましたが何かがいとも足りないのです。すべて不完全でした。

ですが、実芦、あなたのデータは私が求めていた物とほぼ合致したのです。

どうしてあなたがその精神エネルギーの持ち主であつたのか解りませんが、

偶然だとしてもこのことは素直に受け入れる事にしました。

私が持っているデータにも入っていない事柄があるようですね。

まあ、先ほど私にしてくれた事は今ひとつ納得出来ませんが、

これでこの設備が完全体で起動出来るのでとりあえず感謝します」

徒具呂は口元だけで笑いを見せていた。

サングラスに隠れて見えない瞳は何を思うのか誰にも解ることは出来なかった。

実芦は自分が名指しされてそのことがどんな事か理解出来ないでいた。

ただ、徒具呂が触れたときに起きたことは、



なにか自分には特殊なことが隠されているような気がしていた。

雨豆裸が実芦の側に近づいて子声でささやいた。

「中央部にはあまり近づかないで出来るだけ壁際に居たほうがいい。四隅と各壁の中央は出入り口になっているからその近くに居たほうが安全だと思う。」

あと、休憩室はあそこだから自由に使って」

雨豆裸はドームの右側にある部屋を指差した。

「ただし今は徒具呂の許しがあるまで勝手に外には出ないで。

その時が来たら私が合図をする。」

雨豆裸は二人に言い終わると、徒具呂の側を通り休憩室に向かった。

しばらくすると飲み物を手に戻ってきた。

それを実芦と歩大尉に手渡すと、

自分は実芦たちが座っている向かいのソファに座り飲み物を飲みだした。

実芦と歩大尉たちを救い出す為に、中林と警察はまもなくここに来ると解っているのに、

徒具呂と雨豆裸はきわめて平常心だ。

二人はここから逃げる気はない様だった。

Gのフロアから通路を使って移動する際に休んでいた場所に、

実芦は制服のスカーフをわざと置いてきた。

多分今頃は中林さん達の捜索隊がそれを見て自分たちの存在に気づいてくれてるはずだ。

ドーム状の機械が少しずつ唸りをあげてきて、ドームを形作る透明の部分が白く光り始めた。

「そうだ、これでいい。ここまで来るのになんと長かった事だ。

後はこのデータさえ記録すればすべて完了だ」

徒具呂は一心不乱にデータの記録と、機材の動きを確認している。見るからにドームの中心部はかなりのエネルギーが集中している様

で、

ゆっくりとだが唸りと共に振動も加わってきている。

その直後、実芦たちが居るところからドームを正面に見た左側の扉が移動し始めた。

開いた空間から数名の黒いスーツ姿の男たちが静かに入ってきた。

徒具呂を確認してドーム状の機材の周辺までやってくると、徒具呂に話しかけてきた。

男たちは雨豆裸や実芦たちを見やったがさほど気にも留めなかった。

「いよいよ完成だな。やはり今回は成功したみたいだ。実にいい眺めで結構」

「お待たせしました。ご期待に添えるものです、ただしこれはプロトタイプですから、

さらに磨きをかけていけばこの半分の大きさも可能です。

このドームで日本中、いや将来は世界中のコントロールも可能になります」

男たちは徒具呂の説明に満足そうに頷きながらドームの周辺を確認していた。

「ところで、例のクローン情報は進んでいるのか？

このドームも重要だが肝心の媒体が無ければ意味が無いぞ」

男たちの問いかけに徒具呂はかすかに唇をゆがめ、またその事かと思い、答える。

「それは、何度も話しましたように、媒体の育成は可能ですが肝心の精神移動、

もしくは精神定着が出来なければクローンたちは空っぽの意味の無いものになってしまいます。

そのためのマザータイプははまだ見つかっていません」

徒具呂は機械を観測していた手を休め、

振り向きながら鋭い顔つきで、何をいまさらと言った態度を取っていた。

「となると、一体一体の成人タイプはやはり実年齢分だけ時間が掛

かると言う訳だな。

いま成人を迎えている媒体は数が少なすぎる。

これでは我々が目指す世界作りもまだまだ先ということか」

男たちは顔を見合わせて落胆の表情をしていた。

「しかし、物は考えようでしょう。

そんなに早く進めてもオリジナルの反感を買うだけですから、それなら肉体だけの媒体で移植事業の完成を早めたほうがいい。

何せ媒体を成人させるには莫大な費用と設備が必要ですから」

徒具呂が説明を始めると、男たちはしぶしぶ頷いてその作業を見ていた。

彼らの会話に歩大尉と実芦は理解できずに居た。

それは当人たちだけが認識している事柄であるため、周りに部外者が居ようが何も遠慮するところもなく話続けている事を考えれば当然かもしれない。

ただ、徒具呂を含め彼らはなにか重大な事を始めようとしていることだけは感じ取ることが出来た。

ドームの状態も安定して作動してきたのを確認すると、

スーツ姿の連中に向き直り徒具呂は歩大尉たちが、

休んでいる後ろの壁を指差しながらみんなに聞こえるように行った。

「さて、彼らがいよいよ登場ですよ！」

その声が広い空間に響き、皆が指差すほうを見た直後、

歩大尉たちがフロアからここに入ってきた扉が動き出した。

まぶしさに顔をしかめながら数名がゆっくりとこの空間に足を踏み入れた。

中林と警官たちである。

「おい、お前たち動くんじゃないぞ」

銃を構えその場にいた全員に指示をした。

そして、実芦と歩大尉をその中に見つけると、自身に満ちた表情を一瞬見せた中林であった。

無限はゆつくりと病室から車に戻ってきた。

扉をあけて運転席に乗り込むと、静かに助手席で眠るように座っている葉瑠音に話しかけた。

「ありがとうな、最後に母を起こしてくれて。俺の思いを告げること出来たし、

母を親父のところに返してやれた」

「解っていたのか。まあ、あのままでは意識は戻らずにいただろう。でも私は手を貸しただけで、何もしてはいない。

お前の母親の思いの強さがお前の存在に気づいたから、その助けをさせてもらっただけだ」

無限は黙って頷いていた。そして葉瑠音に訴えかけるように視線を向けた。

それに答えるように葉瑠音が言う。

「お前はもうひとつの事をやり遂げようとしている。それは父親の復讐」

「どうしても、我慢できない。

母はそのことに触れはしなかったが、その胸の奥は俺と同じだったはずだ。

親父を死に追い込んだ奴の事を許すわけにはいかない。

もう一度その能力を使ってそいつの居場所を教えてくれ、頼む」

「他人を傷つけるためにこの力を使うのは、

本位ではないがお前のすべてはそのことしかないし、誰にも止められそうもない。

物事の善か悪かはその当事者ですら解るものでもない。

すべてはそれぞれの思いの成し遂げられ方次第。

車を出しなさい。その場所へ案内するから」

「感謝するぜ、これが済んだらあんたを必ずあの家に戻してやる。だからもう少し付き合ってくれ」

車のエンジンが動き、車体が震えると黒のセダンが駐車場の通路

に姿を現し、

タイヤを軋ませ大きく円を描くと病院の出口から道路を迷うことなくその場所に向かっていった。

葉瑠音の導くまま黒のセダンは走り続けた。

それは獲物を探して執拗にただ目的のみに向かう猛獣のような速さで。

やがてその動きを止める場所にたどり着くと無限は車の窓をあけ、その目の前にそびえるビルを見上げた。

広い工場跡地のような場所の中央に存在するそれは、

外部からはエレベーター試験棟とペイントされている。

無限は建物を知っていた。

何年ぶりだろう。

かつて無限が駅のホームから不審者に突き落とされ瀕死の状態になった直後、

ある男に身体を元に戻してやるから手助けをしてくれないかと持ち掛けられた時があった。

あの時は死ぬことしか考えられなかったし、

体が、まして両足が元に戻るなど信じはしなかったが、

少しでもましな状態に戻るのなら、その男に任せることにした。

それが後に悪魔との契約になるとは思いもしなかった。

確かに身体は完全に戻った。奇跡としか言いようがなかった。

いったいどんな事をしたのかその時はどうでもよかった。

とにかくこれで俺は前のように自分で何もかも出来る、そう思うと

その男の為なら何でもした。

その男とはあの徒具呂のことである。

その回復治療をしたのが確かこのビルの地下であった。

「ここまでは、その男の行き場所は解ったのだが、

この中に入った途端行方が終えなくなってしまった。

この内部は何か精神波を遮断する仕掛けがあるのかもしれない」

葉瑠音が静かに語った。無限は知っていた。

あの一連の誘拐をするとき必ず頭に黒い袋を被せるように徒具呂に指示され、

その理由は誘拐対象者を追跡者から遮断するためだと聞かされていたからだ。

その素材と同じものを壁内部にコーティングしていることも。

この場所で、居場所を知らせる精神波が途絶えたことは、

目的の人物がこの中に居るといふ何よりの証明である。

車で建物の前に進む。

正面は例の入り口であつたはずだ。

腕のリングを確認してゆつくりと近づくと壁がぽつかりと開いた。

中を見るとそれは重機械専用のエレベーターで、

そのまま地下に降りられるようになっていた。

奥まで車で進むと明かりの色が黄色から赤色に変わり、

低く引きずるような音が室内にこだまし始め、

エレベーターの箱が地下に降りてゆくを感じた。

それもかなりの早さだ。

その後上下に大きな衝撃を感じると、

正面の壁が左右にゆつくりと開き前方に通路が現われた。

通路はかなり広くそのまま車でUターンが出来るぐらいの幅があり、

緩やかに前方に傾斜してその先の大きなスペースに繋がっている。

そのスペースからの明かりが微かに手前まで照らしている。

スペースのドアが開いているのだが、

幸いこちらの音は向こう側には聞こえていないらしい。

ゆつくりと車のままエレベーターをおり、

前方の奥のドア付近まで来ると一台のセダンが無人のまま止まっていた。

慎重にスペース入り口から影になる場所にゆつくりと静かに車を止めた。

葉瑠音は感じていた。

無限が復讐を成し遂げようと探す相手がその扉の向うのスペースに

居る事。

さらに歩大尉、実芦の二人も同じ空間に居る事。

そして葉瑠音やそのほかの者にとっても、

大いにかかわりのある人物もその中に含まれていること。

やがてすべては一つの輪のように結びついてゆく事も。

## 九部

10、しんじつ 眞実

中林は実芦達が入って行つたと思われる通路に入り、その先につながる場所へ向かつていたが、通路半ばと思われる所で突然明かりが消えて真つ暗になってしまった。

胸ポケットから小型照明を出し辺りを照らした。

後ろに付いていた警官達も各々懐中電灯を手に持ちさらに先に行こうとしていた。

それを片手で制して、

「待て。このままいつでも入り口と同じ仕掛けがあつた場合どうしようもなくなる。」

一旦戻り体制を整えてからにする」

そういい終わると警官達と共に入り口に戻り始めた。

中林は最初にこのスペースに乗り込んだ状況を思い出した。

入り口近くの駐車スペースに居たキャップ帽は確か腕にリングを嵌めていたな。

あれが何か全ての入り口のキーの様なものだったのではないかと。よし、あいつを連れて何かの時には出入り口の捜査をさせようと。

元の入り口に戻ると、現場保持の警官にキャップ帽を連れ戻させ、中林が本人に着いてくるよう話をした。

キャップ帽は今さら何があつても構わないといった態度で、捜査には協力する態度をとっていた。その男を後続の警官に任せて再度通路を進んでいる中林である。

何とか中央のスペース手前までたどり着た。

やはり終点は重厚なドアが待ち構えていて、そのまま進んでいたのではどうしようもなかったであろう。警官に指示し、キャップ帽を



先頭にさせドアを開けさせようとした。

事前におのおのの装備を確認させ、突然の事態に対処できつるよう  
に準備すると、前方のドアの開閉を合図に乗り込む。

扉が開くと、まぶしさに顔をしかめたが、すぐに状況を把握し中林  
は大声で全員に指示をした。

「おい、お前たち動くなよ」

銃を構え、実芦と歩大尉をその中に見つけると、自分の判断に間  
違えがなかったと感じた中林であった。

「やっと来たようですね、皆さん」

徒具呂が中央の機械に歩み寄り、中林に向かって右手を上げた。

その手には小型の無線スイッチが握られていた。

誰が見てもそれはそのボタンが押されれば、この場にいる者たち  
にとっては致命的な結果をもたらすものと思わざるをえないと理解で  
きる行為であった。

「逆にこちらから皆さんに動かないよう要望します。言うとおりに  
していただきます」

中林は徒具呂の行為と中央のドーム状の設備が何かものすごい力  
を帯びて光り輝いているのを見て、自分には到底太刀打ちできない  
と判断し、周りの警官たちに徒具呂の指示に従い勝手なまねはしな  
いよう指示した。

「さすがですね、刑事さんは状況が解つてらっしゃる。皆さんがそ  
の様に察しのよい方ばかりであれば私の仕事ももっとスムーズに行  
ったはずなのですが、まあいいでしょう。

これから私のおしゃべりに付き合ってもらいます」

徒具呂の周辺にいた黒いスーツの男たちも状況が飲み込めないま  
まであったが、徒具呂の行為と中林たちの態度に今は逆らわないほ  
うがいいと判断したのか、静かにその場にて立ち止まっていた。

歩大尉と実芦は、中林を確認すると安堵の表情を見せて、やはり直  
ぐ其処に来ていてくれた。それならば、そのままこの状況が良くな  
るまで待とうと思っていた。

その時反対側のドアの影には葉瑠音と無限が中の状況の変化を見守るように佇んでいた。

徒具呂が右手を上げたまま、ドームを制御する機械の前に移動し一段高くなるよう周りの机の上に乗立上がった。

「私がこの研究をしたのは、義理の父親の研究を引き継ぎそれを完成させるためです。

義理の父親はこの研究の第一人者でした。

そして天才でもありましたが、あまりに独創的な研究理論とその結果を速く求めた為に同僚や上司から疎まれなかなか認められなく、ある日その結果を出すべく研究対象者より無理に能力を引き出そうとした結果、研究所、スタッフの大半を失いそして自らも重症を負ってしまいました。

ここからは義理の父親から聞かされたことです」

徒具呂の話は続く。

20年ほど前、政府は世界中に蔓延しつつある未知なる病原、難病、誕生時および先天的な障害などに対応する為の新しい研究施設開発とスタッフを集め新プロジェクトを開設した。その中に徒具呂の義理の父親も入っていた。

研究対象は先の人類の対病原、遺伝子関係から細胞複製、つまりクローン技術、

そしてその応用の移植臓器開発までにおよび、同施設内ではそれに伴った新技術による設備機器の開発もしていた。

その中でも一番期待されたのが、クローン技術だ。

主任クラスの技術者は世界最高の人物でしかも二人で主任を兼任していた。

その直属に徒具呂の義理の父親、佐伯真吾がいた。

まさしく彼は天才であり与えられた技術開発はその独創的発想力で次々と問題を解決させクローン技術を完成の域まで引き上げた。

そんな佐伯もクローン体の脳構造における問題解決には専門外でも

あつたためなかなか成功に導くことが出来ずにいた。

それはクローン元、この場合一般の人間のことでオリジナルと呼んでいる者から、

クローンを製造するとき最初は新生児の状態からになるが、この場合は脳の構造も通常の新生児と同じの為実際の人間と同じく年齢を重ねていけば何の問題もなく身体も脳も成長できるが、現実には、たとえば20歳の人間のクローンといえはその時点の20歳のクローンを製造することが要求される。

それを解決する為に佐伯は成長ホルモンや成長促進剤等の開発により短時間でオリジナルと寸分違わぬクローンを製造するのに成功していた。

しかし脳の中身はいくら肉体が早く成長しても新生児のまままで知識の蓄積や心の成長がまったくない状態であることが問題として残っていた。

これでは身体は大人であつても、脳と心は空っぽでただの大人の肉体ではない。

その肉体の使い道として一番考えられたのが、オリジナルの内臓疾患や外傷による四肢の損傷などで移植が必要な場合はクローンを製造して必要な部位を取り出し利用することだった。元の肉体及び臓器はオリジナルそのものなので拒絶反応もなく、実際に現在の多くの移植はその技術が採用されつつある。

徒具呂たちは彼らの研究の資金源として闇でクローン技術を使用しているらしい。

残された問題解決に能力を発揮したのが佐伯の上司に当たる主任技術者の二人であつた。彼らは生命工学と脳科学の専門分野のエキスパートであり脳の構造に関しては超能力、

心霊、等まで幅広い技術を有していた。

佐伯の研究成果により外観的なクローンは成功したが、それに伴う脳の短期間の成人化は彼らをもつてしても困難を伴うものであつた。度重なる失敗もあつたが数々の研究の中から導き出されたのが、精

神波と呼ばれるエネルギーの存在であった。

これはテレパシーの一種でもともと超能力として以前から能力者の存在は確認されてはいたが、実際にその能力を自在に使える人間は限られていた。

能力者はその特異性から社会から排除されたり自ら孤独な世界に身を投じたりしていて、なかなかその所在を確認できずにいた。

政府はその困難を解決する為独自の組織を作り研究対象を搜索し始めた。

その結果何名か候補者が上がり、研究所に連れてくる事が出来るようになった。

その能力者により精神波をコントロールし、オリジナルの精神、思考、知識、記憶までほぼクローンにコピーできるまでに至った。

完全に自立して活動できるクローンの製造を彼らは誕生と呼んだ。

誕生した人々はその後の研究結果で、オリジナルより強い生命力を持つことが確認された。それはオリジナルが慢性疾患患者であってもクローンは細胞の寿命まで無病状態で生き続けることが可能なのだった。

そして肝心のオリジナルとクローンの違いだが互いに複数存在する場合は一卵性の双子と同じで外観や細胞、遺伝子レベルでも見分けは不可能である。

ただし精神エネルギーを感じ取れる能力者を通じてのみ、その精神波の微妙なずれで見分けられる。

クローン技術の研究結果に政府は本来の目的を着手し始めた。

今後、新生児を対象に病気に対して強いクローンにすべて入れ替えるといったものだ。

これがうまくいけば、出生率低下の抜本的対策の一部とし子供たちの死亡率も減り、医療分野でかなりの負担減を図れるし、新種の疫病などの対策も格段の進歩になると踏んだのだ。ただし公にクローンを着手すれば数々の人道団体、宗教界から猛反発を受けるのは解っていたので、秘密裏に行う事を前提に政府の機関は動き出した。

その機関に任命されたのは先の能力者探査を目的とした組織である。新たなメンバーを加え強化し事細かに各部署に対応し始めた。

組織の名前はクローン製造の誕生からバースと命名された。

そのメンバーの一部が今、徒具呂の様子を見に来た黒いスーツ姿の者達である。

バースはクローン研究やその他の技術を元に一手にクローン製造、誕生の大量生産を計画していた。

ただし一度に大量の精神エネルギーをコピーするには能力者の個別能力では限界があるため、精神波の増幅機械を開発し大量にコピーできるように計画した。

いま徒具呂が目の前に開発を終了宣言したこのドーム状の設備がまさにその精神波増幅装置なのである。当時の装置は思わぬ事故により施設ごと破壊されてしまった。

それを思い出したかのように徒具呂はそのドーム状の機械に向かい合い自ら作り出したにも拘わらず憎しみの目を向けていた。

「この機械に入り、クローンコピーを拒絶したものがすべてを破壊したのだ」

黒いスーツ姿の男たちの中のリーダー格が歩み出て徒具呂に話しかけてきた。

「徒具呂、まさかその機械を破壊するつもりじゃないだろうな」

徒具呂はゆっくりと振り向きスーツの男に答えた。

「そうだ、その通りだ、この施設を開発したのは当時の機械を再現し父の悲願をかなえる為。そしてもう一つは父を疎み孤独な立場に追い詰めた人間とその関係者をこの機械によって一度に集結させ無き父の恨みを晴らすこと。」

それはあの研究所爆発を再現しここに居るあなたたちにすべて死んでもらうこと」

徒具呂以外の一同に緊張が走った。ならば逃げるか、徒具呂を抑えなければ。

誰もがそう思った瞬間、スーツ姿の連中が入ってきた扉から人が現

われた。

白髪の髪を後ろに束ねて白い室内着の上下で静かにゆっくりと徒具呂にじっと視線を向けながら近づいてきた。

葉瑠音であった。

その後ろを無限が一緒に扉の影から出てきたが、扉を背にするとその場に立ち止まった。まるでその出口からは誰も出さないといった感じであった。

葉瑠音はさらに徒具呂に近づきスーツ姿の連中の前を通り過ぎ、徒具呂に後、数メートルの位置にまで来ると立ち止まった。

「徒具呂、いや尾熊おくま華尉流かいる。もうやめるのだ、

お前は真実を知らない」

徒具呂はその名前を告げられると右手を下げ、そのまま葉瑠音に向き直り震えながら、

「なぜその名を知っている、第一お前は誰なのだ」

「なんだい、私の事を知っているかと思っていたよ。

あの研究所爆発のときドームの中に居たのはこの私だと言ったら解るかい？」

徒具呂はますます震えていた。

遠い記憶に必死にアクセスして目の前にいる老婆を思い出そうとしていた。

しかし、徒具呂の記憶にはドームの中は思い出せない。

第一あの研究所の事故の経過は義理の父親である佐伯が何度も徒具呂に語っていたに過ぎないのだ。

「やはり、お前の記憶は曖昧なようだね。今から私がここにいる者たち全員にあのとき、あの場所で何が起こったか真実を見せてあげる」

そういい終わると、葉瑠音は両手を水平に広げ何かをささやきながら静かに目をつぶった。突然、現われた葉瑠音に、歩大尉、実芦、雨豆裸、中林他、一同は何も口に出来ずただ黙って事の成り行きを見守るしかなかった。

葉瑠音の身体が少し浮き上がったように見えた。

つま先が床に立つ様に伸び真っ直ぐになっている。いや、浮いているのだ。

その身体からドームの中で発しているような光が葉瑠音の中心から出ている。

最初は小さく、やがてそれは大きな光の輪となり広がってゆく。

それと同時に葉瑠音の髪が白髪だったのに、今は黒々としその表情もまるで十代の少女のように若くなっている。突然光の輪が大きくなり一瞬にしてその場に広がった。

その場にいますべての者達が真っ白い光の世界に引きずり込まれた。

研究所の入り口には一枚の看板があった。クローン開発庁 第C班。

入り口を抜けるとそこは巨大な競技場の様であった。

広いスペースの中心に透明のドーム状の機械があり、それを取り囲むように千差万別の機器が設置されて、個々の場所に多数の研究員がそれぞれのモニターをチェックしている。今、入り口を入ってきたのは少年で10歳ぐらいであろうか。

一番大きな机の前ですべての指揮を取っている男女に近づき、その女性の白衣の袖を引いた。

「あら、華尉流。此処に居てはいけないわ。あそこの休憩室にいて。そして弟の様子を見てあげて」

「でも、退屈なんだもん」

少年は少し身をくねらせて、女性を見上げた。華尉流の母、尾熊み美咲さきである

そして男性が話しかけた。

「しかたないなあ。ママは今忙しいから、パパが休憩室まで付き合っ  
てあげるよ、さあ行こう」

少年は男性を見上げると小さく頷き、手をひかれてその場を離れ

ていった。

男性は九品芦弾<sup>くしなろだん</sup>である。少年とその父親が休憩室に入ると、そこには生まれて3ヶ月ほどの幼児が安らかに眠っていた。

「ほら、弟はかわいいだろう、だから側にいてあげて起きたら教えに来ておくれ。それまでここでもう少し待っていてくれるかな」

「うん、わかった早く戻ってきてね」

父親は微笑むと少年のおでこにキスをして出て行った。

違う入り口から研究員が近づき話を始めた。

「例の能力者ですが、ほかの誰よりも精神波のパターンが安定しています。そしてかなりのパワーを摘出出来そうです。今すぐ実験しましょう」

「まあ、じっくりいきましょう。君の欠点はすぐに結果を求めたがるところだ。」

此処までせっかく辿り着いたのだから後は、一つ一つ確実に行きま  
せんか、佐伯くん」

「しかし、結果は明白です。今から始めれば明日の今頃には政府に報告できます。」

是非お願いします」

九品は、又いつもの事かとその研究員を見ていた。一度言い出したら納まらないのだ。研究熱心なのもいいが頑固な所も好し悪しだなど。

「解りました。で彼女は何処ですか」

佐伯は興奮していた。いままで自分ではなかなか結果を出せずじまいだったこの分野で、思い通りに結果を出せることに喜びを隠せなかった。

「今連れてきます」

佐伯は立ち去り、もう一方の待機休憩室に向かい一人の老婆を連れてきた。

葉瑠音であった。その容姿は今よりなぜか年老いて見える。ゆっくりとほかの研究員に肩を支えられて歩いてきた。



そしてドームの中の椅子に座らされると、腕に注射を打たれがっくりと、うな垂れていた。頭部にはヘッドキャップを着けられ手足は椅子に括り付けられてしまった。

九品と尾熊はデスクの前で佐伯の動きを見守っていた。

佐伯がすべてを指示し実験に取り掛かる。

「では、メインスイッチオン。接続確認、誕生準備」

ドームのスイッチが入ると中の葉瑠音が目を覚ました。

その目はじつと前を見据えていた。自分の状況を一瞬にして把握している様であった。

その実験を待ち構えていたように、正面入り口からバースのメンバーと思われる男たちが入ってきた。彼らはその状況を確認しながら各々で何かを語っていた。

葉瑠音はこの男たちの会話をすべて聞いていた。

いや、言葉を聞いていたというよりは彼らの心の中を透視していたと言ふべきか。

彼らは葉瑠音が能力を使い、クローンに精神エネルギーを移す時のすべてのデータを中央のコンピューターにバックアップできればこの研究所は無用の長物となると考えていた。その後この施設を研究員もろとも破壊し、事故と見せかければ秘密が外に漏れることはないであろうとも。

葉瑠音は直前に打たれた注射の薬物によって自分の能力が半分も制御出来ない事に気づいていたが、バースの連中のされるままでは自分を含めこの施設の者達がすべて殺されるのは時間の問題だと思い、何とか阻止しなければと考えを巡らせていた。

残された時間はクローン用精神エネルギーの移植が終わるまでだ。そこで葉瑠音は彼らの精神を操れないか試していたが、薬とこのドームにより思い通りに自分の精神エネルギーを操作出来ずにいた。残された方法は精神エネルギーを大量に放出させドームの設備を暴走させ機能停止にするしかないとした。

葉瑠音は精神エネルギーを少しずつ一点に集中し始めていた。

そして徐々にエネルギー値が上昇していることに、モニターをチェックしていた佐伯の表情が変わった。

今まで、どんな場合でも今回まで値が上がった事はなかったし、この様なエネルギー値では機械がオーバーロードで破壊されてしまう。周りの職員に声をかけてドームのスイッチを切るよう指示した。

葉瑠音が自分の精神波をコントロールするには不安定すぎた。

ドームのスイッチが切られたのにも拘らず、精神波エネルギーは出続けている。

主任たちも佐伯を見ながらいろんな機械を調整したが全ては手遅れであった。

職員に避難を呼びかけ始めた。

それぞれの職員は持ち場から出口に殺到していたが、全ての出口が外側から閉められていて、逃げるすべはなかった。

バースのメンバーらがすでにこの施設を封鎖してしまっていた。

そんな中、一人だけ違う行動を取る者がいた。

佐伯である。

佐伯は慌てて自分の部屋に荷物を取りに行き、研究データを取りまとめるとさっさと皆とは違う特別専用出口へ向かっていった。

休憩室には華尉流と弟が、身を寄り添うようにして外の状態から隠れるようにしていた。そこへその子達の親である九品と尾熊が必死の形相で入ってきた。

「間に合わない！地下のシェルターに早く入るんだ！」

九品が二人に声をかけ、シェルターのハッチを開き、そこへ華尉流が入り母親が、幼児を華尉流に手渡した瞬間、明るい閃光が主任夫婦に覆いかぶさるようにしてすべては光に包まれた。

ドームの機能は停止していたが、その中で溜まっていた精神エネルギーが行き場を失い一気に外に放出された。これは葉瑠音も予想外であった。

大量の精神エネルギーが多く、の機器と反応し物理的衝撃に変化し建物を内部から破壊する力に変わってしまった、周りの者達に破壊的な

衝撃を与えた。

多くの研究員は死亡した。

シエルターにいた子供たちは幸い無事であったが内部に入ることが出来なかったその両親は衝撃をよけ切れなかった。

意識はなくその場に二人寄り添うように倒れ今まさに絶命寸前であった。

葉瑠音は自分が行ったことで多くの命が消えたことにショックを受けていた。

このことは何をもっても償えることは出来ないだろう。ならば今助けられる命の炎だけでも消さずに出来る方法をとるしかない。

葉瑠音はその夫婦だけでも助けたいととつさに彼らの精神波を自分の体内に移した。

そして研究所内に用意されていたクローン体に移植しようと考えたが、

今の衝撃でほとんどのクローン体は損傷してしまっていたが、

一体だけシエルターと同じ素材でできたカプセルに守られた新生児のクローンがあった。葉瑠音は自分の能力も限界状態であった。

一体に二人分の精神波がうまく移せるか解らなかったが、今は躊躇している時間がなかった。

このままでは葉瑠音も夫婦の精神も崩壊してしまう。

葉瑠音は決心すると一気に夫婦の精神波をその新生児に送り込んだ。そして葉瑠音はゆっくりと破壊されたドームから出ると、クローン体の新生児がいるところに歩み寄った。新生児は無事であった。安らかに眠っている。

それは葉瑠音がおこなった精神エネルギーの移植が成功した事を物語っていた。

気が付くとシエルター内部から幼児の泣き声が聞こえた。

新生児を抱きかかえたまま葉瑠音はシエルター内部に入った。

なぜか幼児だけがそこにいた。この子の兄は見当たらなかった。

葉瑠音はもう自分の本来の力がだいぶ失われた事を感じていた。とにかくここを出なければ。

葉瑠音は幼児と幼児の両親の精神を移植された新生児を抱きかかえながら、

残る力を振り絞り建物の外に消えていった。

葉瑠音は気が付かなかったが、幼児の兄である華尉流はシエルターで衝撃を受けずに無事であったが、外に両親が倒れているのを目にし、大きなショックを受け、記憶も喪失してしまっていた。

呆然と建物内を歩き外に向かっていたときに、先に建物外に逃げる寸前で衝撃を受けた佐伯を見かけ、佐伯と共に建物の外に出てしまっていた。

佐伯は両目を失明し身体もかなりの怪我を負っていた。

華尉流と佐伯はその後親子として暮らして行く。

この建物を出た葉瑠音はかつての知り合いを尋ね、身を隠した。

幼児は自分が引き取り、新生児はその知り合いに預け将来自らが引き取る事を伝えていた。

施設内のすべての者達の意識が本来の場所に戻っている。

徒具呂は頭をかかえその場にうずくまっていた。

実芦に触れたときに見た遠い記憶が、今全てに繋がりの事故の鮮明な記憶と本当の自分に出会えたのだ。徒具呂はもう徒具呂では無くなっていた。

尾熊 華尉流になっっているのだ。サングラスもはずしている。

「今の私に出来ることはあるのか？」

すべてを受け入れた華尉流は迷っていた。

今まで両親と佐伯の復讐を誓いそのことだけで生きてきた華尉流にとって、真実はまったく違うことであった。

ならばこの怒りは何処に向ければいいのか。

「何も迷うことなど無い。ただ私が判断し行ったことにより多くの

命が失われたことは事実だ。そしてこれはもうどうしようもない事であるのも確かだ。

私が出来るとは全ての真実を伝えることだけだ」

葉瑠音は白髪に戻り静かに佇んでいた。

華尉流はその場にいたバースのメンバーを見た。

「本当は全てを知っていたな。なぜ黙っていた」

黒いスーツのリーダー格に詰め寄り胸倉をつかみ、華尉流は攻め立てた。

「ま、待て。その時のメンバーはあの事故で全て死んでいる。それは今解ったはずだ。

それに我々はその時点ではメンバーに入っていない。そうだろう徒具呂」

「言い訳などするな、その事は今でもバース本体の考え方として変更は無いはずだ。

だから俺はお前たちを殺し、それに係わる全てを消し去るつもりでいた。

そもそもクローンだの移植などどうでもよかった。

俺のすべてを奪い去った世の中に復讐をするためにこの機会を待っていただけだ。

それも今のビジョンですべては覆されたが」

激しくその男を突き飛ばすと華尉流は向き直り葉瑠音に近づいた。

そしてその手をそつと握る。片方の手にはまだスイッチを持ったまままだ。

華尉流は穏やかな表情を見せていた。葉瑠音は華尉流の気持ちを理解した。

華尉流の身体に暖かい物が流れ込む。

そしてあの研究所の事故で消えてしまった両親の精神の在り処を葉瑠音の中から受け取っていた。華尉流は頷いた。

そうだったのか、だから俺はあの時記憶のきつかけを見たのだ、と。「おい、その警察の皆さん、もう暫く付き合ってもらおう。

皆さんの命がこのスイッチに掛かっているのは当に解っていると思うが、

再度認識してもらおう。そしてその少女に此处に来てもらおうか」

華尉流は葉瑠音の側に立ったまま、スイッチを握った手で実芦を手招きしている。

歩大尉は実芦を見た。その表情は落ち着いていた。

実芦は歩大尉と中林、雨豆裸、葉瑠音とゆっくりと視線を送ると歩大尉の手をそつと放し、中央のドームの近くにいた華尉流と葉瑠音の側に歩み出た。

中林は警官たちに視線で余計なことはするなと制した。

ドームは絶えず中央から光を放出し、強力なエネルギーを蓄えたまま震えていた。

華尉流の側まできた実芦に華尉流は近づきその手を握る。

一瞬、華尉流の表情が強張ったがすぐに安らかな表情に変わり、その目から涙が零れ落ちてきた。華尉流は泣いていた。それは全てが満たされ安息を得た者が見せる姿であった。実芦の表情はやさしく華尉流を見つめていた。華尉流は頷きその手を離した。

「葉瑠音の側にいてやってくれ」

実芦の手を葉瑠音に預け、華尉流はバースのリーダーの側に歩み寄る。

「お前には責任をとってもらおう」

華尉流がまわりに告げた瞬間だった。

突然大柄な男が素早く走り寄ってその男の腕をとり自分の前に立てのように引き寄せその顔に銃を突きつけた。

中林たち警官に緊張が走った。

「徒具呂、あんたはもうこれ以上何もなくていい。後は俺に任せてくれないか。」

こいつは俺に始末させてくれ」

無限がその男を締め上げる。

気が付けばバースの他のメンバーは既にすべて倒されていた。

それは一瞬であつただろう、これが無限のもつ本来の能力なのだ。  
「俺は、あんたに救われた。あんな使い道の無かつた俺に足と完全な肉体を与えてくれた。それはすべてこのクローン技術によるものだったのだな。」

あの時は気にしてはいなかったが、今改めてあんたの凄さがわかったよ。

そしてあんたに恩返しするのは今しかないと感じた。

だからもう無理はしないでくれ、俺がこいつらに片を付けさせてやる」

無限はその男を引きずるように車のある出口に退いてゆく。

中林はまだ警官たちを制していた。

問題はドームの唸りと徒具呂の持っているスイッチだった。

このままでは誰も手を出す事が出来ない。

無限は締め上げた男の耳元にささやいた。

「じつとしてな、お前にはそれ相当の責任を取ってもらう」

「な、何をするのだ。離せ」

「いや、それが今回はただでは済ませられない。だいぶ偉そうな格好をしているが、

俺はお前のあの顔と拳を忘れることが出来ないんだよ。

覚えているか？この取立屋さんよ！」

さらに激しく腕を締め上げ無限はその男を攻め立てた。

無限はこの施設に入って車を止めたドアの前で葉瑠音に聞かされていた。

「あの、黒いスーツ姿の中で話をしている男に見覚えは無いか」

無限は扉の影からじつとその男を見ていた。

何度か顔の見える位置に移動し見ていると、過去の記憶の中に出てきた忘れもしない男の顔と重なった。

そうだ、あいつは俺が両親と引き離された時に、あの家を踏みにじり、

殴りつけ唾を吐きかけられた男だ。あいつの拳と顔は忘れもしない。何度かその姿は見掛けてはいたが、何時も後ろ姿か、身を隠すように徒具呂と話していたから気が付きもしなかった。無限の怒りは燃え上がっていた。

ちようどいい、この機会に一気に奴らを潰してやる。

元々奴らは徒具呂や俺たちに無理難題をいつも押し付けてきていた。その男をいよいよこの手に捕らえて締めあげている。

「やめてくれ、欲しい者なら何でも揃えてやる」

「だから、言っているだろう。お前の罪を俺が裁いてやる。だから観念しな。」

あんたにその昔、両親を殺された者だ、いまさら思い出せなくてもいい。

そして今まで皆を苦しめてきたことも罪の一つだからな」

男はこれまで自分のしてきた事を思い出そうとしていた。

この組織に入る前は下っ端で町の人間同士のトラブル処理、いわゆる掃除屋を長年やってきた。当然、人々の恨みを買うことばかりだった。

だがそんなことは見ない様、感じない様にしてきた。

いちいち気にしていたら命が幾つあっても足りはしないだろう。

その結果何とか今の組織に通じる人脈にたどり着き過去を偽り組織内の一部に食い込めた。後は与えられた仕事を失敗なく続け今の幹部の地位に辿りついたのだ。

しかしそれも此れまでか。男は諦めていた。それほどまでに無限の気迫は強かった。

この迫力は尋常じゃない。この男も俺を殺したらただではいけないだろう。

そう思うと逃げ道すら考えつかなかった。

無限は車まで引き下がると、男を後部トランクの上に仰向けで押し倒し持っていた拳銃でその顔面を殴ると、男はうめき声を上げ気絶した。



手足をすばやく縛りつけ、トランクにその身体を放りこむと、自らは車の運転席に乗り込みエンジンをかける。

追っ手が来ていない事を確認し、地上に向うエレベーターの中に車両ごと乗り入れた。

そしてエレベーターは地上に向かって大きな音と共に上昇していった。

「さて、もういいでしょう。私の気持ちは納まりました。観念します」

華尉流はバースの男が無限によって連れ去られるのを見送ると、手に持っていたスイッチをそつと床に置いた。

それと同時に中林は警官たちに合図をし、それぞれに関係者たちに向かつて散っていった。

「葉瑠音、大丈夫か」

中林が近づいて無事を確認する。葉瑠音と実芦が寄り添い中林に頷いて見せた。

「君、大丈夫か」

警官が歩大尉の肩に手を掛け顔を見ながら確認する。歩大尉は大丈夫と答えている。

すでに華尉流は警官達に手錠を掛けられていた。しかしその顔は安らかだった。

何の抵抗もすることなく警官の指示通りにしていた。

雨豆裸も抵抗はしなかった。華尉流があきらめたことで一緒に付いて行く決心をしていた。二人は逮捕され警察に連れて行かれるだろう。

施設の中で圧倒的な存在を主張していたドーム状の設備は、華尉流の指示で電源を落とされ沈黙をしている。

皆がいる建物内もすっかり静かになり、すべての人々は平静さを取

り戻っていた。

中林は外に連絡をして御手洗と結城にすぐに此処に来る様に伝えると、

1時間ほどで行けると返事があつた。

無限にあつという間に倒されていたバースのメンバーも連れ去られた一名を除いてすべて確保された。

しかし彼らは一時的に警察で取調べを受けるだろうが、その後どうなるかは大体解る。

政府の機関に属する奴らは好き勝手放題で回りに散々な迷惑や被害を出して起きながら何故か何時も無罪放免になる。

その事を考えると一体何が正義で何が悪なのか、すべてが信じられなくなってくる。

中林の心にむなしい風が吹いていた。

歩大尉は葉瑠音と実芦に寄り添っていた。今までのことが繰り返しの思い出された。

葉瑠音が歩大尉にそつと話しかける。

「すまなかつた。今まで伝えることが出来なくて悪かつたな、歩大尉。」

今のお前なら解ってくれるだろう。すべての事を、真実を伝える時が来た。

実芦の手を取り本当の姿を受け取るがいい。

実芦、歩大尉に今までのお前たちの思いをすべて話してあげるがいい」

「何を？二人とも変だよ、一体どうしたって言うんだ」

歩大尉はいつもの二人と違うものを感じていた。

葉瑠音は元気がなくいつもより何歳も歳をとってしまったていた。

そして実芦はずっと大人びていた。見た目はまったく変わっていなかったが、

その瞳の光がまるで大人のようにだった。

必死に抵抗をするかの様に、二人の言う意味を解るまいとしていた歩大尉だったが、

実芦が近づきその両手をそつと握った。

「歩大尉、私たちの小さな男の子。あなたのパパとママは此処に何時も居たのよ」

その言葉を聞いた途端に歩大尉はすべてを感じ取っていた。

葉溜音のビジョンに登場していた男女は、僕の探していた人たちだった。

そしてシエルターの中で華尉流に抱かれていたのは僕だった。

実芦。いや、お父さん、お母さん、いつも側に居てくれたんだね。

「歩大尉、あなたはがんばったわ、そして良くここまで大きく成長したわね」

今まで見慣れた笑顔が、こんなにも懐かしい微笑みに見えた。

「お父さん、お母さん」

こらえきれずに、声を上げて歩大尉は泣いた。

瞳から大粒の涙がとめどなく流れた。

「私たちは何時でもあなたの側にいられて幸せよ。たとえこの身体が仮の姿であっても」

深く頷くしか今の歩大尉には出来なかった。

そして実芦は歩大尉を強く抱きしめていた。

「歩大尉、聞いて。今はいろんな事があつて理解できないと思うけれど、貴方は立派な大人になろうとしている」

今は歩大尉の両親としての実芦が話し始めた。

「葉溜音のおかげで、私たちはこの実芦の身体で歩大尉の成長を見守る事が出来た。」

そして何度か貴方の事を、この実芦の身体で直接手助けをする事も出来た。

けれどそれも今日まで。

これからは、貴方はもう一人でちゃんと生きていける。何時までも私たちは、実芦の身体を借りている訳には行かないから私たちも出来ればこのまま貴方のそばに居て見守ってあげたいけれど、

実芦自身の人生も返してあげないといけない。

これから、実芦は貴方の友人として、貴方の身近に居る少女達と同じ存在になる。

そして私たちは実芦自身の知識としてのみ残り、今日を最後にこの様に現われる事はないと思って」

歩大尉は頭を横に振り泣きながら実芦を抱きしめた。

「でも、もう少しだけ側に居てほしい。言いたい事がたくさんあるんだ。今は何も言えないけど、とにかくもつと、もつと居て欲しいんだ。やだよ、せつかく分かり合えたのに」

そう言いながらも歩大尉は状況を理解した。

そうだよ実芦の本当の心はそんな事は望んでいないはずだ。

両親と離れるのはいやだが、それはあの時にもうすでに起こっていた事。

それが今まで側に居てくれたとしたら、これ以上の幸せは無かったじゃないか。

僕ももう子供じゃない。

それに誰も居なくなるわけじゃない。実芦はそのまま居てくれるんだ。

「解った。お父さん、お母さん。今までありがとう。

あの時の僕は小さくてお別れが出来なかったけど、今の僕なら素直に見送れる。

でも、本当は辛いよ」

歩大尉の目から再び涙が零れ落ちていく。幾つも幾つも。

「ありがとう。そしてとても優しい人になったわね。歩大尉。私達のわがまを許してくれて本当にありがとう。何時までもその心を忘れずにいて。」

そろそろ私たちはお別れね。葉瑠音と実芦を大切に。さようなら私達のかわいい子」

「さようなら、お父さん、お母さん」

その声を聞くと実芦がそつと目を閉じた。

歩大尉がその温もりを今一度確かめようと強く抱きしめた。

すると、ゆつくりと草原を吹き抜けていく風が、やがて太陽の元へすべて吸い込まれ去っていくような感覚が押し寄せてきた。

目を閉じているのにはつきりと見たのは、実芦から離れ出た霧のような両親の魂が歩大尉の身体を優しく包み今一度その存在を確認すると、やがて本来の人の形をとりゆつくりと歩きながら離れてゆく後姿だった。

何度も振り返り遠い光の先に歩いていく。やがて光の中心に両親が消えた。

「ちょっと、歩大尉。痛い、もう苦しい」

気が付くと実芦が歩大尉の顔を覗き込んで、歩大尉の腕をはずそうとしていた。

「あ、ごめん。気が付いた？」

「なに言ってるの。ずっと起きてたよ。ただ歩大尉の両親が私を借りていただけだから」

歩大尉はあつけに取られていた。

両親の意識のときは実芦は眠っているような感じだとばかり思っていたからだ。

「実芦、平気なのか。じゃあ今のは全部解っているってこと？」

「うーん、前から歩大尉の両親は私の身体を使うようだったの。」

って言うか、小さい頃から無意識に体が動かされている感覚はあったんだ。

そうそう昔こんなことあったよね。覚えてるかな、小学校の夏休み。

二人で川に遊びに行ったよね、あの時歩大尉が川に落ちたとき、本当に慌てた。

だって岸で見えていてどんどん沈んで行ってしまうんだもの。

何も出来ずにどうしようもないって思ったときに、男の人の声が聞こえてそのまま私の手が、歩大尉の身体を何の躊躇も無く水の中に掴みに行ったの。

だってあの時、水の中になんか絶対に入れなかったはず。

泳げなかったし正直水が凄く怖かったもの。でも歩大尉を助ける事が出来た。

今思えば、きっとあれは歩大尉のお父さんだったはず。」

歩大尉は頷いた。あの時水面には男の人の気配があった。

でもあとから実芦しか居なかった事を思い出していた。

そうなんだ、やっぱり何時も側に居てくれたんだね。歩大尉は納得すると実芦を見つめた。

「実芦、改めてこれから宜しく」

実芦の手を強く握った。それを実芦も握り返した。

「こちらこそ、宜しく願います」

二人は笑っていた。葉瑠音もそんな二人をみて微笑んでいた。

本当に良かった。

私の罪は許されはしないが少しでもいい方向に物事が変わっていければ此れに変わるものはないと感じていた。

周りはずっかり片付いて、皆撤収の準備をしていた。

中林が葉瑠音のほうに歩いてきた。

「そろそろいいかな、これから外に行く連中と一緒に此処を出ようと思う。」

長く待たせちゃったが、問題なければ行こう」

中林は葉瑠音をいたわりながら、歩き出した。歩大尉と実芦もその

後続いた。

エレベーター棟の外はもう夕暮れだった。

長く地下に居たせい、今が何時なのかまったく感覚がなかった。でもこうして外に皆無事に出られて良かった。

中林は地平線に赤く沈む夕日の鮮やかさに感慨深げだった。

やがて目的地別に車が次々走り出した。

歩大尉と実芦と葉瑠音は中林の車に同乗し、葉瑠音の家へ向った。

葉瑠音が体の治療は自宅が一番いいと言ったので、皆自宅に向うことにした。

実芦も今夜は葉瑠音の家に止まることにした。

中林の車は赤く燃える夕日の光を浴び、丘の上の家へ向っていった。

## エピローグ

歩大尉は朝食の準備をしていた。

テーブルにいくつか小皿を並べて、自分は弁当を用意した。

「ハル！じゃあもう行くからね」

急いで鞆に荷物と弁当を詰め込んで、玄関から飛び出していった。坂を下りていくといつものように実芦が待っていた。

「遅刻、遅刻、急いで！」

「解っているよ」

歩大尉は実芦に弁当を手渡しながら学校へ走っていった。

実芦も受け取った弁当を大事そうに抱えながら後に付いて行った。

あの事件からどのくらい過ぎただろう。

歩大尉の記憶にはすべてのことが鮮明に思い出される。

葉瑠音の本当の姿、実芦の中に居る両親との出会い、そして自分の兄、華尉流の存在。

いろいろな事がめまぐるしく歩大尉の前に現われた。

しばらくは自分の心の整理が付かなかったが、何日か過ぎた今はだいたい落ち着いていた。

実芦とも昔のように自然に振舞えるようになったし、葉瑠音も以前のように回復してきた。

数日後、テレビのニュースで黒いセダンが港の沖に沈んでいたと伝えていた。

その中には男が一人運転席に座ったままで死んでいた。自殺であった。

そしてトランクには黒いスーツ姿の男が、手足を縛られたまま閉じ込められて水死していたとも。

彼らはあの研究所から車で出て行った二人であった。

中林がその後、歩大尉の家に訪れて皆に報告していった。

華尉流は現在警察の保護のもと裁判中であった。歩大尉は彼の今後に複雑な思いを感じた。

そして雨豆裸だが、彼女は未成年ということで保護観察の元で高校に通えるようになった。実は身元引受人は中林が買って出た。

雨豆裸は中林の遠い親戚ということで苗字を鳥乃<sup>トリノ</sup>とした。

そして住居は実芦と同じマンションで共同生活を始めていた。

いろいろなつらい思いや、悲しいことがこの事件で繰り返されたが、雨豆裸が高校に通えるようになったことは唯一うれしい出来事だった。

「おはよう、歩大尉、」

教室に入ると雨豆裸が話しかけてきた。同じクラスだ

「おはよう、今日も早いな」

「だって、ここに来るのが楽しくてさ」



本当にうれしそうな雨豆裸だった。巻き毛の茶髪も今はストレー  
トの黒髪にしてその制服姿はまるつきり普通の女子高校生だ。  
周りのクラスメート達ともすっかり打ち解けて、なかなかの人気者  
のようだ。

「そうそう、歩大尉。実芦も言っただけど部活決まった？」

またそれが、歩大尉はため息をついた。いまだ何にするか決めて  
いない。

「やっぱりまだ決まってるないんだ。じゃあ、軽音楽部において。  
まだバンドメンバー募集してるから」

「それだけは勘弁してくれ、だってあそこ女だけじゃないか」

「いいじゃん。おいでよ。ねえ、ねえ」

そんな押し問答の中、やがて始業のチャイムが鳴りいつもの様に  
一日が始まった。

## 九部（後書き）

長々と読んでいただいております。  
とりあえず、終わります。

また、書きますので宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2553y/>

---

HARUNE

2011年11月6日11時04分発行